

第三章 調査概要

1 調査の経過

飛鳥保存が広く叫ばれ始めた1969年から、奈良国立文化財研究所が藤原宮および飛鳥地域の遺跡の調査を担当するようになり、1973年4月には「飛鳥藤原宮跡発掘調査部」が新たに設置された。それ以降、宮殿跡およびその関連遺跡である藤原宮・京、小墾田宮推定地、稲淵宮殿遺跡、水落遺跡などや、寺院跡およびその関連遺跡である坂田寺、和田廃寺、檜隈寺、飛鳥寺、川原寺、大官大寺、平吉遺跡などの調査を担当してきた。これらの調査は、道路改良、宅地造成、公園造成、公共施設の建設などの開発事業に伴って実施したものも多いが、飛鳥の歴史的風土を構成する著名な重要遺跡の性格を解明するため、当調査部が主体的に取り組んだ計画調査もある。豊浦にある小墾田宮推定地、南浦や小山に所在する大官大寺跡の発掘調査は、当調査部が初期の段階に取り組んだ計画調査の代表的なものである。

一方、飛鳥の東端、桜井市山田に所在する山田寺跡も、土壇や礎石をよく地表にとどめており、また文献史料から造営の過程やその後の盛衰がたどれる寺院跡として、さらには施主である石川麻呂の悲劇の舞台として、早くから識者の注目を集める場所であり、1921年3月の指定以来、国などによって保存の措置がとられてきた。そして文化財保護法が施行されてまもない1952年3月には、特別史跡の指定をうけ、1975年度には指定地の中心部を国が買い上げ、史跡公園として整備する方向が示されたのである。ところが、塔と金堂の土壇および講堂の礎石は、地表からも明確に読み取れるものの、それを囲っていたであろう回廊となると、講堂の両脇に取り付くのか、金堂と講堂との間を通り抜けるのか、それすら明確ではなかった。ましてや、伽藍正面の中門の位置や寺域の四至となると全く想像の世界でしかなかった。かような資料不足の状態のまま、史跡公園化の事業を実施するのは、事実上不可能であり、まず発掘調査を行い、山田寺跡についての基本的なデータを解明することが急務と思われた。このため、文化庁とも協議の上、国有地となった伽藍中枢部を南から北へと、順次、発掘調査することとなった。

調査に至る経過

1976年4月、塔および中門や西面回廊を対象とする第1次調査を開始した。そして、1977・1978年の両年度にわたって金堂や北面回廊の解明を目的とする第2次調査を行い、次いで1979年度に第3次調査として講堂・北面回廊を発掘した。この3次の調査で、一応、当時国有地となっていた伽藍中心部分の調査がほぼ終了したことになり、北面回廊が講堂に取り付かず、金堂と講堂の間に設けられていたことなどが明らかになった。

調査計画

ところが一方、国有地内という限られた範囲の調査であるため、回廊の東西幅についても、なお解明するまでには至らなかった。このため整備計画を立案する上にも、東面回廊の位置を確認することは必須であり、1982年度に第4次調査が実施された。この調査では、初めて民有地を借用しての調査であり、東西に長い水田の形状から、東面回廊とその東に存在が予想される寺域東限の施設を探ることも目的の一つに加えられた。調査はほぼ順調に進行したが、最終

第三章 調査概要

調査計画の見直し

段階にいたり、塔のほぼ東に開設した東面回廊の調査区で、予想もしなかった「倒壊状態で埋没した回廊建物」が発見されたのである。小さな発掘区であったため、柱間約1間半分の回廊が確認されたに過ぎないが、その発見は、調査計画の見直しを必要とした。すなわち、埋もれていた回廊の建築部材は非常に残りが良好で、かつ長尺の部材がなお発掘区の北および南にのびていることは明らかであった。部材を完全な状態で取り上げるためには、隣接地の引き続いで調査が必要となり、その南側を第5次調査として1983年度に、その北側を第6次調査として1984年度に実施したのである。

史跡整備の資料を得るという調査が、東面回廊建物という思わぬ発見でしばらく足踏みしたのである。しかし一方、回廊建物がそのまま埋まっていたという大きな出来事により、地元住民の山田寺跡保存に対する関心呼び起こし、指定地の追加指定（1982年12月4日告示）に引き続いて、土地の公有化も順調に進展していった。

こうして寺域のほぼ全域が史跡に指定され、その中心部分の大半が公有地となって、整備のための必須条件はほぼ整えられたのである。しかし、整備計画の立案という観点からすると、「東面回廊」発見以降、その調査に集中したため、必要なデータは充足しておらず、なお、確認調査の継続が求められたのであるが、発掘現場から取り上げた建築部材の整理作業とその科学的保存処理の作業が急務として待ち受けていたため、引き続いで調査は不可能であった。その作業が一段落した1989年から現地調査を再開し、1989年度には第7次調査として南門と寺域南方を、1990年度には第8次調査として寺域西限と回廊東北隅を確認した。

整備工事

一方この頃から、文化庁内部においても予算確保の動きが活発化し、1993年度から5箇年での工事計画が採択されたのである。こうしていよいよ整備工事着手となるのであるが、実際、実施設計の段階に至ると、なお細部でデータ不足が指摘された。それは特に整備造成高と遺構保存高との調整において顕著であり、その確認のため、工事の進行に伴って、3次分の調査を実施した。1994年度の寺域東南隅を対象とした第9次調査と、1995年度の南面回廊（第10次）、寺域南辺（第11次）の調査がそれである。

以上のように山田寺跡の発掘調査は、1976年4月の第1次調査開始以来、1996年12月の第11次調査終了まで、実に20年の長きにわたって調査を重ねてきた。その総発掘面積は、約10,500㎡であり、これは史跡指定総面積約33,000㎡の1/3にあたる。そしてこの間、塔、金堂、講堂、回廊という主要堂塔と南門や宝蔵、寺域四至を限る大垣などの諸施設の位置と規模・構造を解明してきた。その成果は、本報告書において順次明らかにするのであるが、倒壊し埋没していた回廊建物などの部材約1500点については、別に『山田寺出土建築部材集成』（奈良国立文化財研究所史料第40冊）を1995年3月に刊行し、その詳細を紹介している。また、十数年にわたる歲月をかけ保存処理した東面回廊の部材は、当研究所「飛鳥資料館」（明日香村奥山所在）第2展示室において、北から13・14・15間目の3間分を実際に組み上げて再現し、1997年4月以降、展観に供している。そして、「特別史跡山田寺跡」の現地についても、史跡整備工事（第1期）が2001年3月に完成している。本報告書とあわせて展観ご利用いただければ幸いである。

Tab.2 各次調査の地区・期間・面積一覧

次数	調査地区	字名	調査期間	面積
第1次	5BYD-L・M	塔・中門・西面回廊	1976. 4.28~1976.10.13	2,700㎡
第2次	5BYD-K・L	金堂・北面回廊	1978. 1.17~1978. 7.31	2,500㎡
第3次	5BYD-K・L	講堂・北面回廊	1979. 5.11~1979. 9.14	1,300㎡
第4次	5BYD-L・M	東面回廊・寺域東限	1982. 8.23~1983. 1.27	600㎡
第5次	5BYD-L・M	東面回廊	1983. 5. 9~1983.10.31	527㎡
第6次	5BYD-J・M	東面回廊 寺域東北隅	1984. 8. 6~1984.12. 6	572㎡
第7次	5BYD-N	南門・寺城南限	1989.10. 9~1990. 2.22	1,150㎡
第8次	5BYD-L	東面回廊・寺域西限	1990. 8.27~1990.12.19	800㎡
第9次	5BYD-A・F	寺域東南隅	1994.11. 7~1994.12. 7	80㎡
第10次	5BYD-F・N	南面回廊	1996. 5.10~1996. 8. 7	170㎡
第11次	5BYD-A・H	寺城南辺	1996.10.21~1996.12.16	175㎡

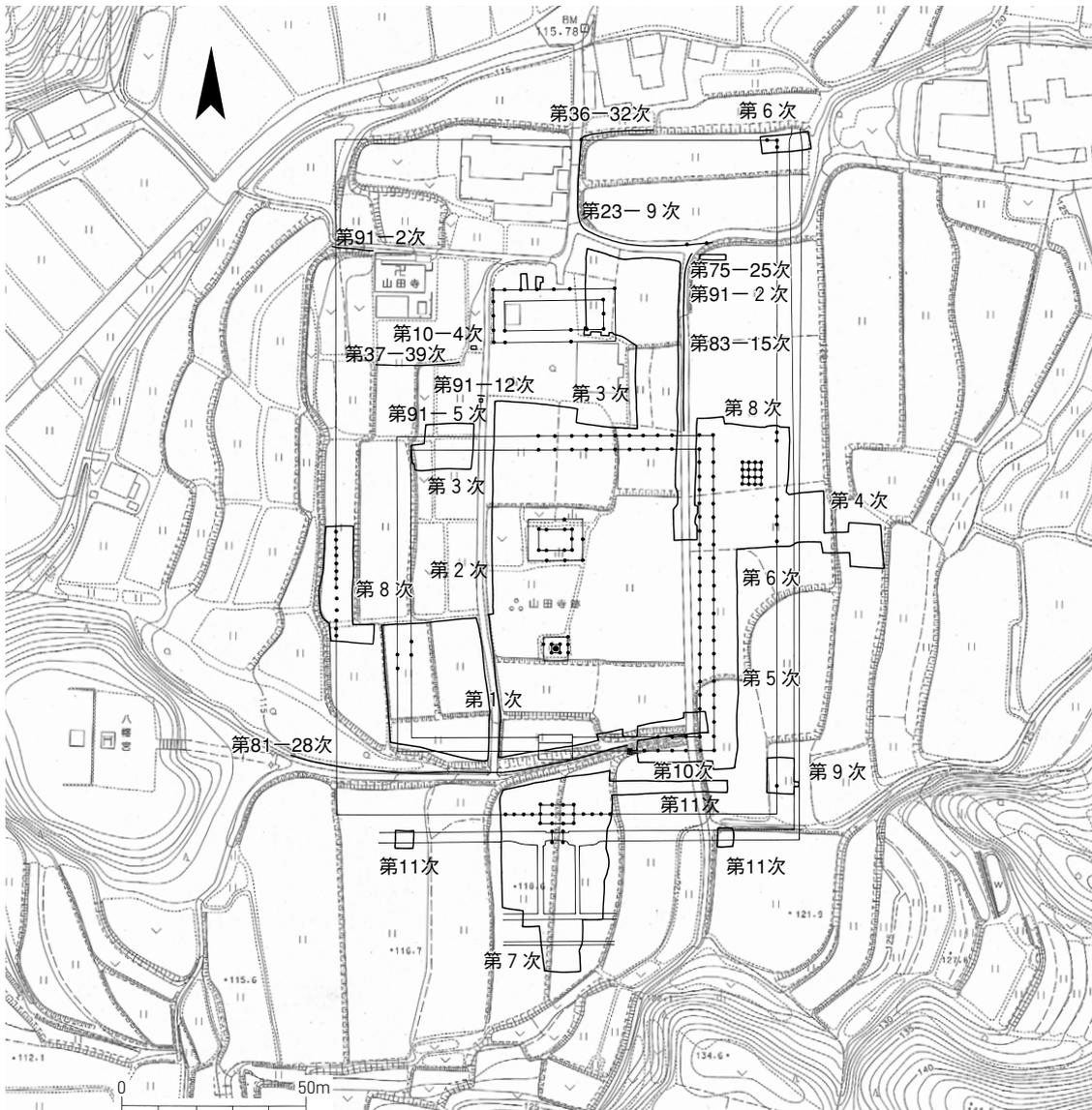


Fig.2 調査次数と区域 1:2000

2 調査地域

A 遺跡の立地と環境

安倍山田道 山田寺が営まれた地理的かつ歴史的な環境を考える場合、安倍山田道（以後「山田道」と略称）を抜きにしては語れない。

磐余と飛鳥・軽の地をつなぐこの古道「山田道」は、奈良盆地の東辺部を南北に走る「上ツ道」が多武峰（主峰・破裂山619m）から北西に派生した山塊に阻まれて向きを南西に変える「安倍」付近から始まる。「生田」から山塊の裾に沿って西南方に走るこの古道も「山田」を抜けた辺りからはほぼ真西に向きを変え、以降は「奥山」「雷」「豊浦」「和田」などの地をむすびながら「軽」に至って、盆地中央を南北に貫通する古道「下ツ道」へと接続する。

安倍から山田にかけてのこの斜め道は、実は「近江伊賀断層」と呼ばれる地質構造によって形成された地形に沿うもので、断層自体は東へ「浅古」「女寄峠」を経て「榛原」「名張」へと伸びていく（『地理編』『桜井市史』下巻 1979年）。この断層の走向は北60°東前後であるものの、「安倍」から「山田」の間は、部分的ながら略45°に走向しており、南北方向の道を東西方向へ変換するのに好都合な地形といえる。

地理的環境 一方、この断層線は、奈良盆地の東南に位置する「竜門山地」の西北縁を形成しており、その西北向きの斜面は大和川の諸支流である小河川が複雑に浸食し、出入りの激しい山麓線となっている。この竜門山地は、標高904mの竜門岳を主峰とする山塊で、「中央構造線」の北に隣接する「領家帯」の花崗閃緑岩を基盤としており、山地の北ないし西北麓の裾に起伏する低い丘陵地帯は、それら花崗岩の風化土で形成されている。

遺跡が立地するところは、この西北から西北西に下がる丘陵の端部にあたり、標高116～122mである。遺跡のほぼ東1kmには標高303mの小頂部があり、それへ至る斜面は比較的急で浸食も受け、凹凸の激しい複雑な地形を示している。全般的に地盤自体が脆弱な花崗岩等の風化土であることから、東面回廊倒壊などと結びつく出水による「土砂崩れ」などの災害は、大小の差はあれ、頻繁に生じたものと考えられる。

遺跡ののる丘陵の東辺と南辺には、北と西に流れる二つの小河川がある。この2本の小河川が分水する丘陵の上方、標高200m余の地には「高家」の集落があり、そこには6世紀後半から末頃のいわゆる「群集墳」が多数残されている。そのことからすると、古墳時代にはすでに人々の利用する土地であったことがわかる。一方、二つの小河川のうち北流するものが「米川」で、「生田」から西北に向かい耳成山の北麓を流れて大和川の支流である「寺川」へ流れ込む。

また西への流れは「奥山」を経て北へと向きを変え、さらに「南山町」にて香久山の東南裾を斜めに沿うように流れる「戒外川」となり、「東池尻町」にて米川に合流している。このように遺跡周辺は、大局的には米川を経て寺川、大和川へと流れる水系に含まれるのである。

歴史的環境 「山田道」の名が史書に表れるのは、よく知られるように『日本霊異記』上巻の「小子部 輕」が雷を捉える説話（第一話）に関してである。すなわち雄略天皇から雷を捉えよと命じら

れた侍者の栖軽が、「磐余宮」から馬に乗って走り出、「阿倍の山田の前の道」を豊浦寺の前から「軽の衢」へと駆け抜けたとある。「磐余宮」の所在については、明確にその位置を示せないが、「磐余」が香久山東北麓から三輪山西南麓にかけての地域であることは、ほぼ一致をみているから、栖軽が宮から飛鳥を経て軽に向けて抜けたその道が、山田寺の前を通るものであり、それが「阿倍の山田の道」と呼ばれていたことが判る。



Fig. 3 山田寺の位置と周辺の遺跡 1:30000

このことからうかがえるように「山田道」が「磐余」と「飛鳥」を結ぶ幹線の道であるとする、もう一つ別の史実が想起される。それは推古天皇16（608）年、遣隋使「小野妹子」の帰国に伴って隋使「裴世清」が来朝した記事であり、その一行を、飾り馬75匹を率いた額田部連比羅夫が「海石榴市」で出迎えている。この「海石榴市」の所在地も未確定ではあるが、一般的に「桜井市金屋」付近という想定に大きな異論もないから、そこに到着した隋使らが「小墾田宮」へ向かった道は、「山田道」と考えてよい。隋の正使とそれを迎える飾り馬一行のきらびやかな隊列が「山田道」を西に進む情景が目には浮かぶようであるが、その当否は別にしても、外国使節入京の幹線道路として「山田道」が重要な役割を担っていたことだけは、十分に推測できるのである。

このように「山田道」が、東方から「飛鳥」へ至る幹線として機能していたとすると、「飛鳥」に入る直前の「山田」の地は、重要な意味合いを持って来る。現在の「山田」の集落がある丘陵は、前述したように小規模ながらも雨水を東西に分ける尾根筋にあたっており、「山田道」もその付近で「峠」を形成する。すなわち「磐余」からの登りをすぎ、ようやく峠を越えて「飛鳥」の地を目前にして一息つくところに「山田寺」がある。

同地はまた、寺造営中に石川麻呂の「山田の家」の存在を伝えているから、そこは「飛鳥」の東の要衝として、早くから蘇我倉山田石川麻呂の一族が住むところであったのだろうか。同様な状況は、河内の「近つ飛鳥」にも見られる。「河内飛鳥」の西の入り口は、大和川から石川を少し遡ったところであるが、その地名から蘇我倉山田石川麻呂一族との関連が指摘されている。無論、推測の域を出ないが、蘇我の石川一族は、飛鳥の出入り口という要衝に居を構えるという役割を伝統的に担っていたのかもしれない。「大和飛鳥」の西方、「豊浦」「和田」の西に「石川」の地名が残るのも、あるいはこれらと関わるのかも知れない。

飛鳥への
出入口

以上、「山田道」と蘇我石川麻呂について、憶測に憶測を重ねてきたが、ここで強調したかった点は「山田寺」の位置するところが、「飛鳥」の東からの出入り口に相当するという事実である。磐余から飛鳥に至る「山田道」がなければ石川麻呂の「山田の家」も存在しなかったし、当然に「山田寺」も造営されなかったことになる。山田寺は、まさに「山田道」のもつ地理的かつ歴史的な役割と深く関わって成立したのである。

最後に、「山田道」が詠み込まれた『万葉集』の長歌に触れておきたい。

「百足らず 山田の道を 波雲の 愛し妻と 語らはず 別れし来れば 速川の 行くも知らに 衣手の 反るも知らに 馬じもの 立ちてつまづく 為むすべの たづきを知らにものふの 八十の心を 天地に 思ひ足らはし 魂合はば 君来ますやと 我が嘆く 八尺の嘆き 玉梓の 道来る人の 立ち留り いかにと問へば 答へ遣る たづきを知らに さ丹つらふ 君が名いはば 色に出でて 人知りぬべみ あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 君待つ我れを」

（巻13-3276。読みは『岩波日本古典文学大系6』を参照）

慕い合いながらも離れなければならない男女の心を、掛け合いの形式で詠みあげた相聞歌である。別れゆく人が後ろ髪を引かれるように立ち止まったり、来ぬ人を待つというその舞台に「山田道」が選ばれたことが面白い。「飛鳥」と「磐余」を分ける山田の峠道が、人と人との分ける境界として、万葉人たちに意識されていたのではなかろうか。

B 地区割

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、条里制の遺存畦畔を基準とした旧来の地区割を1993年度末で廃止し、1994年度からは国土方眼座表第Ⅵ系に従って大・中地区界を設定した新地区割に移行した（『飛鳥・藤原宮概報』24）。新地区割では、東西672m南北324mの規格を持つ大地区を藤原宮内の点（ $X=-166,296$ 、 $Y=-17,787$ ）を地区交点の基準として四方に展開、その各大地区を18の中地区に規則的に分割し、小地区は規格を従来通りの3m四方とする一方、規則的な設定および命名に改めた。飛鳥寺、大官大寺などの古代寺院跡については、大地区界を国土方眼座表第Ⅵ系に従って設定したうえで、旧来通り固有の大地区名を与えた。

山田寺は、この時点では大地区界を定めず、固有の大地区名も与えなかったが、1994年度以後の調査では、大地区名は旧来用いていた「5BYD」を冠し、中・小地区は新地区割に基づく設定および命名を用いていた。今回の学報刊行にあたって、山田寺についても、東西南北の各地区界を $Y=-15,210$ 、 $Y=-15,432$ 、 $X=-168,618$ 、 $X=-168,348$ とする大地区「5BYD」を設定し（Fig.4）、今後はそれに従うこととした。

地区割変更

山田寺の調査のうち1993年度以前に実施した第1～8次調査は旧来の地区割に基づいており、1994年度以後の調査にかかる第9～11次調査は新地区割に基づいている。各調査の大・中地区名等については新旧の対照も含めてTab.3に示し、小地区も表示した地区割図および各調査の地区設定基準座標値はFig.5ならびにTab.4に示した。

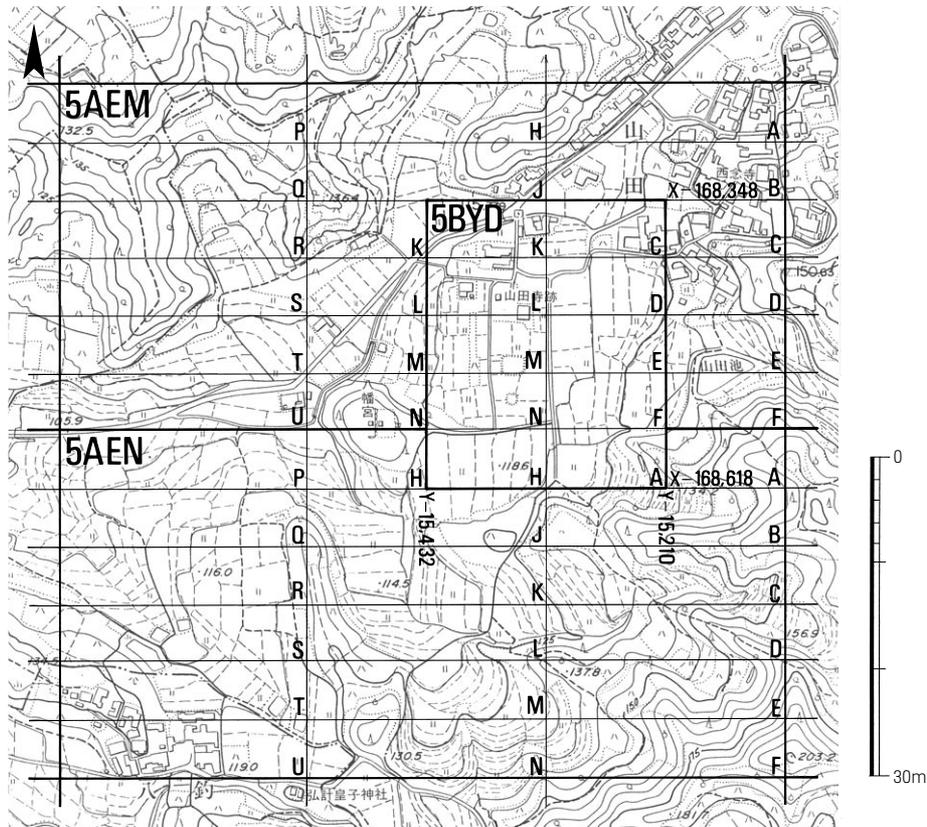


Fig.4 大地区「5BYD」の設定 1:7000

Tab.3 各調査の大・中地区名

調査回数	大-中地区名*
山田寺 1次	5 BYD-L,M (F,N)
同 2次	5 BYD-K,L (M,N)
同 3次	5 BYD-K,L (L,M)
同 4次	5 BYD-L,M (E,F)
同 5次	5 BYD-L,M (A,F,N)
同 6次	5 BYD-J,L (C,E,F,M,N)
同 7次	5 BYD-N (H,5AEN-J)
同 8次	5 BYD-L,M (E,M,N)
同 9次	5 BYD-A,F
同 10次	5 BYD-F,N
同 11次	5 BYD-A,H

*斜体字は旧地区割によるもの。

() は対応する新地区名 (順不同)

Tab.4 地区設定基準座標値

調査回数	点	地区*	国土方眼座標値(X,Y)
山田寺 1次	a	5 BYD-MS40	(-168536,-15360)
	b	5 BYD-MV45	(-168527,-15375)
同 2次	c	5 BYD-LE42	(-168518,-15366)
同 3次	d	5 BYD-LR30	(-168479,-15330)
	e	5 BYD-LR46	(-168479,-15378)
同 4次	f	5 BYD-LL15	(-168497,-15285)
同 5次	g	5 BYD-MM22	(-168554,-15306)
同 6次	h	5 BYD-LE22	(-168518,-15306)
	i	5 BYD-JJ16	(-168392,-15288)
同 7次	j	5 BYD-NP35	(-168581,-15345)
同 8次	k	5 BYD-LU23	(-168470,-15309)
	l	5 BYD-LH56	(-168509,-15408)
同 9次	m	5 BYD-FA74	(-168564,-15291)
同 10次	n	5 BYD-NC10	(-168558,-15321)
	o	5 BYD-AL79	(-168585,-15306)
同 11次	p	5 BYD-HQ10	(-168570,-15321)
	q	5 BYD-HL34	(-168585,-15393)

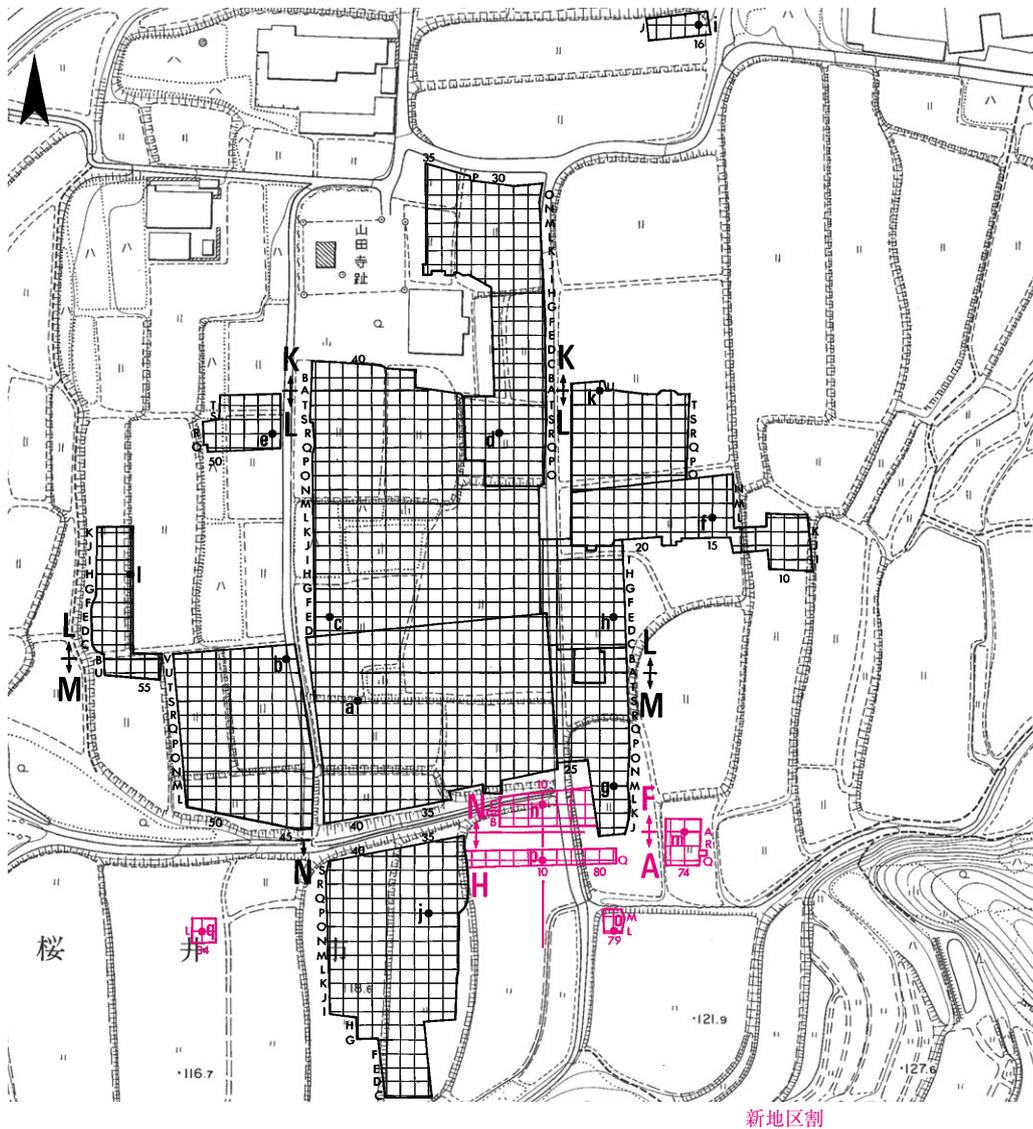


Fig.5 山田寺調査地区割図 1:1600

3 調査の概要

山田寺の調査は、1976年4月に開始し、中断期間をはさんで1996年12月まで、計11次、約10,500㎡について実施した。その結果、塔と金堂、これらを囲む回廊、寺域を限る大垣や南門、宝蔵などの位置と規模及び構造を解明した。また、多量に出土した遺物の分析を通して、舒明13年(641)から天武朝までの造営過程や、その後の変転の様相も明らかにしえたことは、以下の各章に詳述する通りである。

本節では、そうした成果の跡をたどりつつ、各次数ごとに調査の概要を述べる。また、山田寺旧境内において実施した立会や小規模な調査及び山田寺近くで実施した山田道関連の調査の概要も末尾に付載する。調査の進行状況や遺構の概略については、次節の調査日誌や遺構略図(Fig.6~14)を参照されたい。なお、回廊の柱間や柱の数え方については、第IV章以下では、東・西面回廊は南から、南・北面回廊は東から、それぞれ第1間、第2間…、第1柱、第2柱…と呼ぶが、調査の経過をたどる本節では必ずしもこれに統一していない。

A 第1次調査

山田寺の伽藍は、残存する礎石や基壇から、塔、金堂、講堂が南北一直線に並ぶとわかってはいたが、その他の建物は位置も不明であった。そのため第1次調査では、塔の全容を明らかにするとともに、東・西・南面各回廊と中門の検出に目標をおいた。

調査区は、塔のすぐ西にある南北方向の里道を境にして、東区と西区を設定した(約2,700㎡)。東区の東端は、塔跡から約35mにある南北方向の里道とした。この付近に東面回廊が予測されたためである。西区西端は、塔跡から約45mまでとり、西面回廊の検出をめざした。塔の南方には水路があり、調査区もこれに沿う形となった。

塔の周辺は西と南が低い水田である。耕土・床土下の基本的層序は、東区の塔周辺では焼土や瓦を多量に含む暗褐色土(焼土層)、以東では暗褐色土が次第に薄くなってなくなり、かわって下の暗青灰色粘土・灰褐色粗砂等が互層になって厚く堆積(以下では粘土・砂互層堆積Aと呼ぶ)すること、以下では東区のほぼ全域にわたってバラス敷面と瓦敷面の上下2面があることを確認した。出土遺物から、瓦敷は奈良時代後半頃、バラス敷は平安時代の10世紀頃に形成されたこと、暗褐色土(焼土層)は焼けた瓦や磚仏、部材の一部とともに12~13世紀頃の瓦器

塔は焼亡

を含み、この頃には塔が焼亡したことなどがわかった。

検出した主な遺構は、塔SB005と参道SF004、中門SB003、西面回廊SC070などである。

塔SB005は、かなりの破壊をうけていたが、花崗岩の地覆石、凝灰岩の羽目石や葛石を用いた切石壇上積基壇で、四面に階段がつき、周囲に砂岩系の黒い石を敷き詰めた犬走りがあると判明した。礎石は、円柱座を造り出した四天柱の西北のもの(安山岩)と心礎(花崗岩)のみが据わっており、他は四天柱2箇所、側柱4箇所で礎石の据付け掘形や抜取り穴を検出した。

塔の平面規模は3×3間で一辺約6.5m(1尺=約30cmとして22尺。本報告ではさらに細かく塔の基準尺を1尺=29.7cmとみる。以下、同じ)、中央間8尺、端間7尺、基壇は一辺12.8~12.9m

第三章 調査概要

(43尺)、基壇の出約3.1m (10.5尺)、基壇高約1.8m (6尺)、階段は四面やや不揃で、幅3.0～3.2m、出1.3～1.5m、犬走り幅約1.5mであった。犬走りは、各階段の前面にもあるが、長さが不揃で、一部に埴や花崗岩を用いていることから、創建後の仕事と推定した。

なお、断割り調査によって、塔周辺は谷を埋めて整地（褐色粘質土や黄褐色粘質土など）していること、塔は整地土面から深さ約1mの掘込み作業をしていること、心礎は基壇を高さ約0.6m（地業底から約1.6m）積んだ段階で据えていることなどが判明した。

参道SF004は、幅約1.5mで、両側を花崗岩の自然石で仕切り、内側に瓦を敷き並べていた。参道の方角は伽藍方向に対して北で西に振れる（本報告では瓦敷と同時期に比定）。

中門は削平

中門SB003は、基壇土のごく一部を残す程度だが、足場穴SS013の配置から桁行3間、梁行2間と考えた（本報告では3×3間も考慮）。また、中門周辺は参道南端より1m程低くなっているが、足場穴の深さから大きく削平されたと考えがたく、創建時にすでに一段低かったこと、参道は中門近くで階段になっていた可能性があることを指摘した。調査区南端の近世の河川SD008からは柱座や地覆座を造り出した礎石が出土。中門位置に近いが回廊用の可能性を指摘した。

回廊は西面回廊の礎石落とし込み穴4個を検出したにとどまるが、単廊であること、この位置を塔心で折り返すと東面回廊は調査区東端の里道外になること、調査区東辺のバラス敷面上で焼けていない建築部材のほか、完形の丸・平瓦も折り重なって出土しており、東面回廊は10世紀頃（本報告では11世紀前半）に倒壊したことなどが推定できた。なお、南面回廊は南の近世以降の流路SD008の浸食や削平のため、痕跡すら確認できなかった。

塔の造営は
7世紀後半

以上の他、瓦敷内に埋めた土管SX014、土坑5基（SK006・201・203・401・402）、井戸5基（SE230～234）などを検出した。SX014は塔の心から真東約19.8mに土管を立てたもの。井戸はいずれも中世。土坑は7世紀代から13世紀頃までのものがあるが、このうち大型のSK006は、多量の瓦、罫の羽口、鉄滓、手斧の削り屑及び7世紀後半（670～690年頃）の土器を含む塔造営時の廃棄物土坑であり、『帝説』裏書にみえる塔心柱の建立年代（天武2年=673）を裏付ける重要な発見となった。

遺物は、多量の瓦のほか、埴仏、土器、金属製品、木製品などが出土した。

金箔貼りの
埴 仏

軒瓦は、奈良時代のもものが若干あるが、いわゆる山田寺式が圧倒的であること、6種ある軒丸瓦のうちD種と四重弧文軒平瓦が主で、塔所用であることなどがつかめた。蓮華文と鬼面文の鬼瓦、各種の垂木先瓦、鴟尾や後に棟用と判明した箱形の瓦なども出土した。埴仏は大小6種があり、金箔を押しした例もあった。釘孔があり、塔の壁にはめられていたと推定できた。

金属製品では天武朝頃の金銅製風招、木製品では瓦座をもつ茅負、垂木などの建築部材などが注目された。

B 第2次調査

第2次調査では、金堂の全容を明らかにすることと、北面回廊の検出を主な目的として、第1次調査区のすぐ北側約2,500㎡を発掘した。

金堂の周辺は西と北が低い水田である。耕土・床土下の基本的層序は、塔周辺（第1次調査）と大差なく、灰褐色土、瓦を多量に含む金堂周辺の暗褐色土（焼土層）、東辺部の粘土・砂互層

堆積A、バラス敷、瓦敷の順であり、年代観もほぼ一致した。また、金堂周辺では焼けた部材や瓦などが出土し、犬走りの石の上面も赤変していることから、金堂は焼亡したことがわかった。焼亡年代は、焼けた部材を含む金堂周辺の溝（SD208～211）などから12世紀中頃～後半の瓦器が出土しており、バラス敷の形成された10世紀以後で、遅くとも12世紀後半と推定できた。

金堂は焼亡

検出した主な遺構は、金堂SB010とすぐ南の礼拝石SX011、灯笼SX012、北面回廊SC080などである。

金堂SB010は、かなり破壊されていたが、花崗岩の地覆石、凝灰岩の羽目石（束石を造り出す）や葛石を用いた切石壇上積基壇で、四面に階段がつき、四周に長方形に切り揃えた「榛原石」を敷き詰めた犬走りが巡ると判明した。礎石は花崗岩で蓮華座を造り出しており、南入側柱の東2箇所だけにだけ原位置で残っていた。他に礎石の抜取り穴を12箇所（入側柱7箇所、側柱5箇所）確認した。地覆石は原位置を動いた3個（花崗岩）が残っていたが、側柱筋で抜取り痕跡を3箇所確認した。入側柱の礎石には地覆座がないので身舎は開放されていたこと、地覆石には刳込み穴があるので庇には間柱があったことなどもわかった。

金堂礎石には蓮華座

金堂の平面は、桁行3間（約9.0m）、梁行2間（約6.0m）の身舎に四面とも庇がつくが、庇の桁行も3間（約15.0m）、梁行も2間（約12.0m）という、従来例の知られていない形式（その後滋賀・穴太廃寺、三重・夏見廃寺などで検出）であり、構造的には玉虫厨子のように雲形肘木を扇形に割付けたと推測した（Fig.6）。柱間は、身舎南面東隅に残る2個の礎石の心々距離2.0mを6尺とみて、1尺=33.3cmだと整数値が得られることから、身舎の桁行を中央間15尺（約5.0m）、両端間6尺（約2.0m）、梁行9尺（約3.0m）等間、庇の桁行が15尺（約5.0m）等間、梁行が18尺（約6.0m）等間に復元した（本報告では金堂創建時の基準尺を1尺=30.24cmとみ、柱間寸法も若干改めている）。ちなみに、塔と金堂の心々距離は約30.1mであり、伽藍中軸線は北で1°ほど

金堂は特異な平面形式

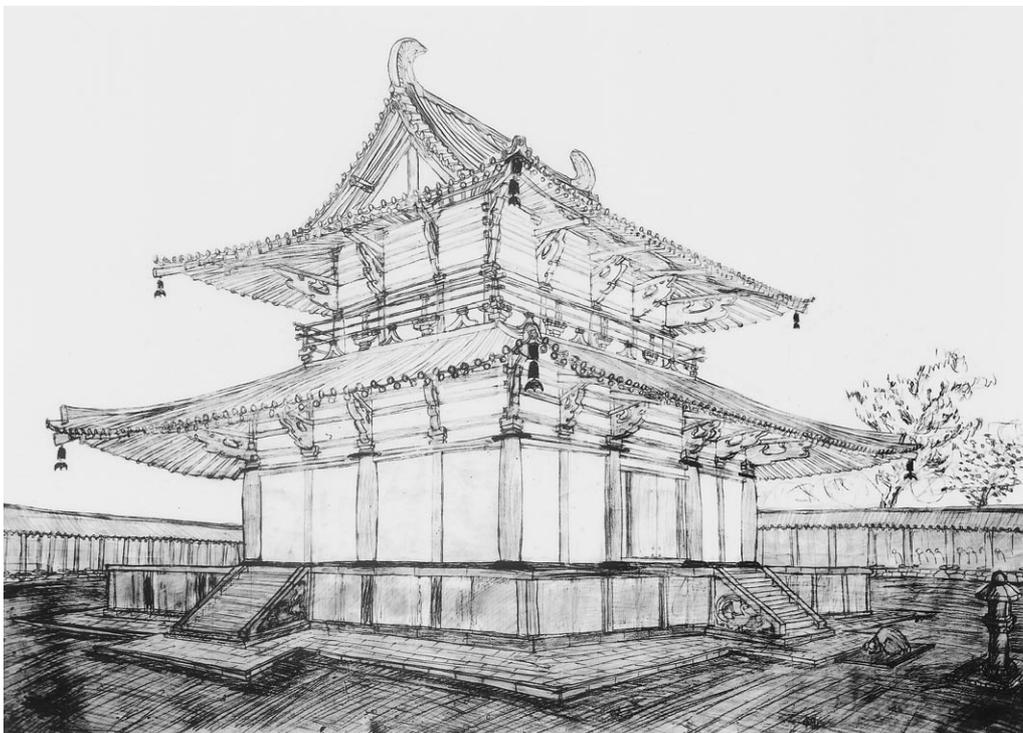


Fig.6 金堂再現

第三章 調査概要

西に振れることもわかった。

浮彫り発見 基壇は東西約21.6m、南北18.2～18.4m、基壇の出約3.3m、基壇高約2m。階段は西面のみ踏石の1段目と耳石（本報告では階段羽目石と呼ぶ）の一部が残っていた。踏石は花崗岩（蹴上げ約35cm）で、階段は7～8段あったと推測した。羽目石は北側のもので凝灰岩。動物（白虎？）を浮彫りしており、前肢等が残っていた。階段の幅は南・北面が約5.0m、東・西面が約4.5m、出が約1.6m、犬走りの幅約1.6mであった。

なお、断割り調査によって、金堂周辺は旧地形に影響されて南に厚い整地（厚さ約1m）をしていること、塔の場合のように明確な方形ではないが堀込み地業（北側で深さ約0.6m）をし、底から高さ約3.4mまで版築して基壇を形成したことなどが判明した。また、版築土から7世紀前半の土器が出土し、『帝説』裏書にある金堂建立年代（皇極2年=643）を裏付ける手掛りをつかめた。

礼拝石発見 礼拝石SX011は、金堂南面階段の犬走りに接して設けられていた。通称「竜山石」と呼ばれる凝灰岩の1枚の板石であり、東西約2.4m、南北約1.2m、厚さ約0.2mであった。大阪の四天王寺や鳥坂寺にもあるが、類例は少なく、貴重な発見となった。

灯籠台座 灯籠SX012は、金堂南面階段の南約5.6mの伽藍中軸線にあり、台座と下の台石及びこれらを据えた玉石積みの壇が残っていた。台座（凝灰岩）は八角形で、上面に蓮華座を造り出し、中央に竿石を立てる径25cmの孔を穿つ。壇は一辺1.95mで、上面に礫を敷いていた。補修の痕跡があり、8世紀には存在したが、金堂創建時に遡るかは明らかにできなかった。

山田寺式
伽藍配置 北面回廊SC080は、調査前に予測したように金堂と講堂の間にあり、伽藍配置は四天王寺式と異なることが確定した（山田寺式と命名）。梁行1間の単廊で、中央部の8間分（東から第8～第15間）を検出した。礎石は、すべて抜取られていたが、調査区西寄りの落ち込み穴から6個（花崗岩）が出土した。いずれも円柱座（蓮華座か）をつくり出すが、地覆座は南の穴から出土した礎石がなく、北の穴から出土した礎石にあり、回廊の北側柱筋は仕切り、南側柱筋は開放と判断した。柱間は、梁行を約3.6m（1尺=約30cmとして12尺。以下、同じ）、桁行を約3.9m（13尺）等間に復元し、伽藍中軸線上に柱が位置すると考えた。また、北面回廊の中央2間（第11・12間）に扉口を想定した。

回廊基壇は、調査区西寄り以外は地山の岩盤を削り出したもので、上面がかなり削平されていたが、一部に厚さ10～20cmの積土が残っていた。側石は花崗岩の玉石積みで、南側に玉石積みの雨落溝SD081があるが、ともに残りはよくなかった。復元基壇幅6.3～6.4m、復元雨落溝幅約0.5m。

なお、回廊基壇上では礎石位置の中間で2列の掘立柱列SX079を検出した。調査時点では回廊の建て替え案も出たが、本報告では足場穴と考えている。北面回廊が焼失したか否かは、残りが悪くいずれとも判断できなかった。

以上の他には、瓦敷内に埋めた土管SX015、土坑4基（SK203・204・206・207）、溝9条（SD208～211・213・215・221～223）、井戸1基（SE218）などを検出した。SX015は灯籠の真東約6.6mに土管を竪に据えたもの。土坑のうち、SK405は瓦敷下にあり、多量の瓦とともに布片や7世紀中頃の土器などが出土し、金堂造営に伴う廃物を捨てた土坑とみた（本報告では、土器は7世紀後半が主であり、金堂修理に伴うと判断）。SK206は11世紀中頃～後半の土器とともに、回

廊所用と推測する巻斗、肘木、茅負などの建築部材や円筒状石製品が出土。SK203・207からは多量の瓦とともに12世紀中頃～後半の土器が出土し、金堂焼失後の跡かたづけに伴う土坑と推測した。

溝のうち、SD208～211は金堂を取りまき、西南と北西の隅でSD213とSD215に連結する。溝内から焼けた金堂用の部材とともに12世紀中頃～後半の土器が出土。溝はいずれも焼土層を切っているが、階段を避けるように湾曲していた。金堂基壇がまだよく残っていたため、金堂焼亡も12世紀中頃～後半に近い時期に比定した。井戸SE218は13世紀頃、溝SD221～223は14～15世紀のものであった（本報告では、SD221～223で囲まれる部分を長方形区画とみて、13世紀後半頃の小仏堂か経蔵もしくは鐘楼があったと推定）。

遺物は、多量の瓦のほか、埴仏、土器、金属製品、木製品などが出土した。

軒瓦は、奈良・平安時代や中世のものも若干あるが、山田寺式が圧倒的であること、6種ある軒丸瓦のうち面径が最も大きいA種と四重弧文軒平瓦が主で、金堂所用であることなどがつかめた。道具瓦は各種あり、垂木先瓦は大型のA種が金堂所用。埴仏は十二尊連座（1点は金箔が残る）を主として独尊、四尊連座があり、塔と同様に金堂壁面も埴仏で飾られていたと推定できた。

埴仏各種

金属製品には金銅製飾金具や鋌、銅・鉄釘、鉄製茅負留先金具、土器には土師器、須恵器のほか瓦器や青磁などがあり、灯籠の壇上近くでは8～10世紀頃の灯明皿が出土し注目された。石製品には灯籠の火袋や笠石などがあり、灯籠の復元に貴重な資料となった。

C 第3次調査

第3次調査では、講堂の主として東辺部の遺構の様相と、北面回廊の東西規模や柱間寸法等を明らかにすることを主な目的として、約1,300㎡を発掘した。調査区は、講堂東辺部から北面回廊東半部に至る東区、北面回廊西半部の西区、講堂北辺の北区（小トレンチ2本）を設定し、あわせて講堂西半部に現存する礎石・地覆石等の実測調査も行った。

東区は北及び西に低い水田である。南端の北面回廊内の層序は、第1・2次調査と基本的に一致し、床土下は灰褐色土、黄褐色砂礫土や茶褐色砂質土などの粘土・砂互層堆積B、暗灰色粘質土や粗砂混り青灰色粘質土などの粘土・砂互層堆積A、バラス敷、瓦敷、整地土及び地山の順であった。粘土・砂互層堆積A・Bは調査区の東辺にのみ認められた。回廊上では、灰褐色土下が多量の瓦と12～13世紀頃の土器を含む茶褐色粘質土で、基壇との間に薄く淡灰褐色砂質土が堆積していた。回廊の北では、床土下は灰褐色砂質土、11世紀前半頃の土器を含む灰褐色粘質土、地山の順であり、バラス敷や瓦敷はなかった。ちなみに、回廊北の地山面は、回廊南の整地土・地山面から20～30cm低かった。講堂東辺部は、削平のため床土直下で地山・整地土面になった。西区も水田だが、第2次調査区西辺部より0.5～1.0m低い。床土直下が整地土面であり、ここも後世にかなり削平を受けていた。

検出した主な遺構は、講堂SB100、北面回廊SC080、鎌倉時代の梵鐘铸造跡SK440などである。講堂と北面回廊間では鐘楼か経蔵の検出も期待されたが、発見には至らなかった。

講堂SB100は、主に東辺部を発掘し、礎石据付け穴や抜取り穴を計5箇所（身舎の東妻柱列

第三章 調査概要

講堂東端部
は削平

3箇所、南側柱1箇所、庇東北隅1箇所）と、東妻の基壇地覆石抜取り痕跡2箇所（SX460）を検出した。ここでは削平が著しく、基壇土は残っていなかったが、北区の調査によると掘込み地業はなく、基壇は地山・整地土上に直接版築していること、基壇高は75cmをこえないことなどがわかった。SX460には花崗岩片が残り、付近に凝灰岩片が散乱していることから、講堂は花崗岩の地覆石、凝灰岩の羽目石・葛石を用いた壇上積基壇（階段は不明）で、基壇の出は約2.1mと推定した。

現境内には原位置を保つと考えられる礎石12個（身舎1個、庇11個）が残っており、それらと今回検出した礎石抜取り穴から、講堂は桁行6間、梁行2間の身舎に四面庇がつくこと、講堂の中軸線は伽藍中軸線とほぼ一致し、伽藍中軸線上に柱が位置することがわかった。柱間は、1尺=29.75cmとみて、身舎の桁行6間が15尺（約4.5m）等間、梁行13.5尺（約4.0m）等間、庇の出は10.5尺（約3.1m）等間であり、総長は桁行111尺、梁行48尺に復元した（本報告では、講堂の規準尺を1尺=29.45cmとし、柱間寸法も若干改めている）。

現存する礎石は花崗岩で方座上に円柱座をつくり出すが、金堂や北面回廊のような蓮華座はなかった。庇の礎石には地覆座があり、花崗岩の地覆石もよく残っていた。地覆石に残る軸摺穴の配置から、講堂の南面はすべて扉（両端間は片開き、他は両開き）、東・西面は南端間だけ片開きの扉、北面は中央2間だけが両開きの扉で、他は壁と考えた。講堂の創建と廃絶の時期を明らかにする遺物は出土しなかったが、『帝説』裏書や『玉葉』『多武峯略記』などの記事（本報告第Ⅱ章参照）から、天武14年（685）には完成、12世紀後半～末頃に廃絶とみた（本報告では講堂も焼亡した可能性を指摘）。

回廊礎石も
蓮華座

北面回廊SC080は、第2次調査によって、金堂と講堂の間にあり、伽藍中軸線上に柱がくると判明していた。今回、東区では中軸から東5～8間目（東端から第4～第7間）の4間分を検出。西区では礎石落込み穴7個を検出にとどまる。西区の基壇は完全に削平されていたが、東区は良好な状態であり、基壇は地山を削り出して一部に積土をしていること、側石は玉石積みで、基壇の幅が6.3m前後、高さが南の瓦敷面から約0.3m、北の地山面から0.6～0.7m、南雨落溝SD079は玉石積みで幅約0.6m、南側石からの深さ0.2mであること、礎石（花崗岩）は8個とも蓮華座を造り出し、北側のものにだけ地覆座があることから、回廊の外側は壁で仕切られていたこと、南側の中軸から東7・9間目には地覆石SX421・422があり、創建後に部分的に南側も仕切られたことなどがわかった。

北面回廊の
中央に門？

柱間については、礎石がよく残っていたことから、桁行・梁行とも約3.78m（1尺=約30.2cmとして12.5尺）に改めたが、これで割付けると伽藍中軸線を挟んだ中央2間分（第2次調査区）が広くなり、北門があったのではという疑問が残った。基壇上では、第2次調査と同様に、2列の掘立柱列SS079を検出したが、掘形の一部から7世紀後半の土器が出土し、足場説を疑問とした（本報告では足場とし、一部に修理時のものがあると理解）。北面回廊の創建年代を明らかにする遺物は出土しなかったが、礎石の蓮華座からみて、金堂とそれほど時期がへだたらないと推測した。廃絶時期については、少なくとも東辺部では基壇上に12～13世紀の土器を含む瓦層があり、それ以前。第1次調査では10世紀頃に東面回廊が倒壊したのではと考えたが、調査区内には建築部材はなく、北面回廊東辺部が倒壊したか否かは明らかにできなかった。北面回廊と講堂、北面回廊と金堂の心々距離は、それぞれ約34.9mと、約26.5mと判明した。

梵鐘鑄造跡SK440は、講堂東方で検出した一辺約2.3m、深さ約0.3mの方形の土坑であり、底の四周に溝がめぐり、隅に小柱穴がある。埋土から焼土や瓦とともに梵鐘の鑄型（外型）、フイゴ羽口などが出土した。伴出土器から鎌倉時代後半に比定した。

梵鐘鑄造跡

以上の他には、土坑5基（SK430・434・447・450・454）、井戸3基（SE432・433・480）、大きな溝3条（SD455・481・482）などを検出した。土坑のうちSK430・454は7世紀後半、SK434は平安時代、他の土坑と井戸や大溝はいずれも中世であった。

遺物は、瓦埴類、埴仏、土器、金属製品などが出土したが、第1・2次調査に比べて量は少なかった。軒瓦は、山田寺式が主であり、講堂では軒丸瓦D種かC種と四重弧文軒平瓦が創建時の組み合わせと推測した。垂木先瓦や埴仏は少なく、講堂では用いられなかったと考えた。他に量は少ないが、奈良～江戸時代の軒瓦があり、とくに鎌倉時代の「興福寺」銘軒平瓦は、文治3年（1187）の興福寺僧に薬師三尊像強奪事件とのかかわりで注目された（本報告では、鎌倉・室町時代にも講堂付近に仏堂があったと推測）。

土器は各種あるが、11世紀以後のものが大半で、とくに北面回廊以北で中世のものも多く出土したことが注目された。金属製品には金銅製飾金具や容器の蓋のつまみなどがあった。

D 第4次調査

第4次調査では、東面回廊を検出して、回廊の東西規模を確定すること、寺域東限を明らかにすることなどを主な目的として、約600㎡を発掘した。調査区は、金堂東方の里道東に2箇所（以下、西を北Ⅰ区、東を北Ⅱ区と称す。のち両区を連結）を設け、その後塔の東方、北Ⅰ区南方約25mの位置に1箇所（以下、南区）を設けた。

調査区周辺は段々に造成された水田であり、北Ⅰ区と北Ⅱ区の比高差は約1.9m、北Ⅰ区と南区との比高差は約0.3mあった。東面回廊上の北Ⅰ区西辺部や南区の基本的層序は、床土下に中・近世の遺物を含む灰褐色ないし青灰色砂質土があり、以下は中世の遺物を含む灰褐色砂や褐色粘質土あるいは青灰色砂礫等が互層をなす淡褐色砂土（厚さ20～30cm）、暗灰色砂土や青灰色砂等が互層をなす暗青灰色砂土（厚さ20～40cm）、暗茶褐色粘質土、瓦堆積層、多量の建築部材を含む茶褐色有機土、砂混り暗青灰色粘質土、基壇土の順。瓦や建築部材の出土状況から東面回廊は東から西にむかって倒壊したことは明らかで、砂混り暗青灰色粘質土層から出土した土器によって倒壊時期は10世紀後半～11世紀前半と推定した（本報告では、倒壊時期を11世紀前半に比定。暗灰色ないし暗青灰色砂土は第1次調査の粘土・砂互層堆積Aにあたる。この上の淡褐色砂土は中世の遺物を含み、粘土・砂互層堆積Bとする）。

基本層序

倒壊した
東面回廊

東面回廊東の北Ⅰ区の基本的層序は、床土、中・近世の遺物を含む青灰色砂質土、13世紀頃の土器を含む茶褐色ないし青灰色砂土、11世紀頃の土器を含む暗灰色砂土及び暗灰色粘質土、10世紀頃の土器を含む暗褐色有機土、淡青灰色砂土、9世紀の土器を含む淡青灰（暗青灰）色粘質土、明青灰色粘質土、花崗岩風化土である地山の順。明青灰色粘質土は薄い整地土で、上面は東にゆるやかに傾斜する。北Ⅱ区では床土、灰褐色砂質土、地山の順である。北Ⅰ区東端から北Ⅱ区の間は、山田寺創建にあたって、一部の谷地形を整地をしながら地山を雛壇状（SX510・525など）に造成したとみた（本報告では、本格的な雛壇状造成は8世紀中頃の東西塀SA505に

伴うと推測)。

検出した主な遺構は、東面回廊SC060とこの東の南北溝SD552、東面大垣SA500とこの東の南北溝SD530・531、東西塀SA505、土塁状遺構SX535などである。

良好な
遺存状態

東面回廊SC060は、既述したように建物が倒壊した状態で検出され、基壇部分も良好に残っていた。梁行1間(柱間3.78m)の単廊で、北I区で3間分(柱間3.78m等間)、南区で2間分ほどを検出した。第2・3次の調査成果に照らすと、それぞれ北から6～8間目(南から第16～18間)と、15・16間目(南から第8・9間)にあたる。礎石は花崗岩で蓮華座を造り出す。東側の礎石にだけ地覆座を造り出し、地覆石もあることから、外側は仕切り、内側は開放とわかった。地覆石がなく、瓦を含む粘質土をつき固めた上に地覆を据えた部分もあった(のち改修と判明)。

基壇は地山を一部削り出した上に若干の積土を施していること、側石は玉石積みで、基壇の出約1.3m(復元基壇幅約6.4m)、基壇高約0.5mだが、裾がかなり浸蝕されていること、床は土間床であり、北から6間目は平安時代初頭、9世紀頃に再版築していることなどがわかった。また、礎石と礎石の間で掘立柱穴2列(SX062・064)を検出し、その時期は地覆石を据える以前と判明した(本報告では足場穴と判断)。

東面回廊の建物は、南区では東側柱筋がそのまま西に倒れた状態で出土した。地覆、柱、腰壁束、腰長押、連子窓、頭貫、卷斗などのほかに、白土で上塗りされた腰壁、小脇壁、斗拱(組物)間小壁があり、柱は若干のエンタシスが認められること、北から15間目の連子窓は20本の連子子があるが、北から16間目は土壁に改作されていたこと、柱や卷斗など部材の一部に赤色顔料が残っていたことなどが判明し、法隆寺西院伽藍以外では皆無に等しい飛鳥時代建築の新発見となった。北I区では地覆、斗、板材などが出土したが、部材は南区に比べて少なく、地覆を抜取った形跡もあることから、倒壊後にかたづけられたと推測した(本報告では粘土・砂互層堆積Aが、東面回廊の倒壊に深く関わっていたと判断)。

飛鳥時代建築
の新発見

東面回廊の創建年代を決める遺物は出土しなかったが、礎石は塔や講堂とは異なり、金堂礎石を小型化した蓮華座礎石であることなどから、金堂の創建に近い時期と推定した。なお、東面回廊の検出によって、回廊の東西規模は伽藍中軸から東と西に各11間、計22間であり、総長約84.2mに復元した。柱間は約3.78m(1尺=36cmの高麗尺を基準とし、柱間10.5尺とする案を提示)が基本だが、中央2間だけは広くなり、北門か扉口があったのではという疑問は依然として残った(本報告では中央2間の北側を扉口SX030に比定)。

SD552は東面回廊SC060の東側石の東約0.5mにある素掘りの南北溝。9～10世紀の土器が出土し、回廊倒壊前に埋まっていたと推測した(のち雨落溝とする見解も出たが、本報告では排水路とする)。

東面大垣
の検出

東面大垣SA500は柱間約2.4mの掘立柱塀で、5間分を検出した。柱の抜取り穴を薄く残った盛土上面、掘形をほぼ地山面上で検出しており、基壇があったのではとの疑問を残した。また、礎盤が掘形の底から20～30cm浮いた位置にあったことから、建替えの可能性も考えた。(のち基壇をもつこと、2時期あることが判明)。東面回廊の東側柱筋からの距離は約17.1mであった。伽藍中軸線から距離は唐尺で200尺と完数値になり、遅くとも塔や講堂建立時には構築されていたと推定した。

南北溝SD530・531はSA500の東にある幹線排水路である。SD530は素掘りで、7世紀中頃に開削され、7世紀後半に廃絶、SD531は7世紀後半にSD530を石積み溝に改めたもので8世紀前半にはほぼ埋まったとみたが、SD531上の砂の堆積土からは8世紀後半頃の土器が出土しており、素掘り溝として機能していたと考えた（本報告では、SD531上の流れをSD540とし、出土土器から少なくとも9世紀前半まで機能し、その後も存続したと判断）。

幹線排水路
の改修

東西塀SA505はSD531の石積みを一部壊して掘られた掘立柱塀（13間分検出）であり、これに沿う溝状の土坑SK504の出土遺物などから、奈良時代中頃～後半に比定した。SA505の位置は金堂心にほぼ揃い、東面大垣の東を南北にほぼ2分すること、したがって寺域は東面大垣よりさらに東に広がり、その整備は奈良時代中頃～後半であることなどが推測できた（本報告では仮称「東北院」の南限塀に比定）。

なお、東面大垣SA500上には瓦を2～3層混えた幅3～4m、高さ約0.5mの土壘状遺構SX535があった。積土やこの上を覆う暗灰色粘質土から出土した土器によって平安時代に比定。SX535は、本来は築地であった可能性も残した（本報告では築地と認定し、SA535と呼ぶ）。

以上の他には、平安時代前半の小規模な掘立柱建物SB501、創建の整地によって埋められた旧流路SD526、部分的に残る奈良時代の瓦敷SX551及び土坑4基（SK503・508・545・550）などを検出した。土坑のうち、SK508は9世紀前半、他の3基は7世紀に属す。とくにSK545は整地土（明青灰色粘質土）下、SK550は一部が回廊基壇下にありともに創建時に白土を採掘した跡と推定した。

遺物は、既述した多量の回廊建物部材や瓦のほか、鍍金や金箔が残る銅製押出仏3点、木簡3点、7世紀から中世に至る各種の土器、三彩・緑釉・灰釉陶器、陶硯や土馬、金銅製飾金具や鉄釘、曲物や檜扇、ワラジ、馬毛を束ねたもの、馬骨などが出土した。

押出仏のうち2点は銅釘で木片に打ちつけたもので、付近から出土した黒漆塗りの厨子の一部と一具をなした可能性があること、木簡には「経論司」の題籤があり、付近に経論を保管した経蔵が存在したこと、軒瓦は奈良時代後半のものもあるが、山田寺式が大半であり、東面回廊所用は軒丸瓦D種と四重弧文軒平瓦であることなどが推定できた。なお、SK508では、9世紀前半の土器とともに、三彩香炉・小壺蓋、ガラス容器片（のち玉髓片と判明）、神功開宝1点などが出土し注目された。

「経論司」
題籤の発見

E 第5次調査

第5次調査では、回廊の東南隅部を検出して、南北規模を確定すること、東面回廊建物復元のためにより詳細な資料を得ることなどを主な目的として、約527㎡を発掘した。

倒壊建物
を追求する

調査区は、一部建物部材を残したままにした第4次調査南区を含め、南北約40m、東西6～15mとした。西は里道を撤去し、第1次調査区と約1.5m重複させたが、南端部では西に小川があるためこれに沿う形となった。

調査区周辺は北と西に低い水田である。耕土・床土下の基本的層序は、第4次調査とほぼ一致し、灰褐色土、厚さ20～70cmの灰褐色及び灰色砂混り粘土（粘土・砂互層B対応）、厚さ20～50cmの暗青灰色砂混り粘土（粘土・砂互層A対応）、暗茶褐色粘質土、11世紀前半頃の土師器を

含む瓦堆積、東面回廊倒壊部材と茶褐色有機土、砂混り暗青灰色粘質土、基壇土の順。基断面直上では延喜通宝（初鑄907年）が出土し、この時期まで回廊は建っていたことが確定した。

倒壊した東面回廊の瓦、部材やこの下の茶褐色有機土は、調査区西端近く、基壇側石から西に4～5m付近までであるが薄く、西の第1次調査区には及ばないところもあった。部材の下は薄い暗灰褐色粘質土、バラス敷、瓦敷、整地土の灰褐色粘質土、地山の順。暗灰褐色粘質土から富壽神宝（初鑄818年）や10世紀末から11世紀初頭の土師器や黒色土器が出土し、東面回廊の倒壊年代がかなりしぼれた（本報告では倒壊年代を11世紀前半に比定）。

整地土下は古墳時代

東面回廊東の基本的層序も、第4次調査区とほぼ一致し、粘土・砂互層堆積Aの下層にあたる暗灰（暗茶褐）色粘質土、10世紀後半を主として10世紀末～11世紀初頭までの土器を含む暗褐（茶褐）色有機土、淡青灰色粘質土、青灰色粘質土（整地土）、地山の順であった。調査区北・南端の地山は花崗岩風化土であるが、この間の約25mの範囲は古墳時代（5世紀頃）の土器を含む大きな旧流路（SD568）か谷が北西方向にあると判明した。

なお、厚い粘土・砂互層堆積は、東の丘陵から土砂の流入が繰り返されたため、回廊倒壊の原因にもなったとする意見も出た（本報告では粘土・砂互層堆積Aをそれにあてている）。

検出した主な遺構は、東面回廊SC060と西雨落溝SD061、基壇東の南北溝SD552などである。

東面回廊SC060は、第4次調査と同様に、建物が倒壊した状況で検出され、基壇も比較的良好に残っていた。梁行1間（柱間3.78m）の土間床の単廊である。礎石は蓮華座を造り出した花崗岩製で9間分（北から15間目以南）すべてが原位置に遺存し、基壇側石は玉石積みで回廊東南隅部も検出したことから、東面回廊の南北規模は23間、総長約86.9m、柱間3.78mと確定した（ここでも柱間は高麗尺で10.5尺説）。これまでの調査成果を併せると、塔心と金堂心はそれぞれ回廊の南北長をほぼ3分割したところに位置すること、東面回廊の方位は北で西に約1°15′振れ伽藍中軸線に近いことなどがわかった。

回廊の改修

地覆石はすべて抜取り、その後に瓦や礫を粘質土とともに詰め込んでいた（SX560）。腰壁等の改修と関連するのではと考え、出土した土器から、その時期を9世紀前半～中頃に比定した（のち10世紀の土器を含むと判明）。東側石の裏込め上半の土は地覆石抜取り痕跡（SX560）上に及び、地覆石抜取り補修にあわせて、基壇土も積み直したと判断できた。また、礎石と礎石の間で掘立柱穴2列（SX062・064）を検出し、その時期は地覆石の抜取り痕跡（SX560）以前と判明したが、西側の掘立柱穴からは古くても7世紀後半になる縄叩き目の平瓦が出土し、創建時の足場穴とすることに問題を残した（本報告では改修時の足場もあると推測）。

基壇は、既述した古墳時代（5世紀頃）の旧流路（SD568）を整地した上に約0.3mの版築を施していた。基壇の幅は約6.4m、出は約1.3m、高さは0.4～0.5m。西雨落溝SD061は、西側に小振の玉石を並べたもので、幅約0.5cm、深約0.2mであった。基壇版築下の整地面では、約1.6mの間隔を置いて平行する南北方向の細い溝状の落ち込み2条（SX563）を検出し、礎石等を運搬した際のコロの道板痕跡ではと考えた。

東面回廊の建物は、北から15～17間目がほぼ西、18～21間が南西にねじれたような状態で倒壊していた。この上にはほぼ全体にわたって瓦が堆積し、15～20間目では瓦屋根からそのまま落ちたような状態で出土したことから、かたづけ作業は一部を除いては行われなかったと判断できた。

部材は、地覆、柱、腰壁束、腰長押、連子窓、頭貫、卷斗などのほかに、今回新たに大斗、肘木、桁虹梁、垂木、茅負、屋根野地板などが出土し、白土で上塗りされた腰壁、小脇壁などもあった。大斗には皿盤がなく、肘木には舌がつくなど、今までの常識を越える新知見が得られ、建物の精緻な復元も可能になった。

屋根瓦については、90%以上が創建時のものであり、出土状況から平瓦は二枚重ねで葺き足が長いこと、棟には割鬨斗瓦を3～4枚重ねて上に大形の平瓦をかぶせていたことなどが判明した。また、茅負の瓦繰りが幅約30cmであることから、瓦は柱間2間で25列であったと考えた。軒丸瓦や垂木先瓦はかなりの数が回廊基壇のすぐ外側に落下した状態で出土しており、建物倒壊以前に軒先部はかなり痛んでいたと推定した。また、部材下の基壇側石が傾いていたり、礎石は方座の下まで露出したものがあるなど、基壇自体も荒廃した状況が窺えた。

屋根瓦の葺き方判明

SD552は東面回廊基壇の東0.4～0.5mで検出した南北溝だが、素掘りであり雨落溝ではないと判断した。埋土から10世紀代の土器及び寛平大宝（初鑄890年）が出土した。SD552上には暗褐色有機土があり、これを切って基壇寄りに南北溝SD565、さらに回廊倒壊後に南北方向の暗渠SX561（本報告では溝とみてSD561とする）が順次設けられており、回廊倒壊後にも南に向けて排水処理が行われていたことが推測できた。

遺物は、既述した多量の回廊建物部材や瓦のほか、埴仏、縄文から中世に至る各種の土器、二彩・三彩・緑釉陶器、土馬、金銅製飾金具や銅・鉄釘、銭貨の富壽神宝・寛平大宝・延喜通宝各1点、漆塗り木製品、馬歯などが出土した。

軒瓦は、平安時代のものが僅かにあるが、ほとんどが山田寺式であり、東面回廊創建には、それぞれ65%を占める軒丸瓦D種と四重弧文軒平瓦A種が用いられたと確定した。垂木先瓦は出土数の8割を占めるD種と確定した。

F 第6次調査

第6次調査では、南・北2調査区を設定し、約572㎡を発掘した。南区は、第4次調査区と第5次調査区の間東面回廊SC060上に設定し、残存する部材を取り上げて建物復元の詳細な資料を得ることと、東出入口部の有無を確認することに調査の主目標をおいた。北区は、第4次調査で検出した東面大垣SA500の北延長上と、1978年に講堂北方の立会調査（第2次調査補、本節Lを参照）で検出した北面大垣らしい柱穴の延長上の交点に設定し、大垣の東北隅部を確認することに調査の主目標をおいた。

倒壊建物を再追求

南区は、水田で、西に里道があったが、これを撤去し、第2次調査区と一部重複させた。基本的層序は、第4・5次調査区と大差なく、厚い粘土・砂互層堆積BとAの下に暗茶褐色粘質土があり、この下には基壇上に倒壊した東面回廊の瓦や部材があった。東面回廊の基壇西では、瓦堆積や部材、暗灰褐色粘質土、バラス敷、瓦敷の順。暗灰褐色粘質土から平安時代の土師器や黒色土器、バラス敷直上からは垂木先瓦に貼り付いた状態で延喜通宝（初鑄907年）が出土した。東面回廊の基壇東では、粘土・砂互層堆積B・A、暗褐色有機土、淡青灰（暗青灰）色粘質土、花崗岩風化土の地山の順。調査区南端では、古式須恵器を含む古墳時代（5世紀頃）の旧流路（SD569）があり、北西方向に延びると判明した。

第三章 調査概要

北区は、北に向かって段々に下がった水田のひとつで、南区とは2mほどの比高差があった。基本的層序は、耕土と床土、茶褐色ないし灰褐色土、暗褐色土、暗灰褐色粘質土（整地土）、地山の順。暗褐色土は多量の瓦を含むが、中世の土器も出土。遺構の多くは暗灰褐色粘質土や地山面で検出した。

検出した主な遺構は、南区の東面回廊SC060と西雨落溝SD061、基壇東の南北溝SD552、北区の東面及び北面大垣SA500・570、SA500東の南北溝SD530・531、暗渠SX573・574などである。

回廊東扉口
の発見

東面回廊SC060は、北から9～14間目（南から第10～第15間）までを検出し、予想通り西に倒壊した多量の部材、瓦を発見した。基壇も良好に残り、蓮華座を造り出した礎石もすべて原位置にあった。柱間はここでも桁行、梁行ともに3.78m等間であった。特記すべき成果は、東側柱筋の12間目で南北端に軸摺穴をもつ地覆石SX065を検出し、ここが東扉口と判明したことである。他の地覆石は、第5次調査区と同様にすべて抜取られ、地覆材下に瓦・礫等を詰め込んでいた。

基壇は、部分的に断割った結果、北から9～11間目の基底部は地山を削り出していること、以南は古墳時代（5世紀頃）の旧流路SD568・569を埋め立て、これの上に版築していることなどが判明した。基壇上では、礎石と礎石の間で2条の掘立柱列（SX062・064）の他、棟通りでも掘立柱列（SX066）を検出し、さらにこれらと筋が通る掘立柱穴（SX067・068）を基壇外の西と東でも検出した。東面回廊の足場穴の可能性を強めたが、断定は避けた。

東面回廊の建物は、調査区南半の北から13・14間目が西に倒れ、遺存状態も良好であった。北から9～12間目は、部材がかなり片付けられたようで遺存状態も良くなかったが、基壇中央に棟通り肘木があることや基壇東方にも組物や壁が出土したことから、屋根から先に崩れ落ちたと推測できた。

部材は、地覆、柱、腰壁束、腰長押、頭貫、方立、連子窓、大斗、卷斗、肘木、藁座、茅負、垂木、多量の野地板や屋根木舞、各部の壁材のほか、軸摺金具、釘などが出土したが、扉板はなかった。保存状態が良好なため、軸部の高さに関して正確な復元資料を得られたこと、東扉口については脇の柱高が他と同一であり、一連の屋根が続く構造になること、扉は内開きで、法隆寺の例より狭く簡素な形式になるらしいこと、茅負の瓦操り幅が約31cmであり、瓦は柱間1間で12列であることなどが特筆できる成果であった。なお、腰壁束は下部の腐蝕が著しいこと、軒丸瓦は基壇両側で均等に出土し、早くに落下したらしいことから、東面回廊は倒壊前に、柱足元や軒先部がかなり傷んでいたと推測した。

基壇東の約0.5mで検出した南北排水路SD552は素掘りであり、埋土から10世紀頃の土器が出土した。SD552を覆う暗褐色有機土は東面回廊基壇東側石の上端近くまであり、回廊倒壊前に基壇の東側はかなり埋まっていたと調査時点では考えた。また、暗褐色有機土を切り込んで、基壇東縁近くに南北溝SD565を検出した（本報告では、SD565を回廊倒壊前に比定）。

白土採掘坑
の発見

この他、SD552より古い遺構として、LF区で東西溝SD069、LI・LJ区でSK550を検出した。前者は東扉口に関連し、東の通路の北側溝と推測。後者は第4次調査区から続く白土採掘坑で、東西回廊基壇以前と判明した。

大垣東北隅
の確定

北区の東面大垣SA500と北面大垣SA570は、大きな掘形をもつ掘立柱塀であり、両者の交点各1間分（柱間はともに約2.3m）を検出し、大垣の東北隅が確定した。調査時にはともに2時

期ある可能性を考えたが、断定には至らなかった（本報告では2時期）。第4次調査ではSA500上に土塁状の高まりSX535があったが、本調査区では削平のためか検出できなかった。ただし、SA500の西約1.5mには主に塼を用いた南北方向の暗渠SX573と、この西に石を用いて作り直した南北方向の暗渠SX574があり、これらの上にはかつて土塁状の施設が存在していたと推定した。暗渠SX574は、東側石がSA570の柱痕跡上にあるためSA570以後、土坑SK575によって破壊されていたことから12世紀前半頃までには廃絶したとみた。SX573の埋土からは奈良時代末頃の瓦が出土し、少なくともこの時期までは存続していたことになる。

SD530は、SA500の東で検出した幅約3.5m、深さ0.3～0.4mの素掘りの南北溝。第4次調査区で検出したSD530（7世紀後半まで存続）の北延長部にあたる。7世紀の土器が主体だが、上層では多量の瓦とともに黒色土器や灰釉陶器も出土し、平安時代に入ってまで存続していたことになる。これより新しいSD531は石積み溝で、第4次調査区の石積み溝SD531（存続は奈良時代前半頃まで）の北延長部にあたるが、11世紀前半頃の土器を含み、石もはるかに大きかった（本報告では第4次調査のSD531とは異なる可能性を考え、SD540と改めた）。

以上の他には、柱穴SX571・572・576などがある。このうちSX571は、SD531の東側石の東で検出したもので、SD531（本報告ではSD540）より古い。位置はSA570の東延長部になるが、SD531（SD540）の西には柱穴がなかった（本報告では第4次調査区のSA505と対応し、仮称「東北院」の北を区切る東西塼SA571と推定）。

遺物は、既述した多量の回廊建物部材や瓦のほか、各種の土器、緑釉陶器、白磁、金銅製飾金具や鉄釘、延喜通宝、木製品などが出土した。回廊創建の所用瓦は、山田寺式軒丸瓦Dと四重弧文軒平瓦A種の組み合わせ、垂木先瓦はD種であることが追認できた。なお、北区では、土坑SK575から12世紀前半頃を中心とする日常用土器が多数出土しており、付近に僧房・食堂等の存在が推定できた。

G 第7次調査

第7次調査では、南門の位置や構造、南門南方の利用状況などの解明を主な目的として、約1,150㎡を発掘した。調査地は東の山塊から西に派生する小丘陵北裾の西に低い難壇状の水田である。このうちの水田2枚に東西10～30m、南北約55mの調査区（南端の突出部が南区、以北が北区）を設定した。

調査区の基本的層序は、耕土と床土、黄灰褐色土ないし暗灰色砂質土、青灰色粘質土や青灰色微砂土等の中世頃の堆積層、赤褐灰色粘質土、整地土、地山の順。中世頃の堆積層は、中央部が約0.5mと厚いが、南と北では薄くなっていた。赤褐灰色粘質土は南区の堆積土で、8世紀中頃を主とし、10世紀後半頃までの土器や瓦を含む。地山は北区東北隅が青灰色砂礫土で南西下り、南区東南隅が花崗岩風化土で北西下がりであること、この間は古墳時代（5世紀頃）の土器を含む谷（SD593）や7世紀前半頃の斜行溝（SD607・619）などがあること、整地土はこれらを全面的に覆い、東北隅では0.1m前後だが、中央部では厚さが0.6～0.7mあることなどが判明した。この大規模な整地は、7世紀前半の旧流路や堆積土を覆っており、『帝説』裏書にみえる山田寺の整地年代（舒明13年=641）を裏付ける発見になった。遺構は整地土面と整地土下で

造 営 開 始
の 年 代

検出した。

整地土上面で検出した主な遺構は、遺構の先後関係や出土遺物などから、大きく2時期に区分した。以下ではA・B期として記述する。

A期は、南門SB001造営以前で、南面大垣SA600、この南の東西道路SF608と両側溝SD601・609などを作った時期。

南面大垣SA600は掘立柱塼であり、南門SB001の棟通り礎石下で3間分、この西と東でそれぞれ5間分と4間分、計12間分の掘形と柱抜き穴を検出した。柱間は2.35m（高麗尺で6.5尺）が基本だが、南門SB001下の少なくとも中央1間は広く、出入口と考えた（本報告では、1尺=29.55cmの唐尺とみて、中央3間28尺が前身南門SB599で、他を2.36cm、8尺等間と考定）。また、抜き穴の底に多量の瓦を敷き込んでいることから瓦葺きと推定した。

東西道路SF608は、SA600の南約25mにあり、幅が側溝心々で約10.8mであった。他にSA600とSD609との間には東西塼SA615や柱筋を揃えて東西に並ぶ柱列SA621・624があった（本報告では、SD609の北を広場SH650とし、柱列は幢幡の竿を立てた跡と推定）。

B期は、南門SB001と新しい南面大垣SA630・631を建て、南に東西大溝SD625と東西溝SD606、参道SF610と両側溝SD611・612などを作った時期。

南門SB001は、東半で一部円柱座を造り出した花崗岩の礎石6個、西半で礎石掘付け穴と抜き穴6個を検出し、桁行3間10尺等間（1尺=29.5cmと考えたが、本報告では1尺=29.7cm）、梁行2間9尺等間（本報告では8.5尺等間）とみた。桁行と梁行の柱間寸法が異なることから切妻であること、地覆石は残っていなかったが、棟通りに残る東の2個の礎石にそれぞれ軸摺穴があり、棟通りの柱間がすべて扉となる「3間3戸」という古代寺院では例のない形式であることなどがわかった。

南門は
「3間3戸」

SB001の基壇は、整地土上に積土を施し、縁に榛原石の板石を立て並べたもの。規模は東西約11.6m、南北約7.8m、高さは北ではほとんど差がないが、南で約0.5mと推定した（本報告では規模を若干変更）。基壇の東西端には塼や榛原石を用いた暗渠SX632・643があった。また、南には玉石敷、北には玉石を側石として内側に瓦を乱雑に敷いた犬走りが残っていたが、奈良時代の仕事とみた（本報告では、北の犬走りは本来、北雨落溝とみてSD647とし、暗渠SX632・643を通して南に排水とみた）。南門の北中央には玉石を側石とする中門への参道SX640があった。復元幅約2.2m。

南面大垣SA630・631は、古いSA600の柱抜き穴の底に瓦や平石を据えて柱を立て、一部には根がらみを差し込んで柱の沈下を防いでいた。柱間8尺（2.38m）等間。SA630・631の柱抜き穴は瓦を敷きながら版築状に埋めており、のち築地（SA650・651）に改められたこと、SD637・639は築地（SA651）に伴うと推定した。

東西大溝SD625は南門前にある基幹排水路である。2時期があり、古いSD625Aは幅2.5～3.8mの素掘りであり、南門中央間に幅をあわせた木橋SX622が架る。南に参道SF610と東西両側溝SD611・612（心々距離約10m）が伸び、SD611・612は東西溝SD606に注ぐ。のち、SD606・611・612は埋まり、SD625Aは南門部分を石組みとしたSD625Bに改められた。木橋も新造（SX623）。SD606の南約4mでは約1.2mの間隔で東西に並ぶ2個の柱穴SX605を検出。伽藍中樞線上に近く、幢幡の竿を立てた跡と推定した（本報告では古いSX604も同様の遺構とみ、SX604

南門前には
木橋と幢幡

を皇極・孝徳朝、SX605を天武朝から奈良時代頃に比定)。

B期の年代は、SD625Aによって削平された土坑SK626から飛鳥Ⅳの土器、南面大垣を破壊してSD625B上に流れ込むSD629から10世紀後半の土器が出土し、造営は天武朝、廃絶は10世紀後半以降で11世紀前半までの間とみた。SD625AからSD625Bへの改作時期は、SD625AとつながるSD612から平城Ⅲの土器が出土しており、奈良時代中頃と判明した。A期は、整地土下の遺構の年代観から、金堂や回廊が作られた皇極朝に比定した。南門地区で掘立柱大垣→礎石建南門と掘立柱大垣→礎石建南門と築地という3時期変遷が捉えられたことは大きな収穫であり、山田寺全体の変遷を考える上でも重要な指標となった。また、南面大垣と北面大垣との距離も約185mと判明した。

3 時期変遷

整地土下の遺構は、部分的に検出したにとどまるが、斜行溝SD607・619、掘立柱列SX620などである。これらのうち、SD607は幅約1.8m、深さ約0.2m、SD619は幅4.4m以上、深さ約1.5mで、前者から7世紀前半の飛鳥Ⅰの土器、後者から飛鳥Ⅰの土器や木簡が出土した。SX620は建物か堀か不明だが、SD607・619と同じように、東で北に12°前後の振れをもつ。これらの遺構は、木簡が出土したことから単なる集落ではなく、山田寺の願主である蘇我倉山石田石川麻呂の邸宅の一画である可能性を考えた。

山田寺以前は邸宅跡か

遺物は、多量の瓦罍類や各種の土器のほか、埴仏1点、木簡49点、銭貨5点、金銅製飾金具、鉄刀子、釘、土馬、砥石、木製の琴柱や曲物などが出土した。

木簡はすべてSD619出土で、習書などの削り屑が主。銭貨はSD612・625Aから和同開珎(初鑄708年)、SD625Bから貞観永宝(初鑄780年)と延喜通宝(初鑄907年)が出土した。軒瓦はすべて山田寺式であり、南門所用は軒丸瓦D種と四重弧文軒平瓦と判明。垂木先瓦はD種とB種がそれぞれ4割と3割5分を占め、彩色(赤・白・黒)を初めて確認した。また、「双頭単尾」の鴟尾が出土し、回廊の四隅に用いられたとみた。土器はSD619や整地土から飛鳥Ⅰが出土し、その下限を示す資料として注目された。他にSD625Bから「山田寺」の墨書土器、平安時代の土坑SK635から扁額の可能性のある雲形の黒漆塗り木製品、SK626やSD612から鞆の羽口、埴塼、鉄、銅滓などが出土した点が特筆できる。

垂木先瓦には彩色

H 第8次調査

第8次調査では、回廊東北隅とこの東の状況、未確認である寺域西限の状況や西門の有無を確認することなどを主な目的として、約800㎡を発掘した。

調査区は、第4次調査の北、第3次調査区の東に続く平坦な水田に東西25m、南北21mの東区、金堂の西で一筆ごとに西に急に低くなる水田に西区を設定した。

東区の基本的層序は、第4次調査区とほぼ一致し、耕土と床土、灰褐色砂質土、灰褐色粗砂や灰色粘土などの粘土・砂互層堆積B(厚さ0.2~0.5m)、淡灰色細砂や暗褐色砂などの粘土・砂互層堆積A(厚さ約10cm)の順であり、東面回廊上では瓦層、部材とこれを覆う暗褐色土、基壇土、東面回廊の東では黒灰色粘質土(下は暗黒灰色粘質土)、地山の白色粘土となる。宝蔵SB660の周辺、特に北側では黒灰色粘質土下に疎らだが瓦を敷いたような面があった。

西区では、後世にかなり削平され、耕土・床土直下が黄褐色砂質土の整地土面となる。整地

第三章 調査概要

土は、調査区南端では厚さが0.3～0.6mで、下は旧流路（SD568など）か谷の堆積土と思われる暗灰色砂や淡赤褐色砂の水平な層になるが、調査区北端では谷は深く西に向けて順々に埋め立てた状況が窺えた。埋め立ては少なくとも2段階があり、厚さは1.5mまで確認した。

東区で検出した主な遺構は、東面回廊SC060とこの東の南北溝SD552、宝蔵SB660、東面大垣SA500とこの上の土塁状遺構SX535などである。

回廊東北隅
の確定

東面回廊SC060は、東北隅から南へ5間分を検出した。基壇や建物の平面及び構造については、第4～6次調査の成果と著しく異なる点はない。新発見としては、基壇北端の礎石と礎石の間で軸摺穴をもつ地覆石を検出し、北扉口SX666になること、SX666は内開きだが、東扉口のSX065に比して20cm程広いこと、北から2間目に北面回廊南雨落溝SD081の水を東に流す暗渠SX670があること、SX670は榛原石を側や底、蓋とするが、西口では巨大な螻羽瓦を蓋に用いていること、東北隅の棟通りや入隅の西に小礎石SX673～675があり、東北隅の間はある時期床張りとなされ、北面回廊東端近くの内側は仕切られていたらしいことなどが判明した。東柱列には地覆材が残るが、地覆石のないところがあった。従来、腰壁の改修に伴って地覆石を抜き取り、その跡に瓦や粘土を詰めたとみてきたが、回廊建物全体の改修に及んでいたのではとの見解も出た。また、基壇の東側石の裏込めに瓦がかなり入っていることから、側石の一部は据え直された可能性を考えた。

東面回廊の建物部材はごく少なく、基壇上で地覆材が3本出土した程度であった。倒壊後に、基壇上に斜行溝SD667がつくられたことが一因。また、基壇上の粘土・砂互層堆積Bは薄く、部材の片づけも行われたと考えた。他に、基壇の東で大斗、肘木、垂木、角材各1本が並んで出土した（概報ではSD552に伴うとみたが、本報告では回廊倒壊後にSD552上につくられた溝SD561の護岸とした）。垂木には飛鳥・奈良時代では例のない反り増りをはじめ確認し、これが取り替え材とすれば、かなり大がかりな修理があったとの問題を提起した。なお、回廊北・東側の側石は倒れた状態で検出されたものがあり、倒壊前に基壇はかなり傷んでいたと推測された。

回廊部材
に新発見

SD552は東面回廊の東約0.5mにある素掘りの南北溝であり、11世紀前半の土器器皿が出土。北では宝蔵SB660の雨落溝から続く南北溝SD672と合流すると考えた（本報告では、SD552埋没後、この上にSD565がつくられ、やがてSD672に北で合流したと判断。11世紀前半の土器もSD565に伴うとみた）。

宝蔵SB660は3×3間の総柱の礎石建建物である。周辺から仏具や経典に関わる遺物が多く出土したが、経蔵と断定できないので宝蔵とした。柱間は東西が約1.7m等間、南北が約2.0m等間であり、高床の南北棟。周囲に幅1.0～1.5mの雨落溝SD661～664が巡り、北西に排水（SD672）する（本報告では雨落溝からSD672への排水は最終時期であり、それ以前は北東のSD665へ排水したと判断した）。礎石は上面を平坦にただけのもので、地山に乳白色粘質土を盛った上に据え、暗青灰色砂質土を積んで基壇土としていた。基壇の側石はない。基壇の出は約0.8m、高さは0.2～0.3m。創建年代は付近から出土した瓦によって天武朝とみたが、暗青灰色砂質土（青灰色粘質土）の基壇積土に9世紀後半の土器が含まれること、礎石下には地山を掘り窪めて瓦を詰め込んだ古い穴があることなどから、平安時代に入って地上げされたのではと考えた。また、茅負などの部材、仏具等が西側に散乱しており、回廊とともに10世紀末に廃絶したとみた（本報告ではSB660の改作を9世紀中頃、廃絶を11世紀前半とした）。

宝蔵は改修
のち倒壊

土塁状の遺構SX535は、上面に約1mの間隔をおいて瓦が南北に並ぶことから築地と判断した。東裾では石列も検出した。東面大垣SA500はSX535の北端部を掘り下げて検出。柱間は約2.3m。西面大垣と同様に、柱2本を一緒に抜取った穴があり、2時期あったと推測した。

西区で検出した主な遺構は、西面大垣SA680と西門SB685である。

西面大垣SA680は掘立柱塀で、柱間は2.25m等間。南面大垣と同様に古い柱を抜取った底に平石や瓦を敷き、この上に新しい柱を立てており、2時期(SA680A・B)と判断した。調査区の南から3～5間目の柱間は広く、西門SB685とみた。柱間は3・5間目が2.85m、4間目が3.25m。控柱はないので棟門である。これも2時期があった(SB685A・B)。東面大垣と西面大垣との距離は約118mと判明した。

西門の発見

遺物は、西区では少なかったが、東区では多量の瓦や各種の土器のほか、回廊や宝蔵の建築部材、木簡、木製品、金属製品、延喜通宝などが出土した。

木簡は宝蔵の基壇土上や雨落溝から計6点が出土した。天平11年(739)に石川年足が書写させて「浄土寺」に安置した、大般若経600巻の経帙に付けられたらしい題籤や、奈良時代後半から平安時代初期にかけての宝蔵の經典の出納に関わるものであり、山田寺の三綱の名前や經典の出納に「倉人」があたっていたことなども判明した。

大般若経の
題籤

木製品には、漆塗り及び素木の経軸、漆塗りの函、脚、厨子の扉や各種の仏具、金属製品には銅板五尊像、押出仏のほか、厨子の扉の座金具、蝶番、釘、唐草文透彫金具などがあり、これらの多くは宝蔵廃絶時に周辺に散乱したと推測できた。

多数の仏具

軒瓦はいずれも山田寺式で、回廊所用が軒丸瓦D種と四重弧文軒平瓦A種の組み合わせ、宝蔵は軒丸瓦C種と四重弧文F種の組み合わせと判明。土器類では、宝蔵周辺から白磁のほか多量の三彩、緑釉、灰釉陶器が出土し注目された。

I 第9次調査

第9次調査では、寺域東南隅部の状況を明らかにするため、約80㎡を発掘した。調査地付近は雛壇状の水田で東と南がかなり高く、これが寺域の旧状を示すのか、後世の改変なのかも問題であった。寺域東南隅には小川が西流しており、調査区はやや北に設定せざるを得なかった。

調査区の基本的層序は、耕土と床土、暗茶褐色土、丘陵の崩壊流出土である黄灰色砂や暗青灰色粘質土等(粘土・砂互層堆積B対応か、厚さ1.2～1.5m)、古代の瓦や土器を含む砂混り黒灰色粘質土(粘土・砂互層堆積A対応、厚さ0.7～0.8m)の順で、この下は中央部に南北方向の土塁状の高まりSX535があった。

SX535の東と西は、10世紀の土器を含む有機土混りの暗灰色砂土第1層、青灰色粗砂、9世紀初め頃までの遺物を含む暗灰色砂土第3層、整地土、花崗岩風化土の地山の順であり、別に東側では青灰色粗砂と暗灰色砂土第3層の間に東西大垣の倒壊を示す建物部材や落下瓦の堆積(暗灰色砂土第2層)が認められた。この層からは延喜通宝(初鑄907年)などが出土し、山田寺外郭の変遷について年代の一点をおさえることが可能になった。また、調査地付近の現地形は、後世に丘陵の崩壊土が繰り返し流入して形成されたもので、創建時の大垣東南隅部は回廊東南隅よりもさらに1m程低く造成されていたことも判明した。

検出した主な遺構は、東面大垣SA500とこの上の土塁状遺構SX535、東の南北溝SD530・531などである。

東面大垣
も倒壊

東面大垣SA500はSX535の南端を掘下げ、東南隅から3間目にあたる大きな柱穴を検出した。断割り調査などによって、柱掘形の底から約0.7m上に礎板があり、新旧2時期が考えられること、少なくとも幅約2m、高さ0.4mの基壇があったこと、西には素掘り溝SD695があったことなどが判明した。また、東では建築部材の垂木、斗、棟木や落下瓦が出土し、東面大垣の屋根が東に倒壊したことがわかった。この層からは既述した延喜通宝とともに10世紀の瓦も出土し、倒壊年代を10世紀前半に比定した。

SX535は、SA500の倒壊部材や瓦を埋め込むようにして整地したのち、SA500上に瓦を混じえた粘質土や砂質土を盛土したもの。幅は下端で約3m、上端で約1.2m、高さは約0.7m。残存最上部には約1.2m間隔で南北方向に2列の瓦列が残っていた（本報告では、これを築地本体の基底とみ、SX535をSA535に改変）。従来、SX535の築造年代を大きくは平安時代としてきたが、今回の調査で、上限が10世紀前半と判明した。廃絶については、上に厚く崩壊流入土があることから、東面回廊と同様に、10世紀末～11世紀前半に埋没した可能性を考えた。

SD530・531は、SA500の東にある素掘りの南北溝である。北の第4次調査区で検出した溝の続きになるが、今回検出したSD531は石組でない点に若干の疑問を残した。ともに年代の決め手になる遺物は出土しなかったが、土層からみると、SD530はSD531に改められること、SD531はSX535築造以前に埋まったと考えた（本報告では、SD531上に流路SD540があり、11世紀に入っても機能したと推定）。

遺物は多量の瓦のほか、建築部材、各種の土器、貞観永宝（初鑄870年）や延喜通宝、鉄釘、灯籠の一部かと考えられる蓮弁を彫り出した石製品などが出土した。

SA500の所用瓦については、落下状態や垂木の長さから、1列は軒丸瓦1本と軒平瓦1枚、丸瓦2本、平瓦3枚となること、丸・平瓦は時期的にみると格子叩き目をもつ皇極～天武朝のもの他、縄叩き目をもつ奈良時代のもの、さらに布目痕の粗い10世紀頃のものがあり、長い年月の間に幾度か修理されたことなどが判明した。

J 第10次調査

第10次調査では、南面回廊及び回廊東南隅部の状況を明らかにするために、約170㎡を発掘した。調査区は西に低くなった水田であり、東と北を小川が流れていた。史跡整備に伴って周辺に盛土をし、水路も作り換えたことから、東では第5次調査区と重ねて調査することも可能となった。

調査区の基本的層序は、耕土と床土（盛土）、明灰褐色砂質土、茶褐色砂や赤茶色砂（粘土・砂互層堆積Aに対応）、倒壊した建築部材や落下瓦を含む暗青灰色粗砂層の順で、南面回廊の基壇土直上に薄い暗青灰色粘質土があり、基壇の南では暗青灰色粗砂、灰黒色粘砂土、暗灰色砂質土、暗緑灰色砂質土、地山の緑灰色粘土ないし茶褐色粘質土の順であった。暗青灰色粗砂は10世紀後半～11世紀初頭頃の土器を含み、南面回廊は東面回廊とともに東からの流入土によって倒壊したと考えた。基壇南の灰黒色粘砂土や暗灰色砂質土でも10世紀中頃～11世紀初頭の土

器が出土。回廊倒壊に近い時期には、基壇側石の上端あたりまで埋まっていたと推測した。

検出した主な遺構は、南面回廊SC050とこの南の東西溝SD705、暗渠SX700などである。

南面回廊SC050は、出隅（東南隅）から西6間目までの礎石すべてと、入隅とこの西の礎石が完存していた。北西部は、近世の遺物を含む旧水路（SD702）によって破壊されていたが、2箇所礎石抜き取り穴を確認した。礎石は花崗岩で蓮華座を造り出すこと、南側柱の礎石にだけは地覆座があり、地覆材も残ることから、南側は壁や連子窓で閉じるが北側は開放であったこと、柱間は桁行、梁行ともに3.78mであることなど、東・北面回廊と同じ知見を得た。地覆石は南面回廊でも抜き取っており、そのあとに鴟尾や縦位縄叩き目の平瓦などを詰めて地覆材を置いていた。ただし、地覆石の抜き取り痕跡（SX710）から出土した土器は10世紀中頃～後半の土師器を含み、東面回廊の場合より1世紀ほど新しくなるといった問題も出てきた（本報告では回廊の地覆石抜き取りを10世紀後半頃に比定）。

回廊東南隅
が確定

基壇は一部地山を削り出し、この上に0.2～0.4mの版築を施したもの。側石は花崗岩の自然石を1石並べていたが、一部は回廊倒壊前に倒れていた。また、側石と南側柱の礎石との間には地覆石抜き取り後の基壇土らしき土があり、倒壊前に積み直しが行われた可能性も出てきた。基壇復元幅約6.4m、出約1.3m、高さ約0.5mであった。基壇上では礎石と礎石の間や棟通りで掘立柱穴列（SS713・720・721）を検出した。このうち南のSS713は、地覆石抜き取り痕跡下にあり、いずれの柱穴も柱抜き取り穴を確認したことから、回廊の足場穴と推定した。また、回廊東南隅の間では、東西の棟通りに2個、入隅の礎石のすぐ東と南側礎石間で各1個、計4個の比較的小さな礎石（SX708・713・715・717）を検出。同様の礎石は第6次調査の回廊東北隅の間にもあり、床張りと考えたが、天井を支える支柱の礎石ではとの見方も示した。

回廊の改修

SD705は、南面回廊の基壇側石から0.4～0.6mにある素掘りの東西溝。南肩は調査区外になるが、第5次調査区の西壁にもかかっており、幅は約0.7m、深さ20cm以上になる。湧水のため一部を掘下げただけである（南面回廊の南雨落溝とする見解もあったが、本報告では基壇から離れていることなどから雨落溝とみない）。なお、SD705埋没後には、南面回廊側石近くに東西溝SD732があり、回廊倒壊以前に埋まったこともわかった。

暗渠SX700は南面回廊の東端から2間目で検出。側と蓋に榛原石、底に大きな方磚を半截したものを用いており、東面回廊の西雨落溝SD061からの水を南に流す。暗渠が詰まったためか、一度天井石を外したのちに元に戻していること、この時か後に南・北両端の天井石や側石は取り除かれたこと、最後には天井石上に素掘り溝SD731が掘られ、埋没したSD705上を南に流れることなどが判明した。

遺物は、倒壊した多量の建築部材や瓦のほか、土器、鉄釘などが出土した。

南面回廊の建物部材には、地覆、柱、頭貫、肘木、卷斗、茅負などのほか野地板、腰壁や木舞が多くある。地覆材は残りがよく、両端は柱にあわせて半円に刳った様子が初めてわかった。木舞も残りがよく、組み方に異なるものがあることから、補修のあった可能性が指摘された。棟木を受けた肘木と卷斗は組んだまま出土し、棟が真下やや東に落下したことも推測できた。

落下瓦については、棟通りに面戸瓦や鬘斗瓦が多く、北側に丸・平瓦列が反転していることなどから、棟は真下に落下し、北流れの屋根はくの字状に折れたと推測した。また、南面回廊所用は、出土比率から、山田寺式の軒丸瓦D種と四重弧文軒平瓦A I種、垂木先瓦D種と判明し

たが、落下瓦には軒丸瓦はなく、軒平瓦や垂木先瓦は少量であることから、倒壊時には丸・平瓦と若干の軒平瓦が葺かれていただけで、軒先部もかなり荒廃していたことが推測できた。

K 第11次調査

特別史跡「山田寺跡」の整備を進める上で、回廊東南隅から中門の南を流れる小川の付け替えが必要となった。第11次調査は、その付け替え予定地の適否を判断し、あわせて山田寺南門前で検出した東西大溝SD625の東と西の延長部を確認するために実施した。

調査区は、南門の北東部に東西約35m、南北約3.5mの中央区、南門の東南と西南に5m四方の東区と西区を設定した。面積は約175㎡であった。ただし、東区は地表下約2mまで下げたが、堆積土が続き、安全を考慮し遺構面に達しないまま終了した。

中央区の基本的層序は、耕土と床土（盛土）、暗褐色土、中世の遺物を含む砂や粘質土及び微砂の互層堆積（暗灰色砂土、黒灰色土など）、青灰色粘質土の整地層、岩盤風化の青灰色地山の順。地山は西に緩やかに傾斜し、整地土は西半にあった（厚さ約20cm）。西区の基本的層序は、耕土・床土、暗灰色土、暗褐色土、緑灰色地山の順であった。

中央区では、西端の整地土面上で疎らではあるが瓦敷SX750、東西小溝SD751・752を検出した程度。中央部の西端以東では、湧水が激しいこともあって、整地面を下げることができず、顕著な遺構を発見することはできなかった。HP・HQ11区の黒灰色土直上の砂層から回廊とは異なる大型の肘木や垂木などの建築部材が出土した。

西区では、地表下約0.9mの地山面で、南門前の東西大溝SD625の西延長部を検出。素掘りであり、幅2.8～3.2m、深さ0.6～0.8mであった。埋土に砂礫を多く含み、相当の水量があったことが窺えた。遺物から10世紀後半頃まで存続したと推定できた。なお、調査区の西南隅で重複する2個の柱穴らしい穴を検出したが、詳細を明らかにするには至らなかった。

遺物がまとまって出土したのはSD625であり、瓦は丸・平瓦の他に山田寺式軒瓦50点、垂木先瓦46点、鴟尾2点などがあった。

L その他の調査

山田寺旧境内と周辺で実施した立会調査は、Tab.5の通りである（Fig.2参照）。1990年代前半までは、個人住宅の擁壁工事や水道管埋設工事などに伴うものであったが、1996年以降は、特別史跡「山田寺」の整備に伴うものであった。その多くは小規模な調査であり、顕著な遺構がなく、包含層から若干の瓦や土器を採取した程度だが、一部では貴重な成果を得ることができた。

まず、1978年に山田寺第2次調査補A・Bとして、講堂と東北と北で実施した水道管埋設に伴う調査である。ともに幅が0.5～0.6mと狭かったが、講堂東北で東西方向に掘削したA区では、心々で約5.2mの距離をおいて東西に並ぶ比較的小振な礎石2個と基壇土及び西端で瓦を含む溝らしきものを検出。東面回廊推定位置の北延長部になることから回廊に関わるものか僧坊と推測した（本報告では東僧坊SB110に比定）。講堂北で南北方向に掘削したB区では、北端で1個の大

僧房の発見

Tab.5 山田寺立会調査一覧表

調査回数	調査地区と位置		調査期間	面積	担当者
飛鳥藤原第10-4次 (山田寺立会1974)	5BYD-IHK	講堂南西	1975.2.9	5㎡	猪熊兼勝
飛鳥藤原第23-9次 (山田寺第2次補A)	5BYD-IIJ	講堂北東	1978.2.13・14	30㎡	松本修自
飛鳥藤原第23-9次 (山田寺第2次補B)	5BYD-IIJ	講堂北	1978.2.15・16	15㎡	松本修自
飛鳥藤原第36-32次 (山田寺立会1982)	5BYD-IIJ	講堂北	1982.6.21	27㎡	藤田広幸
飛鳥藤原第37-39次 (山田寺立会1983A)	5BYD-IIJ	講堂南西	1983.7.28	10㎡	藤田広幸
飛鳥藤原第37-40次 (山田寺立会1983B)	5BYD-IHK	北面大垣北	1983.7.20	25㎡	藤田広幸
飛鳥藤原第75-25次 (山田寺立会1994)	5BYD-新D	講堂北東	1995.3.27・28	17㎡	羽鳥幸一
飛鳥藤原第81-28次 (山田寺立会1996)	5BYD-新N・H	南面回廊南	1996.5.23.6.19	63㎡	伊藤敬太郎
飛鳥藤原第83-15次	5BYD-新D・E	講堂東	1998.2.5.3.16・17	100㎡	水戸部秀樹
飛鳥藤原第91-2次A	5BYD-新D	講堂東	1998.4.16	6㎡	伊藤敬太郎
飛鳥藤原第91-2次B・C	5BYD-新L	西面大垣	1998.4.16	5㎡	伊藤敬太郎
飛鳥藤原第91-5次	5BYD-新M	講堂南西	1998.5.21	1㎡	田福 涼
飛鳥藤原第91-12次	5BYD-新M	講堂南西	1998.9.25	1㎡	水戸部秀樹

きな掘形と柱根を検出。金堂心から約110mに位置し、寺域北限を示す施設の可能性がでた（のち北面大垣SA570と判明）。

講堂の西では、1983年や1998年の調査で、地山や整地の状況がつかめ、中世の土坑なども検出した。中門と南門を西流する小川の改修工事に伴う1996年の調査では、護岸に転用された円形の柱座や地覆石をもつ礎石2個の他、加工跡の残る石材を多数拾得することができたのも成果であった。

なお、山田寺の西方約160mの地点では、1974年に奈良国立文化財研究所飛鳥資料館の宿舎建設に伴う事前調査を実施し、幅約4m、深さ1mの東西大溝を検出した。溝の堆積土は3層あり、南東に振れる流れもあった。溝内では7世紀後半から8世紀に入る土器や瓦が出土し、山田寺の四重弧文軒平瓦もあった。この溝は、現県道桜井-橿原線の南にある旧道の南約5mに位置し、古代の山田道の南側溝であり、東に延びて山田寺の南辺に至る可能性もでた。

4 調査日誌

A 第1次調査

5 BYD-L・M地区

1976年4月28日～10月13日

4.28 調査の開始にあたって、本堂にて供養。

4.30～5.17 耕土排土。

5.18～5.24 塔跡を含む東区の床土（灰褐色土）を東から塔跡東辺の33ラインまで除去。測量・地区杭打ち。

5.26 33ライン以西では、床土下に暗褐色土がある。焼土・瓦を多量に含む。

5.27 土層観察用の南北畦を37ライン、東西畦をTラインに設定。35ラインから西へさらに床土除去。塔の表土除去開始。排土は篩をかける（埴仏など出土）。MR～LB区、35～37区で塔基壇土とみられる黄褐色の積土確認。塔南のMQ36区では床土下に焼土の拡がり確認。

5.28 塔土壇表土除去終了。MP37区西側は床土下に赤褐色粗砂が拡がり瓦器含む。南端のMK～MM区、35～39区で黄褐色土検出。推定中門位置だが土自体は置土の様子。塔基壇は南と北を検出したが不明確。北側の突出は階段か。

5.29 塔基壇の南北規模を確認（約40尺）。西側はかなり破壊されている。

5.31 40ライン以西床土除去。塔南西のQ～S区、40～42区では床土下に焼土堆積し、焼けた瓦が多量埋没する模様。重弧文軒平瓦と垂木先瓦数点出土。

6.1 調査区北端の排水溝壁面でみえる褐色粘質土は山田寺造営時の盛土と推定。西北部に落込み（SK201）あり。西区（43ライン以西）の床土除去開始。

6.3 西区の床土除去は48区で中断し、東区にベルコン移動。43区から東へさらに床土除去。LC41区の瓦溜り（SK203）から埴仏出土。MNライン以南（中門地区）はかなり下る。

6.7 40～41区の暗褐色土層（焼土含む）で大量の軒瓦、垂木先瓦、鉄釘、丸瓦、平瓦出土。

6.8 塔西の瓦を多く含む暗褐色土（焼土含む）下でバラス層検出。瓦を含むバラス層の下は黄褐色粘質土層。

6.9 MS～LC区、41・42区の暗褐色土は焼土まじりで瓦器を含む。

6.10～6.14 41～43区の暗褐色土、バラス層除去。バラス層は瓦が暗褐色土に比べ少なく、小さいものが多い傾向。バラス層より10世紀頃の

土師器皿出土。鉄釘数点出土。

6.15 LA～LC区、41～42区の土坑（SK201・203）は、バラス層を切ると判明。

6.16 焼土を含む暗褐色土や灰褐色粘質土は、東で次第に薄くなり、33区まで延びない。この下には灰褐色粗砂・青灰色砂・暗青灰色（暗褐色）粘土層が東に厚く堆積する。この下はバラス面である。田植えのため作業進まない。

6.21 29～33区のS区以南はバラス上面まで排土。バラス面では材木片出土（東面回廊の部材か）。S区以北も排土。

6.22 MS33区の焼土混り暗褐色土から焼けた部材出土。MR32区のバラス層上面で青銅製の風鐸の風招（一部鍍金確認）出土。

6.24 32～34区、S区以南のバラス層除去。バラス層の下は瓦敷が部分的にある。瓦敷下は33区以西が黄褐色粘質土の整地土、以東が青灰色粘土の地山。

6.29 S区以南ではほぼ東端までバラス層除去。この下の瓦敷は29～30区中間で終わり東に拡がらない。瓦敷の写真撮影。S区以北はまだバラス層に至らない。

7.1 現場班交代。塔を精査し、東階段北コー

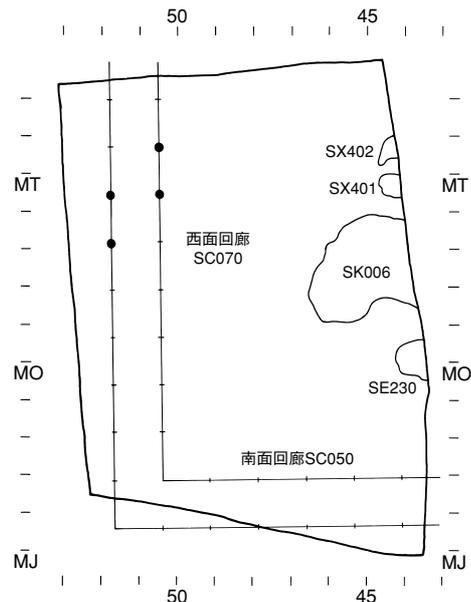


Fig.7 第1次調査区（西区）1:600

ナーで花崗岩の地覆と思われる痕跡確認。東階段南コーナーでは、幅約50cmの花崗岩製地覆石確認（延石か）。付近から切り欠きのある凝灰岩製切石（羽目石か）が出土。

7.2 塔の規模は、南北11.6mで、化粧石の幅を考えると約12m（40尺）。塔東南隅で犬走り端を検出。南側の階段を検出。塔の北で大型塙仏の下半部出土。

7.5 塔の西面階段は陶磁器片を含む土坑で破壊されている。塔南方のMP区以南バラス層除去。

7.6 塔の東では断面図をとり畦畔を除去。S区以北は東からバラス層上の青灰色砂・暗青灰（暗褐）色粘土の排土を再開。塔の西ではバラス層除去。この下で瓦敷検出。

7.7 塔の西のバラス層下は一面瓦敷。瓦敷に接して塙と花崗岩を据えた張り出し確認。西階段の犬走りの見切りのようだ。塔基壇南西隅の化粧石採取溝から瓦器（鎌倉時代頃）出土。

7.9 「山田寺塔跡碑」を講堂の北西側に移す。塔の北東では焼土を含む暗褐色土を掘り下げる。瓦の出土量多い。塔基壇上精査。北西隅の礎石は四天柱の一つで座っている模様。中央の礎石は別の礎石をもってきて置いた可能性強い。

7.13 塔北側の瓦敷追求。西面階段と同様、犬走りのコーナーに花崗岩遺存。南面階段の南東で犬走りの花崗岩切石（20×40cm）が東西に3個並ぶ。この南は花崗岩よりややレベル低いバラス敷になる。

7.15 塔の南のバラス敷清掃。35区を境にバラス敷から瓦敷に入れ換わるか。

7.16 塔の南バラス若干下げ瓦敷検出。塔の北でも瓦敷面出す。

7.19 塔北西の土坑（SK201・203）ほぼ完掘。南側の土坑（SK201）が新しい。

7.20 調査区北東部でバラス面出す。LC28区で木器（瓦座など）出土。

7.24 塔の南ではバラス除去。瓦を敷く部分と無い部分あり、一部参道のため石を立てたような痕跡確認。

7.26 塔の南では瓦敷の参道を画する側石あり。参道（SF004）は幅約1.5m。S区以北では、27・28区のバラスを除去し瓦敷検出。この辺に回廊を想像していたが、さらに東になるようだ。

7.30 西区（43区以西）の調査再開。床土下面を精査。

8.2 東区では、塔北東のバラス除去。塔基壇上の礎石実測。西区のN区以北は、床土下が黄褐色土。東区の整地土（褐色粘質土）に対応するようだ。排水溝の断面でも、バラス・瓦敷面は残っていない。43区のP～R区は暗褐色土が広がる（のち土坑SK006と判明）。MO43区は石組の井戸（SE230）の可能性。N区以南はかなり削平されている。

8.4 東区の中門付近はかなり下る。伽藍中軸線から東約7mの所で南北に2個の柱穴（一辺60cm）検出。掘立柱の中門になるのか？。西区は46区まで進む。小溝などを掘り下げながら黄褐色土面を出す。

8.9 中門の掘立柱穴は桁行4間（東から14尺、10尺、12尺、12尺）、梁行1間（14尺）分検出。

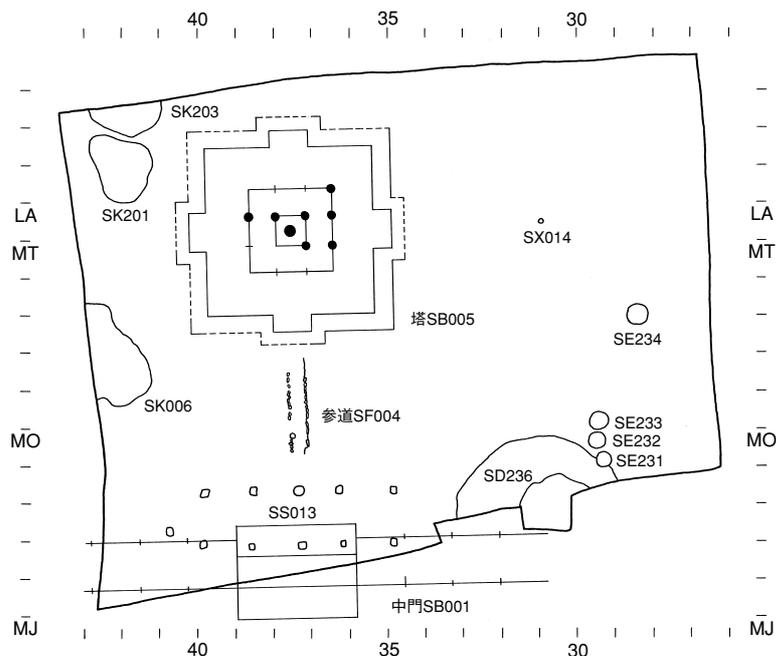


Fig. 8 第1次調査区（東区） 1:600

南半は調査区外。足場穴として礎石及び据え付け痕跡が失われたとすれば、3間×2間の礎石建物をもつ中門と考えられる。西区は48区から残っていた床土を除去しながら整地土を出す。

8.11 東区南端で石組井戸（SE231）、30～33区の大土坑（のち流路SD236と判明）掘る。西区では、50区のMS・MT区で、西回廊の礎石採取穴2個検出。

8.13 西回廊の礎石採取穴を51区のMR・MS区で新たに2個検出。削平が著しく北にも南にも続かない。

8.18 塔基壇上精査に入る。心礎位置にある石の南にある大きな盗掘坑を掘り下げる。下に心礎が遺存する可能性強い。四天柱の裾付け穴を出す。

8.19～20 東区全体と西区の一部を写真撮影。

8.21 現地説明会。来訪者約300人。

8.23 心礎位置にある礎石を除去。四天柱の礎石をひっくり返していたと判明。心礎盗掘穴から凝灰岩質の灯籠の一部も出土。

8.24 四天柱礎石上面から約1.3m下で心礎を発見。舍利孔の内側に朱が残る。朱のあり方から蓋はあった（厚さ3cm）と推定。遺物は完全に盗掘されており、金箔のついた埴仏のみ出土。

8.25 空撮のためのターゲット打ち。心礎下面に及ぶ盗掘坑を掘る（土は水洗選別するが顕著な遺物なし）。心礎の厚さ約70cm。裏に円形の柱座を造り出しており、驚く。

8.26 西区は実測用の遣方を組みはじめる。

8.27 空撮終了。塔周辺の地上写真撮影。

8.30 西区は実測に入る。

8.31 西区の実測終了。東区では実測用の遣方を組みはじめる。

9.1 西区四周の土層実測。東壁でみると、大き

な土坑が3個ある（SK006・401・402）。井戸（SE230）から曲物底板、燈明皿（中世）出土。

9.2 西区東端の3個の土坑を掘る。南側の土坑（SK006）は大きく、瓦多量出土。整地土は南・西端で厚さ80cmはある。

9.4 東区は中門地区から実測開始。

9.6 西区土坑（SK006）の掘り下げ終了。フイゴ、金属滓、多量の瓦と完形軒丸瓦など出土。土器は7世紀後半が下限。塔周辺の実測に入る。

9.7 西区南端は一部掘り下げた結果、川跡と判明。瓦や礎石出土。時期は近世。

9.8～11 台風の為、作業中止。

9.13 水の汲み出し。塔周辺や中門地区の実測。西・東区とも一部で埋め戻し開始。

9.14 西区の土坑の写真撮影。埋め戻し。

9.20 塔の四天柱及び側柱の礎石据え付け痕跡掘る。

9.21 平面実測ほぼ終了。埋め戻し続行。

9.22 塔基壇の断割りに入る。東区東南で井戸（SE232・233）を掘り下げ。

9.24 塔基壇東西方向の断割り。地山から深さ約1mの掘込み地業をしており、古式土師器出土。版築土は固く一枚一枚はがれ、僅かに瓦片を含む。炭は少量。

9.28 塔基壇の断面実測はじめる。

9.30 塔基壇の断面の写真撮影。

10.1 塔基壇の南北断面の実測終了。心礎の搬入方法や根巻き粘土の状況など判明。また、階段は版築をカットして基礎地業をしていること、この中に凝灰岩が入っており、凝灰岩を塔に持ち込んだ段階での仕事であることも確認。

10.2 塔の埋め戻しに入る。

10.12～13 ブルドーザー2台で埋め戻し。調査終了。

B 第2次調査

5BYD-K・L地区

1978年1月17日～7月31日

1.17 調査区西辺から表土除去開始。

2.3 金堂基壇周辺を残し、東辺の表土除去。西辺で床土を一部除去。床土は非常に厚い模様。床土の下部から焼土、埴片出土。

2.4 金堂基壇北方の表土除去開始。

2.8 金堂基壇南側調査区で地区杭打つ。

2.10 金堂基壇北方の表土除去終了。基壇近くの表土除去。

2.14 ベルコンを東西に並べ、発掘区南端から床土下の灰褐色土（33区以東）を掘下げる。34

区以西では灰褐色土下の暗褐色土（暗褐色砂土）を掘下げはじめる。瓦器片少量出土。垂木先瓦、埴片など出土。

2.15 暗褐色土は焼土を含み、瓦も多い。

2.17 排土が金堂基壇付近に達し、南に折り返す。土層観察用に、南北畦を37ライン、東西畦をJラインに設定。

2.22 発掘区東辺から排土。

2.28 金堂基壇東辺の灰褐色土を除去。瓦の出土量やや増す。

3.2 灰褐色土除去は東端まで達す。金堂東北部の31～32区で、南北に並ぶ暗渠風の瓦敷（瓦列）を検出。

3.3 発掘区東端より西方に向かって部分的に残る灰褐色土除去。灰褐色土下は暗青灰色粘土と灰褐色砂等の互層。発掘区南端で排水溝を掘り下げ、瓦溜り状土坑（SK203）検出。

3.8 東辺では暗青灰色粘土除去。暗青灰色粘土中から建築角材や3m余りの自然木出土。金堂基壇北東31・32区の瓦敷面精査。この東はバラス面になるか。L・N区の34ライン付近では、旧水田水路底から基壇の地覆と推定される切石出土（中軸より11m余りの距離）。

3.13 金堂基壇北方の調査に入る。北排水溝の所見によると、39区を境に西は灰褐色土で殆ど遺物を含まず、東は黄色っぽい土で瓦片を多少含む。西の南北排水溝は地表下約60cmで地山の花崗岩風化土になる。灰褐色土から巴文軒丸瓦片とこれとセットになると思われる軒平瓦片が出土。

3.15 金堂基壇北方では、地表下25cm程で北面回廊の基壇土と礎石抜き取り穴3個検出。

3.16 北面回廊追求のため発掘区を一部東へ拡張（36区）。回廊基壇の北と南で側石の花崗岩の石列を検出する。回廊の南はバラスと瓦片散布。

3.17 金堂基壇北側だけでなく西側も灰褐色土を掘り下げ。

3.18 金堂基壇周辺では、バラス面より上で焼土層を検出する。回廊北方は灰褐色土をさらに下げる。

3.20 金堂基壇の北、Nラインに沿って切石列検出。39区で北に曲がり張り出す。階段の張出しだろう。基壇際で地覆石列を検出。地覆石の北は切石を敷き詰めている（犬走り）と判る。O区以南はバラスなし。

3.25 回廊部分の調査は一時休止し、金堂周辺の調査に主力を注ぐ。Fライン付近は瓦層が切れ東西溝（SD209）がある模様である。焼土、炭化材を含む。灯籠の台座石（SX012）検出する。金堂基壇の周辺では、焼土・炭化物多く、金堂は焼失の可能性高い。壁土付きの埴仏出土。

3.27 金堂基壇の東南部では、東西溝（SD209）につながる南北溝（SD208）があるようだ。LG32区で金銅製飾鋳、LI32区で金銅製四葉（隅木先）飾金具、LG33区で大官大寺式軒平瓦が出土。南北溝（SD208）に伴うものか。

3.30 金堂基壇の東辺では、34ライン上で犬走りの切石を検出。発掘区東面では、青灰色粘土を排土し、バラス上面を出す。32～33区以西は暗褐色土など排土。LE35区で蓮華花卉様の銅製

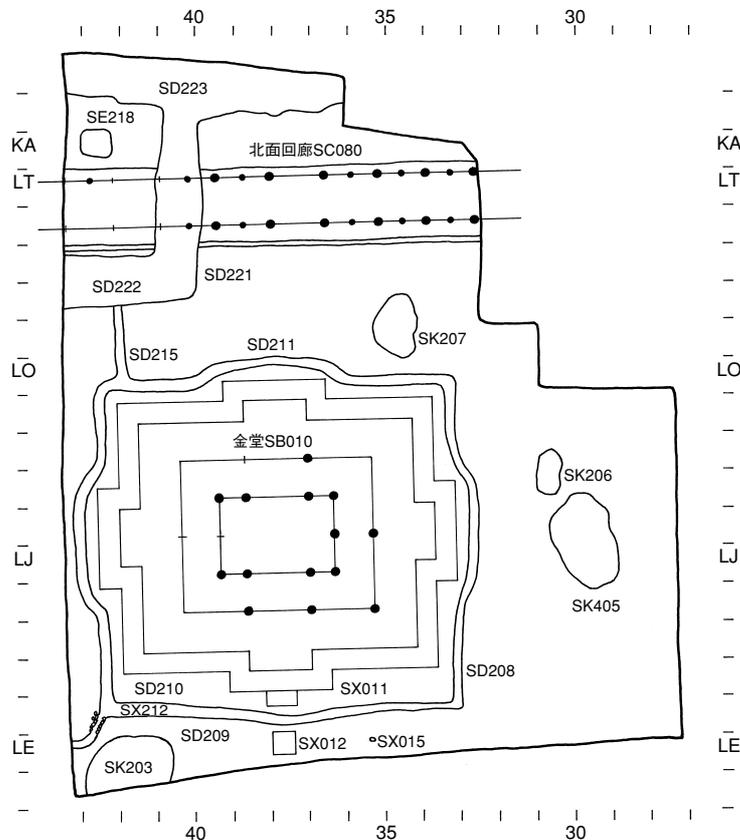


Fig.9 第2次調査区 1:600

品（隅木先飾金具）出土。

4.1 金堂基壇東方はH区に至る。

4.3 新旧現場班引き継ぎ。金堂周辺の精査と併行し、東からバラス面を追い西進。金堂基壇東辺の南北溝（SD208）を下げる。

4.4 東西畦（Jライン）以西では、33区までバラス面を出す。LE・LF区の33ライン上で焼けた建築部材5本（角材・茅負など）南北に揃えて出土（のちSD208の護岸に使用と判明）。金堂基壇東辺で階段の出らしい石列と敷石検出。この上には焼土・炭化物がある。基壇南では、1.2m×2.4mの大敷石（礼拝石SX011）を検出。

4.5 金堂基壇の南は35区までバラス層あり。

4.6 金堂基壇上の表土除去に入る。

4.7 金堂基壇南のバラス上面を除去。瓦製円筒立った状態で出土（SX015）。すぐ西で瓦敷検出。

4.10 金堂基壇北西部で榛原石上に直立する地覆石を検出する。犬走りには榛原石を3～4枚敷く模様。金堂東南隅で犬走りの敷石を検出。榛原石で少なくとも3列敷く。調査区南西部で、バラス層を切る瓦溜り風の土坑（SX203）掘り下げる。LE42区南端部に平瓦を4枚立てて区切っている様子だが意味不明（のちの暗渠SX212）。

4.12 金堂基壇上のH・I区で礎石の抜き取りを思わせる大きい穴計4個検出（埋土は表土と同じで抜き取りとすれば明治頃か）。一段下で黄褐色の基壇土検出。金堂基壇の東と南でバラスを除去し瓦敷検出。

4.13～18 金堂基壇南辺部精査。金堂前の大敷石（礼拝石SX011）は階段前の犬走りの見切石に接し当初の可能性高まる。金堂南辺犬走りの石の上面は火を受けており、金堂焼失は一層確実になった。大敷石の南で灯笼の八角形台座を出す。石灯笼を囲む様に石列検出。

4.20 金堂基壇東辺のバラス層を除し、瓦敷検出。32区で瓦敷を切る南北溝（SD208）掘下げ。南北溝には焼土や炭化材の破片などを多く含む。

4.24 灯笼周辺の清掃と写真撮影。金堂正面階段付近で、段状になった基壇土検出。上面に凝灰岩の粉末が付着する。階段の構造は不明。金堂基壇上面を精査。I区の2個の礎石は生きていそうで、この西に並んで2つの礎石抜き取穴がある。H区の礎石抜き取穴よりスパンが短い、中軸線に対称にある。特異なプランになる可能性大！

4.26 金堂北面と西面の犬走り・階段を精査。北階段は基壇土の出は殆ど削平され残り悪い。西階段の北耳石（以下、階段羽目石）の北面にレリーフ発見！

4.27 金堂基壇北で東西溝（SD211）、西で南北

溝（SD210）検出。この結果、金堂の四周を溝がめぐっていると判明。これらはいずれも焼土層を切っているとわかる。

4.28 金堂北側柱筋の礎石抜き取穴は残りが悪い。金堂西辺と北辺で南北溝と東西溝を掘る（SD210・211）。金堂基壇北のバラス層を除去し北進。一部に瓦敷あり。

5.2 金堂西北部の地覆石（花崗閃緑岩）上で羽目石（凝灰岩）の下端が部分的に残ることを確認。北階段では踏みづら石と思われる花崗岩の底部がへばりついて段状に残ることを確認。金堂北方はバラス除去。金堂をめぐる溝はLN41区で北（SD215）へ、LE42区で南（SD213）に延びる。前者では細長い石2個を排水口（SX214）に据え、後者では平瓦を立て並べて暗渠（SX212）にしている。

5.4 北面回廊の精査に入る。回廊上の40区に南北大溝（SD221）があり、南で東西大溝（SD222）と連結しL字状になる。埋土から鎌倉時代頃の巴文軒丸瓦出土。南北大溝の西で、回廊柱礎石抜き取穴2個検出。東では南雨落溝（SD081）を出す。

5.9 回廊北側に東西方向の溝があるが、雨落溝でなく新しいとわかる。玉石が処々にあるのは回廊基壇の側石だが、原位置に残るものはほとんどない。

5.12 金堂基壇上の礎石抜き取跡を掘る。東妻の南北に長い穴は地覆石抜き取跡（底に花崗岩粉末付着）。

5.13 現地説明会。参加者約350人。徹夜で仕上げた金堂復元パース（fig.6）をおひろめする。

5.16 金堂東辺の南北溝（SD208）掘下げ。炭化材（肘木など）出土。炭化材は南北に並び、その東辺にそって杭がある（護岸か）。北面回廊以北で井戸（SE218）検出。発掘区北端部では地山面が出る。回廊基壇は地山を削りだしているようである。

5.19 北辺部L字形大溝（SD221・222・223）を掘る。鎌倉時代頃の巴文軒丸瓦や鬼瓦のほか完形丸瓦及び青磁片など出土。金堂東北部に残るバラス層を除去し、瓦敷面出す。土坑（SK206）から筒状石製品、木製品（木負か）など出土。SK206は当初井戸と考えていたが土坑と判明。

5.23 SD221の西で北回廊の礎石抜き取穴数個を検出。SD221より東の礎石抜き取穴に比べスパン狭い。後者は中軸線上の両脇2間なのでここが北門になるのか？

5.24 北回廊西（SD221以西）で礎石計6個出土。礎石はいずれも掘り起こされ転倒した状況。北側の礎石3個には地覆座があるが、南3個には

ないので、回廊の内側は開放と推測。

5.25 北回廊東の礎石は据え付け掘形見える。また、礎石の抜取り穴の間にも穴を検出。回廊の建て替えか？（のち足場穴と判断）。

5.26 北回廊周辺の調査は今日ではほぼ終了。

6.1 金堂基壇南と東の瓦敷清掃。瓦敷の軒丸瓦、垂木先瓦取り上げ。礼拝石を洗う。

6.5 金堂基壇上面及び周辺の清掃。

6.6 北回廊写真撮影。金堂基壇上面及び周辺の清掃。

6.7～8 金堂とその周辺写真撮影。

6.9 実測のため遣り方組みはじめる。

6.13～15 実測。

6.16 実測。北面回廊の柱間及び北門の有無を明確にするために、金堂北東部を拡張（33～35区P～T区）。北回廊の基壇上面が出はじめ、拡張区東で礎石抜取り穴3個検出。

6.19 瓦敷の年代をつかむために、瓦の特徴をもとに瓦敷の色分け図をつくり始める。

6.21 北回廊の検出はほぼ終了。

6.22～24 雨のため作業中止。発掘区四周の壁がかなり崩れる。

6.26 金堂と周辺の平面実測ほぼ終了。瓦敷の埋め戻し開始。

6.29 LJ29区付近で瓦敷の下にある大土坑（SK405）検出。瓦片多量出土。布も出土。

7.5 平面図終了。

7.6 レベル読みほぼ終了。瓦敷色分け図終了。

7.7 実測ほぼ終了。金堂東北区瓦敷の一部を取

り上げる。石灯笼基壇の断割りに入る。

7.8 金堂東と北で整地層観察のトレンチを入れる。発掘区北端から埋め戻し。井戸（SE218）掘り下げ。

7.11 金堂基壇の断割りに入る。

7.13 石灯笼基壇の断割の結果、東側側石は二次的だが、南北と西側側石はオリジナルと判明。金堂基壇土より7世紀前半の土師器出土。版築は固く締まっている。

7.14 金堂の各階段の版築土は金堂基壇土を切っていると判明。また、南・西階段では凝灰岩屑を版築途中埋め込んでいるとわかる。

7.17 石灯笼台座を取り上げる。金堂基壇の断割りは深さが3m20cm程になり、この面で一旦止めて実測。南階段部分は地山に到達。階段の版築土下に不整形の穴を検出。

7.18 調査区の北・東壁断面図は7割ほど完了。

7.20～21 断割り各所の写真撮影。

7.25 北回廊の断面実測。金堂の各階段断割り。北・東・西階段の版築土下でも不整形の穴を検出するが、性格不明。

7.26 北回廊埋め戻し。調査区西壁の断面実測。

7.27 金堂の版築土の底を確認。実測・写真撮影ののちすぐ埋め戻す。

7.28 金堂全体を埋め戻し始める。西階段耳石（羽目石）取り上げ。

7.31 第2次調査終了（8.7～10 北回廊の礎石6個を取り上げ）。

C 第3次調査

5 BYD-K・L地区

1979年5月11日～9月14日

5.11～5.19 北面回廊内から講堂東にかけて南北約65mの調査区（以下、東区）を設定し、重機によって上土除去。

5.21 ベルトコンベヤーをセットし、南半の東から床土除去開始。排水溝を掘る。北面回廊部分で原位置にあると考えられる礎石7個を早くも検出。東排水溝では、北面回廊基壇上面で多数の瓦出土。測量準備。

5.22 床土除去。検出した北面回廊礎石には火災痕跡を認めず。測量。

5.23 床土除去。北面回廊上面及び北側に多量の瓦が落下したような状態で出土。完形の四尊埴仏も出土。KB区北の灰褐色粘質土で、11世紀頃の土師器、黒色土器とともに金銅製蓋容器の蓋のつまみ出土（土坑状の落ち込みSK429）。こ

の上は灰褐色砂質土。

5.24 床土除去。発掘区南端を3m南へ拡張し、第2次調査区と重複させる。地区杭打ち。

5.25 KA～KH区の灰褐色砂質土を下げ、灰褐色粘質土上面を出す。灰褐色砂質土は茶褐色砂と灰褐色砂の互層で遺物を殆ど含まない。灰褐色粘質土から鬼面文瓦や11世紀頃の土師器少量出土。

5.28 KH～KJ区の灰褐色砂質土除去。講堂周辺の耕土除去。南北水田畔の石垣（KM～KP32区）は講堂礎石を転用したのが多い様子（造り出しのある礎石7個確認）。

5.30 講堂基壇東側の床土及び灰褐色砂質土除去。講堂の東、31区にそって瓦堆積検出（KI～KM区）。KI32区で凝灰岩出土。32区付近に基壇

東縁がくることはほぼ確実。KM32区で多量の炭と花崗岩粉末の詰まった穴を検出（のち庇北東隅の礎石抜き取り穴と判明）。

5.31 KLライン以北、31ラインまでの灰褐色土を掘り下げると、地山面が出る。KM～KO区は一段落ち、溝（SD455）になる様子。KL27区からKP35区にかけて斜に送水管あり、土堤状に残す。北面回廊の礎石8個を出し清掃。東西3間分の総長は11.34mで、1間平均は3.78m。南北柱間寸法も3.78m。

6.1 N区以北は灰褐色砂質土が厚く堆積し、底未検出（SD455）。同層から中世土器（瓦器、土師器、播鉢）小片と瓦出土。N区以南は灰褐色砂質土下が地山の黄褐色砂礫土。北面回廊以南の床土除去を開始。

6.4 KL27区には野井戸が半分ほどかかっている。地山はH区以北が黄褐色砂礫土、以南が黄褐色岩盤。

6.5 北面回廊以北は灰褐色粘質土を除去し、調査区西端より遺構検出。回廊内のようなバラス敷、瓦敷なく直接岩盤となる。北面回廊の北では完形に近い丸瓦、平瓦多く散乱。KB29・30区で円形の穴2個検出（SE432・433）。灰褐色粘質土層より掘り込まれる。KK29区の不整形な土坑（SK450）から多量の瓦と共に11世紀頃の土器出土。瓦器1片出土。

6.6 KJ30区の方形土坑（SK440）は東西2.5m、南北2mで、焼土が堆積。底面はベット状に高まり隅に小柱穴あり。中から大量の瓦や梵鐘の鋳型、13～14世紀頃の瓦器が出土。灰褐色粘質土はH区以北に殆どなく、南で厚い。この層から11世紀頃の土器出土。

6.8 KI29と28区の2個の穴（SX445）は長径1m、短径60cmの卵形の掘形で、径30cmの柱痕跡がある。柱痕跡は深く、木質遺存。KD27区の土坑（SK434）は、径1.5m、深さ1mで、灰褐色粘質土から掘込む。11世紀の瓦器と多量の瓦出土。回廊の北では瓦多し。北面回廊の西でさらに2個の礎石を出す。地覆石の抜き取り穴は未検出。基壇は地山を削り出したものであるが、礎石部分を除いて一部削平されている。基壇縁は南側が良好に残っている模様。礎石心から1.2mで花崗岩玉石並ぶ（乱石積み基壇か）。

6.9 北面回廊南の灰褐色土除去する。基壇北縁に沿って東西溝があるが瓦堆積より新しい。基壇北側の側石は28～29区間で良好に残る。長辺70cm前後の花崗岩玉石で南縁のものより大きい。礎石上面よりやや低いがもともと一段と推定。

6.12 北面回廊及び回廊以南の調査。北面回廊基壇は南北縁を出す。礎石列からの出は1.2m（約4尺）、よって基壇幅は20.5尺。基壇南縁の雨

落溝（SD081）は東の排水溝で確認。幅約45cm。南側石は約20cm低くなる。基壇高は45cm前後。南の礎石列のうち、東2の西側には心上に榛原石（26×57cm前後）が2個並ぶ。地覆石（SX421）であろうが、創建時ではないだろう。LN28区の茶褐色砂質土（バラス層上の粘土・砂互層堆積A相当）で金銅製飾板、LP30区褐色粘質土（灰褐色土下、茶褐色砂質土上）で緑釉杯出土。

6.14 北面回廊南側のバラス層を除去。瓦敷及び地山が出る（LN～LQ区）。バラス層で黒色土器出土。LO30区で瓦敷のない部分あり、バラスが直接地山にのる。

6.18 北面回廊と周辺の瓦敷、バラス面清掃。礎石清掃の結果、南側列の東2の礎石には単弁12弁の蓮華座があること確認。礎石の高さは瓦敷面から30～40cm。基壇幅は6.45m。

6.20 北面回廊周辺の瓦堆積写真撮影。

6.21 北面回廊周辺の瓦堆積の実測。講堂付近では、KI33・35区で礎石抜き取り穴検出。いずれも身舎南側柱筋のもの。また、KK・KL33区でも礎石抜き取り穴を検出。これが身舎妻柱とすれば講堂は8間。礎石の抜き取り穴には焼土・炭を含むものがある。

6.23 講堂東辺の調査。KL34区に近世の大土坑あり。K区以北31～32区の焼土を除去。多量の瓦と埴片1点、土器、凝灰岩片出土。瓦器、土師器からみると14世紀。KL区の32ラインで講堂基壇東縁の地覆石抜き取り穴と思われる長さ1m、幅30cm程の落込みを2箇所検出（SX460）。南側の落込みの埋土には焼土含む。北側に花崗岩小塊と瓦。

6.25 東区北端で大溝（SD455）を一部掘下げる。遺物は瓦が圧倒的に多く、土器は少ないが平安～中世頃。KN27区でSD455より古い整地土風の赤褐色粘質土あり（のちSK454）。KM30区の落込み（SK462）は北側に延びる。北面回廊の瓦堆積実測。

7.2 KKライン上の土層観察用畔をはずす。JK28区で方形の土坑（SK447）を検出。北面回廊北側の瓦堆積取り上げ。下の灰褐色粘質土を下げ、地山（黄褐色土）出す。調査区東壁が崩れ補修。

7.3 北面回廊瓦堆積取り上げ。北側の礎石のラインにそって壁のしっくいと思われる茶色っぽい白色粘土検出。LT29区で方形土坑（SK425）検出。土坑の壁に沿って瓦が落ち込む。12～13世紀頃の土器片数点出土。南雨落溝（SD081）を検出。瓦堆積を取ると、若干の焼土を含む赤褐色砂土があり、完形に近い平瓦、丸瓦が出土。10世紀頃の土師器を含む。回廊北側で雨落溝なし。側石に沿って溝状にやや凹むが後世の溝。回廊

上の瓦堆積（焼土混り茶褐色粘質土）下には、基壇直上までの間に間層（淡灰褐色砂質土）がある。

7.5 回廊上面の淡灰褐色砂質土を除去し、30区以西の遺構検出。その結果、礎石間で方形の穴4個を確認し掘り下げ（本報告では足場穴SS079）。土師器が2片出土。LS32・LR32区で礎石抜き取り穴を検出し掘り下げ。回廊以南のLQ28～LR32区では、バラス層を除去して地山と瓦敷を出す。雨落溝南側の石列は瓦敷の面より10cm、地山面より20cmほど上。

7.6 瓦敷の検出と清掃。瓦敷面のKP・KQ区の32ライン上と29～31区のパライン上では、直交する溝状遺構（SX420）をバラス層下で検出。水抜きか。北面回廊上のLS28区で方形穴2個検出（本報告では足場穴SS079）。LS29区の礎石間で地覆石の抜き取り溝（SX421）検出。この東の礎石据付け穴は地覆石下にある。

7.9 北面回廊以北の清掃と遺構精査。KB29区のSE432から瓦多数出土。古い時期の土坑（SK430）から瓦、土師器、須恵器出土。

7.10 東区は清掃後、空撮用ターゲット打ち。北面回廊西半（西区）の調査に入り、床土排土開始。遺構の残存状態は悪い模様。

7.12 西区のLR45区で礎石抜き取りらしきもの検出（南側柱筋の中央から6間目）。花崗岩粉末が一部残る。LR48区にも大きな穴があるが、礎石の落込み穴のようである。

7.13～16 東区空撮（13日）後、地上写真撮影。

7.18 東区は実測の遣り方、西区では47区以东の遺構検出。LS47区で礎石落込み穴、LR47区で礎石抜き取りらしきものを検出。後者は南北大溝（SD481）に切られて島状に残る。

7.19 東区は実測用糸配り、西区は遺構検出。LS49区とLR50区で北面回廊の礎石落込み穴検出。LS49区には褐色粘質土が東西溝状にあり、14～15世紀初頃の土師器出土。

7.20 西区の南北大溝（SD481）の掘り下げ。13世紀頃の瓦器と瓦少量出土。回廊の礎石抜き取り穴は、東の3個は確実のようだ。SD481以西のものは礎石落込み穴だが、その礎石も抜き取られている。回廊基壇は全く残存しない。東区講堂部分を実測。

7.21 現地説明会。参加者約230名。

7.23 西区清掃後、写真撮影をする。西区遣り方を組む。

7.23 西区清掃後、写真撮影をする。西区遣り方を組む。

7.24 西区実測。

7.25 東西両区の平面実測ほぼ終了。

7.26 西区は四壁の断面図にかかる。東区では北東の整地層を掘る。土坑（SK454）となる。飛鳥ⅢまたはⅣの土師器、須恵器出土。

7.27 講堂東北方の東西大溝（SD455）を3箇所断割り。深さ約2.5m。瓦と13～15世紀の土器出土。東区は瓦敷実測。

7.28 西区のLS47区の礎石落込み穴より古い土

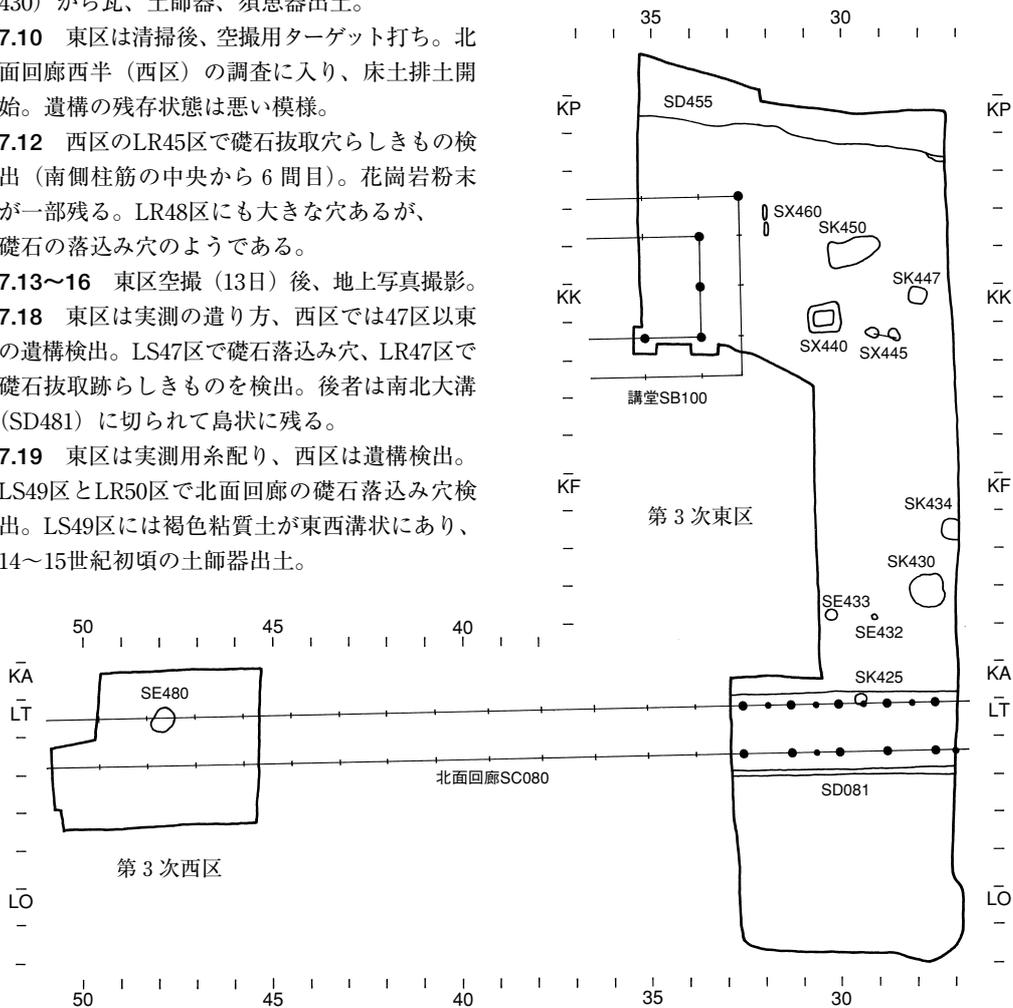


Fig.10 第3次調査区 1:600

坑を掘下げる。井戸（SE480）と判明。

7.30 西区の井戸（SE480）を掘る。瓦器、鎌倉時代の軒平瓦や14～15世紀初の土器出土。東区では講堂の礎石の据付け穴を捜す。東妻のものは方形で黄褐色砂質土が埋土。他の抜き跡では据付けを検出できない。基壇土は残っていない。

7.31 講堂礎石抜き跡を写真撮影。西区の井戸（SE480）平面実測と写真撮影。井戸は石組で、中位より上に瓦、塼を混用。底部に一枚石。

8.1 西区の井戸は実測後に埋め戻し。東区では瓦敷実測と講堂周辺の断割り調査。

8.2 講堂周辺の壁土層図にかかる。西区重機で埋め戻し。

8.3 西区埋め戻し終了。講堂の南側礎石抜き跡部分を拡張。

8.4 北面回廊南雨落溝（SD081）の瓦取り上げ。KB29区の井戸（SE432）の実測。

8.6 北面回廊南雨落溝の瓦取り上げ。この下は茶褐色粘質土の堆積。黒色土器、土師器出土。回廊からの深さ45cm、溝側石からの深さ25cm、溝底は石がなく地山。瓦敷実測終了。講堂南壁の土層図終了。KI35区で礎石据付け穴を確認。柱痕跡をもつ柱穴2個（SX445）断割り。

8.7 講堂の階段や基壇を確認するために、講堂の北側礎石の北方にトレンチを2箇所設定（北区）。東トレンチを掘る。地表より60cmまで灰褐色土で、近世磁器等含み新しい。講堂の東では方形土坑（SK440）など断割り調査。

8.8 講堂の北側、東トレンチの灰褐色土を排除。北半部の地山面で細溝検出。基壇土は礎石の下

端近くしか生きておらず、階段の張出痕跡は認められない。西トレンチでは地表下35cmで基壇土確認。新しい時期の破壊を受け、北1mの所で急に落ちる。

8.9 北面回廊実測。南側柱筋の東から2番目の礎石西に接して置かれていた榛原石2個（SX421）取り上げ。石の下面と基壇上面間は若干の汚れた土があり、石は基壇直上に載っていない。

8.11 北面回廊側石の立面図作成。瓦敷のない部分（LO30・LN31区）に小トレンチを入れる。いずれも褐色ないし暗褐色土の整地土層で、北側は瓦敷下に入る。講堂北方の北区の調査では、基壇築成途中で礎石を据え、後さらに積土施していると判明。面図作成後埋め戻す。

8.13 北面回廊上で東西に並ぶ掘立柱掘形と回廊基壇断割り。掘立柱掘形（SX079）に柱痕跡はなさそうだ。基壇は地山削り出し、上に厚さ30cm前後の積土を行う。基壇側石は基壇積土上面から掘形を掘って据えられている。裏込めに凝灰岩・瓦含むものがある。講堂北方の北区埋め戻し終了。講堂の現存礎石を実測するため遣り方を組む。瓦敷に砂を掛ける。

8.14 北面回廊の礎石据付け穴を確認。岩盤を掘込み、礎石を据えた後に基壇築成を行うものと、基壇上面から礎石据付け穴を掘るものがある。時期差ではなく、使用された礎石の厚さによるものであろう。東区東壁南半の断面図終了。

8.16 東区埋め戻し開始。

8.17～19 講堂の現存礎石を実測のため清掃。

8.20～24 講堂の現存礎石を実測。

9.14 東区の埋め戻し終了。

D 第4次調査

5 BYD-L・M地区

1982年8月23日～1月27日

8.23 金堂東方の里道東に2箇所の調査区（以下、西を北Ⅰ区、東を北Ⅱ区）を設定し、排水溝を掘る。

8.24～26 北Ⅰ区の耕土除去。

8.30 北Ⅰ区の耕土除去終了。排水溝をさらに下げ、西端では地表下80cmで瓦堆積層検出。東端の排水溝でも瓦多量出土。寺域東限の施設に関連したものか。

8.31 北Ⅰ区の東端から床土除去開始。

9.3 床土除去終了。西端から下の灰褐色ないし青灰色砂質土除去を開始。中・近世の土器出土。地区杭打ち。

9.8 北Ⅰ区の東端から下の灰褐色砂土除去を開

始。軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦少量出土。瓦器、青磁器片を含む。

9.14 灰褐色砂土除去は西端に到達。北排水溝を掘り下げ東面回廊の礎石を検出。地表から礎石の上面まで約1.2m。現状であと厚さは40cmあり、瓦多数堆積。

9.16 23・24区の淡褐色砂土掘下げ。淡褐色砂土は23区以西にあり、灰褐色砂や褐色土等の互層。瓦はこの層の底に顔を出し、東面回廊基壇上面まで続く模様。LL24区北で部材検出。棟木か。西にも同様の部材あり。23区以東は、茶褐色砂土で、少量の瓦と黒色土器、13世紀代の瓦器を含む。この下は青灰色砂土。

9.17~20 21~14区の青灰色砂土（16~17区）除去。瓦・土器は少量。13世紀代の瓦器を含む。

9.21 東から折返し、青灰色砂土下の暗灰色砂土除去。15区を中心に瓦堆積。瓦堆積層にはりついて瓦器片出土。

9.22 16~18区の暗灰色砂土除去。LN16区で銅板独尊押出佛（山田寺十二尊仏と同原型）出土。銅釘付着。

9.25 18~20区の暗灰色砂土除去。LK19区で片面に黒漆を塗った材出土。厨子の一部か。瓦器を含む。

9.27 20~23区の暗灰色砂土除去。北排水溝では暗灰色砂土下に暗灰色粘質土、暗褐色有機土が堆積。暗褐色有機土は瓦を多量含み、遺構面に直接のる。

9.29 北I区の西端に達し、東面回廊基壇土の瓦堆積を出す。上面は暗茶褐色粘質土中、下面は砂混り暗青灰色粘質土中にある。南東部（LJ23区）の礎石周辺では暗灰褐色粘質土が砂層に下に入り、瓦とともに11世紀前半の土師器皿出土。南端礎石（LJ23区）下には地覆が遺存し、北に延びる。地覆石はない。写真撮影。基壇東縁は玉石を並べている。この東の暗灰色粘質土から11世紀の土師器大皿出土。

9.30 東面回廊上の瓦堆積と基壇縁の清掃。東側の礎石4個検出。南2個は遺存良好で蓮弁残る。柱間は3.78m等間。北1間に残る地覆には腰壁東の納穴が2箇所ある。基壇縁は乱石積みで、地山に直接据える。東からの基壇高約70cm。瓦堆積の下層から10世紀後半~11世紀前半の土

師器出土。東側の礎石列周辺では壁土らしきものの多量散布。

10.1 22~23区の暗灰色粘質土除去。厚さは10~20cm。瓦は小片が主で基壇上のような瓦堆積の状況でない。北排水溝では暗灰色粘質土下が暗褐色有機土、淡青灰色粘質土、明青灰色粘質土、花崗岩風化土（地山）の順。暗褐色有機土上面には木片多く、加工痕跡のあるものや竹片が出土。奈良時代後半の軒丸瓦も出土。

10.4 22・23区で暗褐色有機土や淡青灰色粘質土を除去し、地山面検出。23区東で南北溝（SD552）検出。基壇縁より1.2mの位置。溝から10世紀頃の黒色土器A類出土。

10.5 21~22区の暗褐色有機土除去。暗褐色有機土は木片含み瓦多量。木製品や10世紀頃の黒色土器などが出土。

10.6 19・20区の暗灰色粘質土除去。11世紀頃の瓦器出土。LK22区で瓦敷（SX551）出す。垂木先瓦や製塩土器出土。

10.7 東面回廊上の瓦堆積を写真撮影。18・19区の暗灰色粘質土と暗褐色有機土除去。暗褐色有機土中に根をはった立木がある。

10.8 15~18区の暗灰色粘質土除去。18区で暗褐色有機土がなくなり、幅約2m程の平坦面をもつ土塁状（SX535）になる。南の西裾に大きな石がある。土塁状の積土には奈良時代の6134系の軒丸瓦や縄叩き平瓦を含む。土塁状の高まり（SX535）東では暗灰色粘質土下の淡青灰色砂土から「□寺」の墨書ある奈良時代の土師器出土。

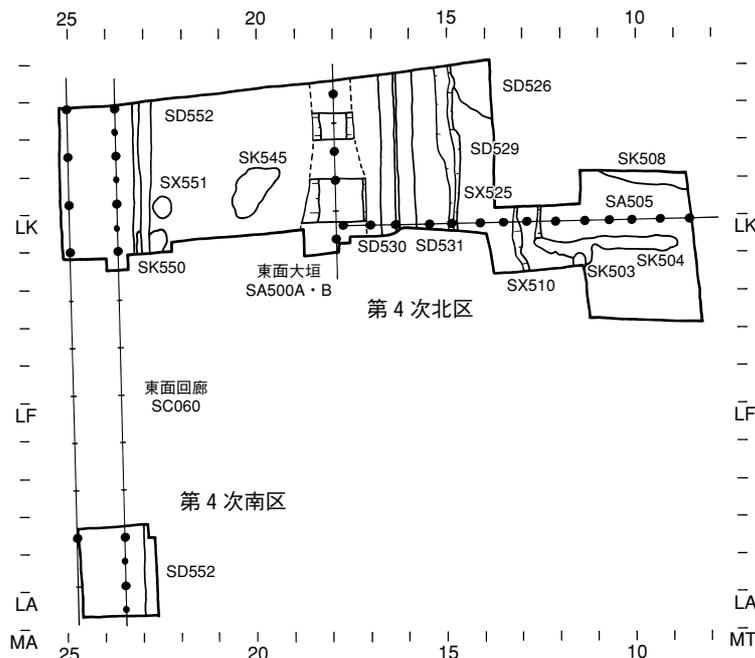


Fig.11 第4次調査区 1:600

10.9 14～16区の暗灰色砂土除去。LN15区で「経論司」と墨書された題籤出土。土器では10世紀代が目立つ。

10.12 北Ⅰ区南壁雨のため大崩壊。東面回廊の瓦堆積写真撮影。のち瓦堆積実測のため遣り方を組む。14・15区の暗灰色砂土除去。暗灰色砂土の土器は11世紀前半が最新。LN14区では暗灰色砂土下の淡青灰色砂質土上面で押出仏2点出土。釘で木に打ち付けている。

10.13 東面回廊瓦堆積の実測を開始。15区の暗灰色砂土除去。下は暗褐色有機土、16ライン以西は淡青灰色砂質土で西へ徐々に高くなる。

10.14 18区以東に残した暗灰色砂土を除去し、土塁状高まり(SX535)を出す。土塁状高まり以西は暗褐色有機土を除去。LM18区では暗灰色砂土下の淡青灰色砂質土上面で馬骨出土。

10.15 18～21区で暗褐色有機土除去。土器は10世紀頃、瓦は奈良時代後半の軒瓦含む。馬の遺存体出土。東の水田(北Ⅱ区)に試掘坑入れる。耕土は15cm、床土は80～90cmで、地山となる。地山は西に傾斜。

10.16 18～20区の淡青灰色粘質土上面を削り遺構検出。20ライン西側で幅約40cmの南北溝(SD538)検出。平安時代の土器含む。土塁状高まりの西側で南北溝(SD537)検出。瓦と少量の土器片及び馬歯出土。

10.18 北Ⅰ区の15区で暗褐色有機土除去。LK14区とLM14区で炭を含む土坑(SK539・541)検出。土器小片からみると平安時代か。16ラインの北と南に石がある。石列の西が溝か(のちSD531と判明)。

10.20 東面回廊上の瓦堆積実測終了。21区以東の上層遺構を写真撮影。記者発表。

10.21 東面回廊上の瓦と建築部材取り上げ開始。瓦堆積下半の砂混り暗青灰色粘土で10～11世紀頃の土師器、黒色土器出土。北Ⅰ区の21区以東を実測するため遣り方を組む。北Ⅱ区の耕土と床土除去開始。

10.23 東面回廊上の瓦取り上げ。砂混り暗青灰色粘質土中に板材や斗を発見。僅かだが10世紀後半の土器含む、10世紀後半に回廊が崩壊した可能性強まる。北Ⅱ区では、東端の床土直下(深さ約60cm)で花崗岩の地山検出。ここから西に大きく傾斜する模様。

10.25 東面回廊上の瓦取り上げ、基壇面を出す。北Ⅱ区北東隅の凹み(SK508)から神功開宝、ガラス片(のち、玉髓片と判明)、三彩出土。時期は奈良～平安(9世紀前半)。

10.26 北Ⅰ区は西に拡張し東面回廊の西側礎石列出す。礎石はすべて遺存。北Ⅱ区では、Kライン上の地山面で掘立柱掘形を東西4間分(SA

505)検出。柱根が残るものもある。柱間1.8m。塀と平行する土坑(SK504)や小穴検出。

10.27 東面回廊基壇面清掃。地覆石抜取を掘る。17・18区の土塁状の高まり(SX535)と西の淡青灰色粘質土、東の暗灰色砂土を掘下げ(M区以北)。西の19～20区では地山面出る。土塁直下では山土の盛土層上で瓦敷部分を検出。東の16ラインでは花崗岩玉石列検出。石列と土塁間は南北大溝と思われる。瓦、製塩土器など出土。

10.28 北Ⅰ区の土塁状の高まりや東の南北大溝(SD540)のL区以北を下げる。南北大溝を下げ、地山を削り込んだ溝(SD530)の西肩と、石積み溝(SD530)を検出。素掘りの南北大溝(SD530)が一旦埋まった段階で東の石積み溝(SD531)に作り直す。石積み溝から土師器、須恵器、木簡出土。奈良時代か。古い溝(SD530)から平瓶、皿等出土。7世紀後半か。土塁は山土上面まで下げ瓦敷(瓦列)を出す。土塁の東肩には瓦敷より少し高い位置に瓦列検出。

10.30 現地説明会。参加者約200名。

11.2 北Ⅰ区では土塁(SX535)西側のJ・K区、18～20区の淡青灰色粘質土(暗青灰粘質土)除去。平安時代(9世紀)の浄瓶片出土。下層の明青灰色粘質土も除去。瓦・土器片出土。15区では地山が垂直に落ちる(SX525)。土塁の北・南端を掘下げ、落込み検出。柱穴か(のちSA500)。

11.4 北Ⅰ区の14～17区南端で地山を出し柱穴列検出。北Ⅱ区の東西塀(SA505)の延長と推定。柱穴は西へ延びず土塁下で北折すると推定。東西塀より新しい小柱穴も検出。土塁以西地山面で土坑検出(SK545)。白色粘土を取った跡か。

11.8 北Ⅰ区の土塁南辺部を下げる。既検出の瓦敷(瓦列)より上でも瓦敷(瓦列)を確認。この面に黒色土器がはりつく。瓦敷(瓦列)は何面もある模様。

11.9 土塁上面(L区南)で2列の瓦列検出。石積み溝(SD531)掘る。東西塀を明らかにするため、北Ⅰ区と北Ⅱ区の間を掘下げる。床土下は青灰色砂質土、暗灰色砂土、灰色粘土、地山の順。

11.12 北Ⅰ区と北Ⅱ区間では東西塀(SA505)の掘形を灰色粘土面で検出。南東隅で土坑(SK503)検出。

11.15 東西塀(SA505)は18区まで検出(13間)。この塀は石積み溝(SD531)、南北大溝(SD530)より新しいこと確認。

11.17 北Ⅰ区の南に調査区(以下、南区)を設定し、耕土・床土除去。排水溝を地表下120cmまで下げるが、北区で検出した瓦堆積はまだ未

確認である。

11.18~19 北Ⅰ・Ⅱ区空撮（18日）ののち、地上写真撮影。

11.20 北Ⅰ・Ⅱ区実測のため遣り方を組む。

11.22 南区では、床土下の褐色ないし青灰色砂礫層を除去。さらに下の暗灰色ないし灰色砂土層を除去し、暗茶褐色粘質土中で瓦堆積検出。湧水激しく、排水溝を掘るため瓦堆積を一部除去し、茶褐色有機土を出す。茶褐色有機土上面で回廊支柱及び連子窓2間分検出。西に向かって倒れた様子。

11.24 南区は基壇側石や頭貫等を検出するため拡張。

11.26 南区の部材（連子窓、長押、頭貫など）を全体的に出し始める。連子窓の連子子が遺存する部分（北から15間目）と、壁に改作した部分（北から16間目）とがある。部材周辺から10世紀後半～11世紀前半の土器が少量出土。瓦は東側柱上を中心に堆積し、軒平瓦と平瓦が落下した状態を示す。腰壁東や地覆を一部出す。礎石を現位置に確認。北Ⅰ・Ⅱ地区の実測開始。

11.30 南区の清掃。記者発表。

12.1 南区の瓦堆積を写真撮影（奈文研埋文センターによる）後、一部瓦取り上げる。倒壊した回廊について新聞各紙一面トップで報道し、見学者多い。

12.3 南区の出土部材を写真測量（奈文研埋文センターによる）。

12.4~5 見学会。4日（土）には2,400~2,500名、5日（日）は約3,000名。

12.6 南区の遣り方、糸配り終了。

12.7~14 北Ⅰ・Ⅱ区と南区の実測。南区の部材を順次取り上げる。

12.15 南区の写真撮影及び実測。北Ⅰ区で基壇面精査。側石の掘形出す。北1間目（北端より6間目）の地覆石には溝状の落込みが伴う。ここから土器や金銅製飾金具が出土。地覆石の西には白土を含む壁土が残る。北1間目の基壇土（黄褐色粘質土）は、礎石の方座を覆い、本来のものでない。この土層から9世紀頃の土器出土。白土採掘坑（SK545）の写真撮影。北Ⅱ区の大土坑（SK504）を掘り下げる。

12.17 南区の柱取り上げ準備。北Ⅰ区では東9間目礎石と瓦堆積の写真撮影。この南の地覆位置のみ瓦がない。瓦堆積後に地覆が抜かれたことを示すか。

12.18 北Ⅰ区の北面回廊全景の写真撮影。

12.20 南区の柱取り上げ成功。腰長押は2間ものとは判明し、今回は取り上げないことにする。

柱と腰長押の結合部は、腰長押の方を円形に練り込み外側から円頭釘で止めると判明。

12.21 南区で残す部材の補測と写真撮影。北Ⅰ区では基壇版築状況及び礎石掘付穴検出のため6~7間目礎石間を東西に断割る。基壇の版築土下は岩盤。礎石掘付け穴はいずれも基壇築製途中に掘る。

12.22 南区の埋め戻し開始。残す部材には保存処理を行う。

12.24 南区の埋め戻し終了。調査成果について記者発表。

12.27 作業員御用納め。

1.7 北Ⅰ区のLL17~18区とLN17~18区で土塁下層の柱穴（SA500）捜し。地山面を薄く覆う盛土上面で南北方向に長い抜取り穴検出。埋土に土器片含み、瓦多量出土。柱穴掘形は地山上面で検出。埋土に少量の瓦片含む。

1.9 北Ⅰ区では土塁下の南北塀柱穴（SA500）の写真撮影と実測。16区の南北素掘溝（SA530）を掘る。石積み溝（SD531）の西側石は素掘溝の堆積土を切って据えている。

1.10 北Ⅰ区では東面回廊の礎石と礎石の間にある掘立柱穴の検出。東側柱筋の6間目掘形は地覆石下にある。地覆石直下は溝状の落込み（地覆石の裏込めと推定）で、この土を除去し掘立柱掘形を検出。基壇東の南北溝（SD552）精査。溝は、淡青灰色粘質土（本報告では明青灰色粘質土と判断）上面から掘込まれ、暗褐色有機土で覆われる。

1.12 北Ⅰ区の素掘溝（SD530）掘る。石積み溝（SD531）掘る。馬毛らしきものを束ねたもの出土。LM16区ワラジ出土。回廊東の南北溝（SD552）下で土坑（SK550）検出。北東隅で土坑（SD526）の掘下げ。東から流れる旧流路のようで、山田寺整地時に埋められたと推定。重弧文軒平瓦2点出土。

1.13 素掘溝（SD530）と石積み溝（SD531）の実測。東西塀（SA505）西端掘形の西30cmで南北塀（SA500）の柱掘形を検出。従って、南北塀と東西塀は連続しないようだ。

1.14 南北塀（SA500）南端柱穴を確認するため、LJ18区で南へ約1m拡張。土塁瓦敷下で掘形を半分ほど検出。掘形内の東西に新しい小穴あり。東面回廊埋め戻し開始。

1.18 土塁下の柱穴（SA500）は北端と南端を断割り調査。ともに掘形の底から20~30cm浮いた位置に礎板の平石を置く。柱穴が2時期とも考えたが埋土の違いと判断。埋戻し。

1.27 北Ⅰ・Ⅱ区埋戻し終了。

E 第5次調査

5 BYD-L・M地区

1983年5月9日～10月31日

5.9 第4次調査区の南方に調査区設定。草刈。

5.10 里道水路等のコンクリート除去。

5.11～14 上土除去。

5.17 上土除去終了。地区杭の設定。

5.18 MP区以北、LB区以南の間は、西端から床土下の灰褐色及び灰色砂混じり粘土除去を開始。11世紀頃の瓦器出土。MP25区で早くも巻斗出土。その東で柱らしきものあり。

5.19 灰色砂混じり粘土除去。MQ22区で土馬出土。

5.21 MP区以北の灰色砂混じり粘土除去は東端に達す。MO22区で埴伝出土。

5.23 MP区以南の灰色砂混じり粘土除去開始。22～23区で丸瓦や部材を使用した暗渠（SX561）らしきもの検出。23区以西で瓦堆積が顔を出す。MO23区で平瓦がずり落ちたように数枚折り重なる。MO24区で柱検出。

5.24 22～24区で灰色砂混じり粘土等を除去し、瓦堆積及び部材検出。柱は東面回廊の東側柱北から18間目と西側柱16・17・19間を確認。18間目以南はかなり乱れた堆積状況である。

5.25 MO区以北、24以西では主に部材検出。MQ24とMN24で西側礎石確認。回廊基壇西側側石と西雨落溝（SD061）確認。23ライン上で東面回廊基壇東側側石を検出。

5.26 東面回廊基壇東側側石出す。MT23区で東側の礎石と地覆材の一部検出。暗渠（SX561）を写真撮影。25区以西では暗青灰色砂混り粘土と下の暗茶褐色粘質土を除去し、部材検出。MO25区で大斗を確認。肘木らしきものや巻斗が各所で出土。MS26区を中心にして屋根材らしきものもある。

5.31 LA25区付近の部材、瓦堆積検出。暗渠（SX561）実測。1次調査区埋戻し土を下げる。

6.1 暗渠（SX561）の瓦・部材を取り上げたのち、暗青灰色砂混じり粘土を除去し、この下で東面回廊基壇東側側石を検出。MJ22区で東面回廊東南隅を確認。回廊基壇上の瓦堆積を清掃。

6.2 東面回廊より東の暗青灰色砂混り粘土とこの下の暗灰（暗茶褐）色粘質土掘り下げ。回廊西側では瓦座をもつ茅負、頭貫など検出。MN区に設定した土層観察用畦除去。

6.4 MO区以北の東面回廊基壇上及び西側の瓦堆積の清掃、部材の細部調査。基壇外西側、MS区以北の瓦堆積はかなり抜かれている模様。下

にバラス敷見える。

6.8～6.14 部材等清掃後に写真撮影。はじめて垂木確認。北から18間目の柱は全長235cm。6月13日にテレビ報道があり、見学者増加。

6.15 部材等の出土状況を写真測量。午後は地上写真撮影。

6.21～6.27 部材や瓦堆積の実測開始。記録と併行して瓦や部材の一部を取上げ始める。MS23区で丸・平瓦を並んだ状態で検出。回廊の棟はほぼ西側柱礎石位置に崩れ落ちている模様。

6.28 瓦及び部材取り上げ。25区以西では、瓦堆積とバラス敷面との間に薄い暗灰褐色粘質土層あり。

6.29 部材取り上げ。東面回廊以西でバラス敷面を出し始める。LA26区のバラス面上で黒色土器出土。西雨落溝（SD061）検出。

7.2 部材取り上げ。バラス敷面上の暗灰褐色粘質土を除去し、バラス敷を出す。MO25区のバラス敷面で緑釉土器片出土。瓦堆積、基壇面清掃。

7.6 瓦堆積2回目の写真撮影。

7.7 瓦堆積実測。

7.11 落下瓦取り上げ。回廊基壇上の部材検出。北から19間目の連子窓の上に垂木材が乗る。18～16間の連子窓は壁に改造されているか。MR23区で銅釘出土。土器片数点出土。

7.12 連子窓の写真撮影。MP24区の柱と虹梁の間で土師器皿出土。

7.13 記者発表。

7.14 部材等の細部写真撮影。

7.16 見学会。約1,200人。

7.19～21 東面回廊上の部材の倒壊状況を地上写真撮影。のち空撮用ターゲット打ち。

7.22 空撮。

7.26 部材の細部写真撮影。LA25～26区のバラス敷面を下げる。下で瓦敷面検出。縄タタキ平瓦多い。2回目の空撮。

7.27 東面回廊基壇より東の暗灰色粘質土掘り下げ。この下は暗褐（茶褐）色有機土で瓦多い。22区の暗褐色有機土上面で南北溝（SD565）検出。基壇上の部材取り上げ。

7.29 東面回廊東側の南北溝（SD565）を掘る。基壇西ではバラス敷除去し、下の瓦敷を出す。

8.2 東面回廊基壇東の暗褐色有機土を下げる。垂木先瓦多い。土器、獣骨、垂木片も出土。下の淡青灰（淡青灰褐）色粘質土も下げる。山田

寺式軒丸瓦A種出土。

8.4 東面回廊基壇東の暗褐色有機土を掘り下げ、南北溝 (SD552) 検出。埋土は暗茶褐色有機土で、MQ22区の肩付近から寛平大宝(初鑄890年)出土。MQ26区の暗灰褐色粘質土(バラス面直上)より富壽神宝(初鑄818年)出土。

8.5 19間目の連子窓写真撮影。基壇面直上の砂混り暗青灰色粘質土を除去し床面を出し始める。

8.9 MO23区の垂木、壁木舞写真撮影。MQ23区基壇直上より延喜通宝(初鑄907年)出土。

8.10~8.13 部材取り上げ。部材細部写真撮影。

8.18~8.20 東面回廊基壇面を精査。地覆材の下には瓦(縄タキ含む)、小石を詰めており、LA23区で9世紀前半~中頃の土師器杯出土(SX560)。地覆石を平安時代初め頃に取り除き、その後に瓦、石等を詰め込んだと判断。西側の礎石間で掘立柱採取穴(SX064)検出。

8.22 調査区全体の清掃開始。

8.24 空撮ののち、地上写真撮影。

8.25 西雨落溝(SD061)を掘り下げ。雨落溝の上層は茶褐色有機土、下層は緑灰色砂質土。

8.26 地上写真撮影終了後、実測のための遣り方を組み始める。

8.30~9.6 実測。

9.7 地覆石抜き取り痕(SX560)の掘り下げ。埋土から瓦、土器片出土。

9.9 地覆石抜き取り痕の掘り下げと写真撮影。地覆材取り上げ開始。回廊西の瓦敷は種別調査ののち、瓦取り上げ。

9.13 地覆写真撮影と取り上げ。礎石の近接写真測量。調査区四周の土層図作成にかかる。

9.19 地覆抜き取り痕(SX560)にある瓦、礫の実測。MQ24区の礎石型取りする。

9.21 MP~MQ区、25~26区の範囲について、瓦敷下の灰褐色粘質土を下げ、遺構検出。瓦を含む土坑(SK564)や古墳時代の古式須恵器を含む斜行溝(SD566)掘り下げ。このベースも5世紀頃の流路(SD568)のようだ。

9.22 調査区四周の土層断面図ほぼ終了。東壁での観察によると、MM~MT区の間は花崗岩風化土がなく、古墳時代初め頃の遺物を含む自然流路(SD568)になるようだ。

9.26~9.30 長雨で作業進まず。台風1号の後始末。

10.3~10.4 東面回廊東側柱筋の地覆石抜き取り痕を精査し、礎石間の掘立柱穴列(SX062)検出。柱穴列の全景写真撮影。

10.5 東面回廊の北から18間目の南礎石位置(MQ・MR区間)で基壇断割り。厚さ約0.5mの基壇版築下は自然流路(SD568)面。この面で

約1.6mの間隔をもつ2条の南北小溝(SX563)を検出。礎石などを運んだ際のコロの道板痕跡か。礎石間柱穴(SX062)の断割り。LA24区の西側柱筋から縄タキ平瓦出土。早くとも7世紀後半か。

10.6 東面回廊の北から16間目の南礎石(MT区)位置で基壇断割り。北側断面で見ると、東側石の古い裏込めの上にある土には瓦が混り、しかも地覆石抜き取り痕跡(SX560)を覆うと判断(本報告では地覆石抜き取り補修時の基壇積直しと判断)。礎石間柱穴(SX062・064)断割り。

10.7 東面回廊の基壇断割り図面作成と写真撮影。礎石実測開始。基壇以西の砂入れと埋め戻し開始。

10.13 礎石を実測し、拓本もとる。

10.15 礎石実測終了。

10.17~31 埋め戻し。

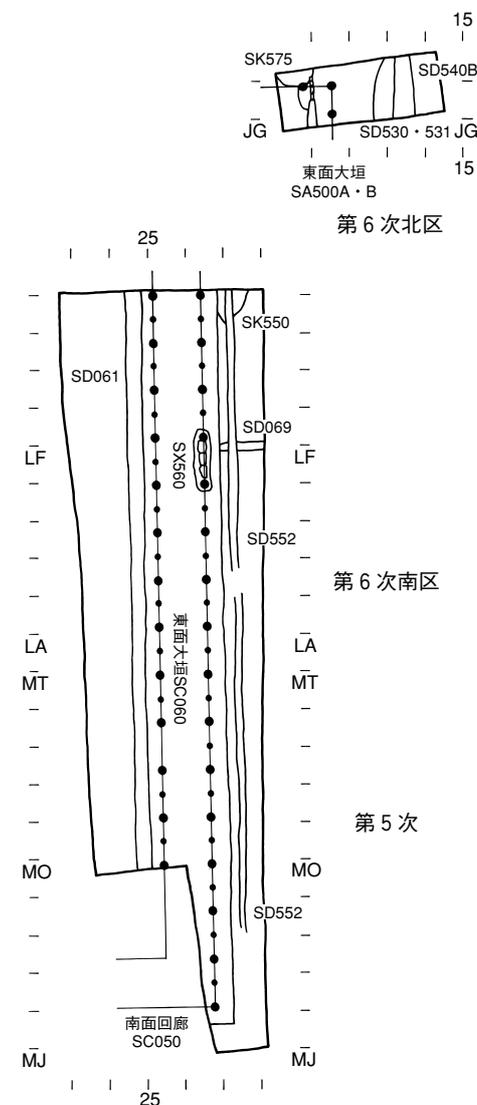


Fig.12 第5・6次調査区 1:600

F 第6次調査

5BYD-J・M地区

1984年8月6日～12月6日

8.6～8.11 第4次調査区と第5次調査区間の東面回廊上に調査区（以下、南区）を設定し、重機によって上土排土。

8.14 南区の上土除去終了。バルコンを東西に並べ、北から床土下の灰褐色砂混り粘土の除去を開始。

8.17 南区の灰褐色砂混り粘土除去はLF区まで進む。杭打ち。

8.21 第5次調査区の埋土除去。

8.22 第5次調査区では、砂を敷いた面まで掘り下げ、礎石、側石を出す。

8.23 南から折り返し、灰色砂混り粘土を掘り下げ、LD区まで進む。23～25区は灰色砂やや厚く堆積。土器は中世。LFラインに土層観察用畦を設定。

8.25 灰色砂混り粘土の除去はLH区まで進む。下の暗青灰色砂混り粘土には瓦堆積が顔を出す。

8.27 北から折り返し、暗青灰（青灰）色砂混り粘土を除去し瓦堆積を検出。第4次調査区の礎石を出す。LJ25区礎石西で部材片出土。

8.29 瓦堆積の検出はLF区に達す。瓦堆積は南や西では薄くなり部材片の出土も目立つ。西側では暗青灰色砂混り粘土下部に暗茶褐色粘質土が残存。LF29区で茅負片出土。

8.30 LF区の畦観察によると、粘土や砂層が互層になり、瓦堆積・部材を包含する茶褐色粘土層まで厚く堆積し、何回も土砂や水流があったことがわかる。LE区で方立らしき部材出土。別の部材が取り付く。連子窓の一部か。

9.3 連子窓2間分を検出する。第5次調査区を清掃して東側石を露出させ、北へ戻る。頭貫を検出。

9.4～9.8 調査区全体に瓦堆積や部材を出し清掃。

9.9 皇太子、調査を見学。

9.10～9.12 調査区全体に瓦堆積や部材を出し清掃。

9.13 瓦堆積や部材の出土状況を地上写真撮影。空撮用のターゲットを設定。

9.19 空撮。のち地上写真撮影。

9.22 23区で東面回廊の基壇側石を出す。

9.25 東面回廊東の暗褐（茶褐）色有機土掘り下げ。LI24区では第4次調査区から続く土坑（SK550）を検出。

9.26 調査区北端から瓦堆積の瓦取り上げ開始。

回廊基壇西側石の西側ではバラス敷検出。バラス敷直上で垂木先瓦が比較的多く出土した。LI26区で北から10間目の西柱検出したが残り良くない。屋根板材等も多いが残り良くない。

9.28 瓦取り上げ。23区では北より12間目で東扉口の地覆石（SX065）を検出。扉の軸摺穴が北と南にある。地覆材も残る。付近から白壁・木舞が多く出土。

10.1 本日で瓦取り上げほぼ終了。LB・LC25区の西雨落溝（SD061）上では棟用の瓦多量に出土。棟の落下を示す。

10.2 東西回廊の西ではLE区までバラス敷検出。基壇上はLG区まで精査し、基壇面検出。西雨落溝（SD061）より金銅製飾金具出土。

10.3 バラス敷検出。連子窓の木舞を中心に精査。北から12間目の部材に釘が打たれていると判明。

10.4 東面回廊西のバラス敷面検出ほぼ終了。LD25区で垂木先瓦に延喜通宝（初鑄907年）が貼り付いた状態で出土。基壇上では連子窓や腰壁を出し終わり、頭貫周辺の木舞も検出。北から12間目では東扉石の地覆材上に方立（幅28cm、厚さ6cm）跡と思われる凹みを検出。

10.8 東面回廊上の部材清掃。北から13間目、14間目の壁の写真撮影。北から14間目の地覆材の下で花崗岩の台石を検出。不等沈下に対処するためと想定。

10.11 出土部材を清掃し、写真測量。連子窓の地上写真撮影。

10.12 南区全体を地上写真撮影。

10.13 現地見学会。参加者約1,000名。

10.15 南区は実測用の遣り方設定。第4次調査区北方に設定した調査区（以下、北区）に入る。

10.16 南区の実測開始。北区では床土下の茶褐色ないし灰褐色土を除去し、瓦面を出す。瓦面上部では瓦器出土。

10.19 北区では瓦面（暗褐色土）を清掃し、写真撮影。のち瓦面を掘り下げ、LH16区で大きな石列を検出。石積み溝になる様子。

10.22 北区では石積み溝（本報告では、第4次調査のSD531と時期などが異なることからSD540と改めた）検出。石積み溝（SD531=SD540）外側で素掘溝（SD530）を検出。北端で東西溝（SD578）を検出。JH16区で径40cm程の柱

根 (SX571) 検出。石組の南北溝 (SD531 = SD540) より古い。この西では瓦面を取り外し暗褐色土を掘り下げる。多量の瓦と平安～中世の土器出土。暗褐色土下で、石と磚を用いた暗渠2条 (SX573・574)、柱穴らしきもの (SA500) 検出。

10.23 南区の実測終了し、部材取り上げ開始。

10.25 南区の部材取り上げ。中曽根首相、調査を見学。

10.26～11.2 南区では部材取り上げと併行し、東面回廊基壇西のバラス敷を北から除去し、瓦敷を出す。

11.5 南区の部材取り上げ終了。東面回廊西の瓦敷の清掃。

11.6 南区では東面回廊基壇上面の精査。西側の礎石と礎石の間及び棟通りに小柱穴列 (SX 064・065) を確認。東の地覆材周辺の暗茶褐色粘質土の掘り下げ。平安時代 (10世紀) の土器出土。東面回廊基壇の東を掘り下げ南北溝 (SD552) を検出し、写真撮影。北区では西側より花崗岩風化土の地山を出しつつ東に向かって精査。

11.7 南区では東面回廊基壇上を清掃し、写真撮影。西の瓦敷は実測開始。北区ではJH19区で大土坑 (SK575) 掘り下げ。瓦多量出土。瓦器や白磁を含む。

11.8 南区では東面回廊の東側地覆採取痕 (SX560) と東礎石の据付け痕跡を検出し掘り下げ。

11.9 北区では南北石積み溝 (SD531 = SD540) 掘り下げ。北へ排水する水路。埋土は暗青灰色粘土で、最上部では側石が倒れ込み一部に瓦器含むが、以下は古いもののみ。すぐ東側の柱根が残る柱穴 (SX571) は山田寺の北面大垣 (SA570) の東延長上の位置にあたる。

11.12 南区では東面回廊基壇面と西の瓦敷の清掃と精査。瓦敷がないLF～LH25区で柱穴 (SX

067) 検出。土はかなり見分け難かった。基壇上や基壇東でも対応する位置で柱穴各2個検出 (SX066・068)。北区は清掃をかねて精査。

11.13 南区では東回廊の地上写真撮影。北区でも地上写真撮影。のち石積み溝 (SD531 = SD540) を底まで掘り下げる。堆積層は灰色粘土で瓦多量出土。

11.14 第3回目の空撮。のち実測に入る。北区は実測のため遣り方を組む。

11.15～11.17 南区と北区の実測。

11.19 南北両区とも実測終了。南区では東面回廊基壇などの断割り調査に入る。北から10間目や14間目では、東側石の裏込め上半に瓦が混り、補修があったと推測 (本報告では基壇積直しと判断)。

11.21 南区では調査区四周の土層図作成に入る。

11.22 南区東壁南端では黄色粘土の地山から灰色粘土、灰色粗砂に変化。灰色粗砂上部から古式須恵器出土。南東→北西方向への古墳時代の自然流路 (SD569) と推定。

11.24 南区東壁沿い断割り部の埋め戻し。基壇西のLE・LD区25・26区の瓦敷を除去し、精査するが柱穴は検出できず。

11.26 北区では南北石積み溝 (SD531 = SD540) の西で南北素掘溝 (SD530) を掘り下げる。素掘溝を切って石積み溝が作られる状況は第4次と同じ。この西では暗褐色土を掘り下げて大きな柱掘形 (SA500) 検出。

11.27 南区では東面回廊部分埋め戻しに入る。

11.29 北区では四周の土層図作成。

11.30 北区では柱穴 (SA500・SX571など) の断割り。

12.1 北区の埋め戻し開始。

12.5 北区の埋め戻し終了。

12.6 東面回廊の北から12間目扉口の北軸摺穴鉄芯を外す。調査終了。

G 第7次調査

5 BYD-N地区

1989年10月9日～1990年2月22日

10.9 調査区設定。南端の突出する地区を南区、以北を北区と呼ぶ。

10.12 重機による上土除去開始。NQ区で早くも大柱穴検出。南面大垣の柱穴と推定。

10.16 重機による上土除去。基準点測量。

10.17 地区杭を打つ。発掘区西端から人力による二番床土の除去を開始。36・37区間に南北畦、

NMとNQライン付近に東西畦を残す。

10.18 二番床土の除去作業続行。NP36区で原位置を保つ礎石や基壇縁らしき玉石列 (南門SB001) を確認。

10.19 南区の南東隅では、岩盤の風化土層が出る。南門 (SB001) の礎石はNP～NR36区で南北に3個 (柱間2.7m) を確認する。

10.20 重機による上土除去は終了。二番床土除去作業は続行。南区では床土下の青灰色粘質土除去。NE36区から埴仏出土。

10.24 北区東南部の二番床土を除去。この下には、青灰色粘質土や青灰色微砂、暗青灰色砂土が互層に堆積している。

10.25 北区東北部の掘り下げ。NQ35区で南門(SB001)の礎石を発見。NO区では青灰色粘質土下に多量の瓦や礫が散布し、NO37～39区では向かい合う2列の石列(のちSD625Bと判明)が顔を出す。

10.26 南門(SB001)基壇上のNR35区で北東隅柱の礎石を検出。基壇北縁の切石は3個を確認。ただし、続きは不明。NN35・NO34区で鴟尾片が出土。南門南側の石で護岸された溝(SD625B)は、北側の石列と南側の石列の高さが異なり、確定できない。

10.27 36・37区間の南北畦以東、33～36区の青灰色微砂除去。下半部は細砂のある所もあり、長期にわたり絶えず水が流れていた様子。NO35区とNO34区で鴟尾片出土。この下は山土混り青灰色砂(整地土)が一面に広がる。

10.30 南北畦以東のNH～NJ区は青灰色微砂を除去。下から山土混青灰色砂に切り込まれた数条の溝検出。最も新しいのが南北溝(SD611)、次に青灰色砂の東西溝(SD609)、一番古いのが北東へ向かう斜行溝(SD607)。

10.31 南北畦以西はNDライン以南の青灰色粘質土除去。この下は青灰色微砂下半に相当するが、39区以西は黄褐色砂質土。NJ37とNK37区で焼土検出。南門より北では灰褐色土、黄灰褐色土を除去し、遺構検出。溝を多数認める。37区以東はや北東隅では瓦多量出土。

11.2 南北畦西半はNH～NL区の青灰色粘質土掘り下げ。南門(SB001)付近は西側の礎石抜き取りと据え付け及び東西塀の柱穴の検出にかかる。塀の柱穴は柱間2.6～7mで、掘形は約1.5mと推定。

11.4 NH～NR37区の青灰色微砂を除去し、東西溝4条検出。南区では、青灰色粘質土下の暗青灰色砂土及び青灰色粗砂除去し、地山を追う。地山は南東隅を最高点とし北西方向に下る。青灰色粗砂下で溝数条検出。瓦、土器多量出土。

11.7 北区では上層遺構について写真撮影のため清掃に入る。南区は写真撮影。

11.8 北区の清掃と写真撮影。

11.9 北区の北から遺構検出再開。南門(SB001)基壇西側は削ると整地土で山土混黄褐色土に茶褐色等の土が混じる。東西塀の柱穴(SA600・631)と、その北と南に雨落溝(SD637・639)を検出。塀は掘形らしきものが2つ切り合

うが、一つは抜き取りか。柱穴は黄色い土(基壇土?)に掘り込まれ、上に山土混灰褐色土がのる。南門東側は瓦堆積の検出。

11.10 南門南辺のNO区で東西大溝(SD625B)検出。NO区南側は地山面が露出している。東辺の35区で南北大溝(SD611)検出。

11.13 東西大溝(SD625B)最上層を掘り下げ。NN40、NN41区で鴟尾出土。38区で南北大溝(SD612)らしきものあり。

11.14 褐青灰色土を除去し、東西石積み溝(SD625B)検出。11世紀頃の瓦器出土。NN38区で石積み溝内を断割り、4層が堆積することを確認。上のⅠ・Ⅱ層から10世紀代の土器片出土。

11.15 東西石積み溝(SD625A)掘り下げ。東辺では東西大溝(SD625B)より新しい斜行溝(SD629)検出。鴟尾出土。東西塀の北雨落溝(SD639)掘り下げ。

11.16 東西石積み溝の北で護岸と思われる小礫群検出。また、石積み溝の外側でこれより古い素掘りの東西大溝(SD625B)検出。35区の南北大溝(SD611)検出。石組東西大溝(SD625B)より古い。埋土は上層が暗青灰色砂質土、下層が青灰色粘質土。NP38区の瓦堆積除去。

11.17 2条の南北大溝(SD611・612)を確定。これより古い東西溝(SD609)を検出。西側の南北大溝(SD612)は上層の明青灰色粘質土上に炭化物層があり、下は青灰白色砂土が堆積。ルツボ等の土器片が炭化物層から出土。鉄滓も出土。東西溝(SD609)の埋土は青灰色砂。北区北東では東西大溝の流れ込み(SD629)掘り下げ。暗褐色微砂を除去し、暗灰色粘質土を検出。

11.20 北区では東西大溝への流れ込み(SD629)と南北大溝(SD611・612)掘り下げ。南区では青灰色微砂や瓦を多く含む赤褐色粘質土等を除去。東南隅は花崗岩風化土の地山で北と西に下がる。NEラインで、粗砂を埋土とする東西溝(SD610)検出。NI区の東西溝(SD609)の埋土と類似。NQ及びNMラインは付近の東西畦の断面図作成。

11.21 北区ではNQライン以北を精査。礎石を全部露出。棟通りの礎石のうち、東側は1つ、西側は東西に2つの軸摺穴発見。南門は三間総開きの門と想定できる。南区では青灰色微砂や瓦を多く含む赤褐色粘質土を除去し、東西溝(SD601)の西半を検出。NF36・37区で大土坑(SK603)と、これより新しい方形の土坑(SX604)検出。伽藍中軸線上に位置する。

11.22 北区では南北大溝(SD611・612)、東西溝(SD609)を掘り下げ、清掃。南区では東西溝(SD601)掘り下げ、各遺構の写真撮影。

11.24 北区では東北部の瓦堆積と東西大溝上層流れ込み (SD629) の遺物取り上げ。南門 (SB001) の礎石周辺では掘形らしいライン確認。南門西の大垣 (SA600・631) 柱穴抜取り穴掘り下げ。版築状に瓦を埋めている模様。抜取り穴の壁は垂直に掘られている。

11.28 北区では東西大溝への流れ込み (SD629) を掘り下げ、NQ33区で塀 (SA630・630) 柱抜取り穴や掘形を検出。柱根出土。NP35区で南門 (SB001) の基壇縁、NQ34区で塀基壇のラインを検出。石組東西大溝 (SD625B) は第4層まで掘り下げ。この下の暗灰色粘質土の堆積は当初の素掘溝 (SD625A) のものと推定。石積み溝底のNO37区で柱根4本 (SX623) 検出。中軸線上にはぼまたがり、参道から南門に渡る橋の橋脚と推定。石積み溝から「山田寺」と墨書した奈良時代後半の土器出土。

11.29 南門 (SB001) の礎石抜取り及び据付掘形を確定。NQ37区の抜取りらしい穴を掘り下げると礎石出土。NRライン上の2個の穴で根固石を検出。東側の塀の柱根と掘形は灰黄褐色粘質土下で検出。

11.30 全体の清掃に入る。11時から記者発表。西側南北溝 (SD612) と東西溝 (SD601) の先後関係を精査。NG36区の東西溝 (SD601) 須恵器杯出土。斜行溝は現遺構面下にもぐる様子。西側の南北大溝 (SD612) の明青灰色粘土底で斜行溝 (SD607) 検出。7世紀前半頃の土より和同開珎出土。

12.1 NQ37・38区の南門 (SB001) 礎石据付の他に別の掘形確認。大垣延長線上にあたることから、南門創建以前に大垣がNQ37区的位置まで延びていた可能性もある。

12.2 現地説明会。参加者約300名以上。

12.4 NQライン付近の東西畦を除去。NQ34区で西側の塀の柱抜取り穴検出。清掃。

12.5 36・37区の南北畦除去。石組東西大溝 (SD625B) 内で新たに橋脚の東柱2本 (SX623) 検出。石積み溝に架かる橋は6本の橋脚を有し、南門中央間幅に相当すると確認。南門 (SB001) 基壇側石列検出。東側大垣基壇に取り付く部分では側石が列に直行する状態で検出。NQ34区の大垣柱抜取り穴上で残してある石の下の土層を観察したところ、版築状に築き固めた様子。築地痕跡の可能性もある。

12.6 全体の清掃。空撮用の杭打ち。

12.7 空撮。のち地上写真撮影。

12.8 地上写真撮影後、実測用の遣り方を組む。

12.12~12.16 実測。

12.18 整地の状況確認のため、2条の南北大溝 (SD611・612) の間の参道 (SF610) 中央部で

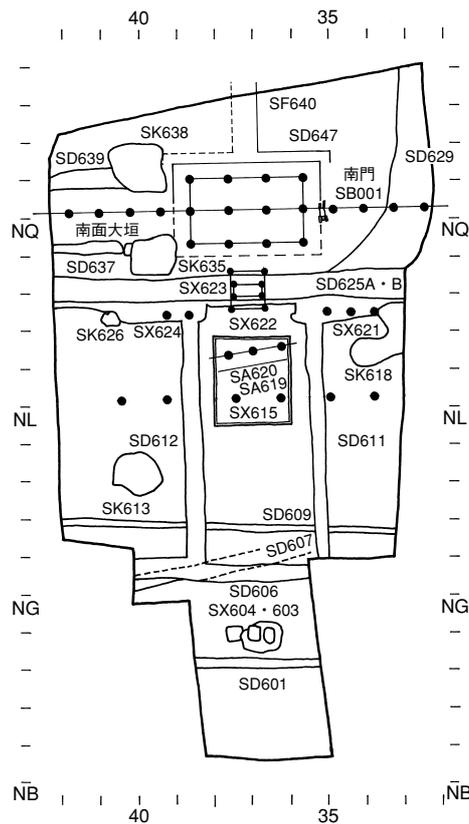


Fig.13 第7次調査区 1:600

南北6m、東西3mのトレンチを設定。整地土は灰褐色、黄褐色の山土で数層ごとに遺物を多く含んだ茶褐色有機土を使用。最下層の茶褐色有機土から木簡の削りくず出土。土器は飛鳥Ⅰが多く、山田寺直前の堆積だ！南区の土坑 (SX604) は壁が垂直に掘り込まれ深さ1m以上ある。柱穴か。崩落のため断面図とれず。

12.21 南門 (SB001) 西妻柱の礎石抜取り穴断割り。検出面から深さ約1.8mで礎盤の平石と東へ抜いた抜取り跡を確認。断面観察によると、掘立柱塀 (SA600) の掘形を掘り柱を立て版築状に埋め戻し、のち柱を東側に抜取り埋め戻す。礎石は埋め戻した跡を少し掘り凹め根石を使わず据えるという過程になる。掘立柱門かは不明。

12.22 掘立柱の門か否か確認のため、南門西北隅の礎石抜取り跡を断割り。礎石据付け跡は殆どなく整地土や堆積層となる。したがって、掘立柱の門はなく、一本柱塀である可能性強い。

12.26 前身の塀 (SA600) の柱間を確認するため、南門の棟通り西から2番目の礎石据付け跡を断割り。礎石据付穴下に掘立柱掘形あり。柱は西側に抜かれている。西の柱穴は東に抜いているので、二つの塀の柱は同時に抜かれたものと推定。柱間寸法は約2.36m。

12.27 清掃。のち、御用納め。

1.8~1.16 現場再開。参道部を東西6m、南北7m(NK~NM区、37・38区)に拡大して整地状況確認のため断割り調査。北端部は深さ約60cmで古墳時代(5世紀頃)の堆積層に至る。この面で柱穴3個(SX620)検出。方位は東で北に振れる。この少し南では飛鳥Ⅰの土器を含む流路(SD619)があり、掘下げる。

1.17~1.22 古い東西大溝(SD625A)の西半部掘下げ。南北大溝(SD611・612)掘下げ。大垣の柱穴等断割り。

1.24 石組東西溝(SD625B)の南側を精査。石組の据付裏込土(褐色粘質土)を下げる。裏込土から10世紀頃の土師器出土。一部積み直しがあるのか。

1.25 石積み溝(SD625B)東半部を掘り、素掘り溝(SD625A)の肩を出す。北肩には古墳時代(5世紀頃)の堆積層(暗灰色粘質土)がある。北区の西では東西大溝(SD625A)に切られた炭化物を含む土坑(SK626)を掘る。フイゴ羽口、鉄・銅滓、銅粒(湯玉)、炭出土。飛鳥Ⅳの土器が出土。素掘り溝(SD625A)は山田寺創建当初まで遡らない可能性が高い。

1.29 素掘り東西大溝(SD625A)の東半南側を掘下げ、南肩近くで東西2間の柱穴(SA621)を検出。埋土に整地土が入ることから整地後で、素掘り東西大溝掘前となり、素掘り東西大溝が当初まで遡らない可能性あり。東の柱穴は土坑(SK618)と重複し、土坑より古い。西でもこの柱穴列に対応する柱穴列(SA624)を検出。これらは整地土上面から掘り込む。

1.30 南門(SB001)棟通り東半の礎石据付け穴断割り。基壇土下の整地土上面で礎石据付け穴、前身塀の柱抜き跡と掘形を確認。2本を一度に抜いている。NQ34区の大垣塀の柱穴では、柱の途中で北と南からかませた柱半截材を確認。不等沈下やねじれを防ぐためか。素掘り東西大溝(SD625A)時の橋脚確認のため石敷を一部除去。NO36区の石敷下で橋脚(SX622)東

北隅柱を検出。南門(SB001)東北部で瓦堆積を除去し、基壇を出す。

2.1 記者発表。昨夜来の記録的な大雨で作業中止。

2.5 橋脚の精査。素掘り東西大溝(SD625A)に伴う北東隅の橋脚(SX622)と重複する形で粗割の柱根(SS633)が別に残る。橋脚が新しいようだ。橋脚(SX622)の西方にも柱根2本があり、南門建築時の足場穴(SS633)か。

2.6 参道西側溝(SD612)寄り素掘り東西大溝(SD625A)掘下げ。ここから和同銭2点出土。東西大溝(SD625A)下の暗褐色粘質土で古式の須恵器出土。土坑かもしれないが掘下げないで置く。

2.7 北区東壁の土層図作成に入る。NQ34区の大垣柱穴断割り。古い大垣(SA600)の柱を東に抜取り、次に抜取り穴の西端に前よりも浅く柱(SA630)を立てる。柱根下は瓦を敷き詰め根固めとする。また、柱の途中で柄穴を開け北と南から添木をし、不等沈下やねじれを防いだりよう。

2.9 大垣東半の柱穴断割り。柱根取り上げ。北区東壁の土層図は崩落のため途中で断念。

2.13 大垣東端、NQ32区の柱穴断割り。柱は抜かれているが、新しい穴(SA630)では根固めとして瓦を使用しており柱位置がわかる。付近には殆ど整地土なし。大垣の西半でもNP39区の柱穴を断割り。ここも根固めに用いられた瓦から、旧大垣の柱(SA600)を南北方向に抜き、その中央あたりに新大垣(SA631)の柱を立て、再度抜き取ったことを確認。東側とは旧大垣の抜き取った方向が異なる。

2.14 NP39区で南門の足場穴(SS633)南北に2個検出。北の穴が新しく粗割した柱根残る。北の穴は旧大垣の柱掘形(SA600)より新しい。調査は午前中にはほぼ終了し、埋め戻し開始。

2.15~2.22 埋め戻し。

H 第8次調査

5 BYD-L地区

1990年8月27日~12月19日

8.27 金堂西方に西区を設定し、表土除去開始。

8.28 西区の地区杭打ち。南端では黄褐色砂質土(整地土)上で柱穴らしき落込み(のち西門SB685)を検出。

8.29 西区では黄褐色砂質土面を断続的に検出。回廊東北隅に東区を設定し、草刈り。

8.31~9.11 西区では遺構面がほぼ顔を出す。

中央付近で西面大垣(SA680)の柱抜き穴を検出し、北へ精査。南に拡張。東区では床土除去。

9.12 西区では南拡張区で西面大垣(SA680)の柱穴を2箇所を確認。掘り下げる。西区全体

の清掃。

9.13 西区では地上写真撮影。

9.14 西区では平面実測をはじめ。

9.25~27 東区では床土下の灰褐色砂質土除去。24ライン以東では、灰褐色粗砂中に瓦多し。

9.28 東区の灰褐色粗砂除去。瓦多数出土。調査区の西北隅で回廊の礎石2個検出。LQ23区で部材出土。

10.1~10.5 暗灰褐色粗砂、次いで灰茶色粘質土を除去。発掘区東端の北排水溝内で、柱根出土(のち立木と判明)。東面大垣(SA500)か。また、23区で東面回廊基壇の側石を発見。23ライン以東では灰茶色粘質土下の灰色粘土を除去。

10.9~11 降雨などで発掘作業中断。

10.12 東区では灰色粘土の除去続行。18ライン付近で、土塁状の高まり(SX535)に伴う南北の瓦列を発見。

10.15 18ライン以西の黒灰色粘質土を掘り下げる。下面に瓦がびっしり詰まり、木片も混じる。19区のO~Q区で花崗岩の礎石4個検出。経蔵(SB660)になるのか。礎石は暗青灰色砂質土(青灰色粘質土)上面に座る。この基壇土から9世後半頃の土器が出土。

10.16 東区東辺では方3間の礎石建物(SB660)を確認する。側柱礎石から外方へは黒灰色粘質土が斜めに厚く堆積しているため、低い基壇が存在したのであろう。建物内部には、暗青灰色砂質土(青灰色粘質土)上面に壁土風の灰黄色土が散乱する。漆器片、蝶番が付いた檜板材なども出土。高床の経蔵か宝蔵の可能性高まる。

北雨落溝の北では、瓦が多く、瓦敷になるか。

10.17 東区の20ライン以西の黒灰色粘質土を掘り下げる。方3間の建物(SB660)の西雨落溝(SD664)から南雨落溝(SD661)にかけて、多数の木製品(茅負のほか、八角の台座、厨子の扉など仏具が中心)や六花形飾金具が散乱する。

10.19 回廊の基壇上を覆う灰褐色土を除去する。黒灰色粘質土はこの下に潜る。回廊東北隅付近の基壇側石は抜かれている模様。基壇外のLS22区で部材出土。

10.22 東面回廊基壇上の溝(SD667)を掘り下げる。この溝は東面回廊北端間の地覆石の1石を抜いて北へ流れる。この地覆石には扉軸摺穴があり、扉口(SX666)になると思われる。

10.23 東面回廊東側柱筋北から5間目に地覆材が残り、その下に榛原石の地覆石が完存。北では地覆石はない。東北入隅の礎石には西に接して榛原石(SX675)がある。内側も閉じるのか。

10.24 東区では遺構の精査と清掃。宝蔵(SB660)の礎石近くから経軸出土。

10.25 東区の地上写真撮影。空撮用の標定点打ち。

10.26 東・西区航空写真の撮影。西区では柱穴の断割りなどの補足調査を再開。

10.29 東区の地上写真撮影。

10.30~11.5 西区の柱穴(SA680・SB685)の断割り。柱穴の底近くで礎板を確認。新旧2つの柱掘形が重複している模様。柱根を残す柱穴は新掘形、旧掘形の底には柱の痕跡を残す。南端の2柱穴には柱根が残り、その東にセットで

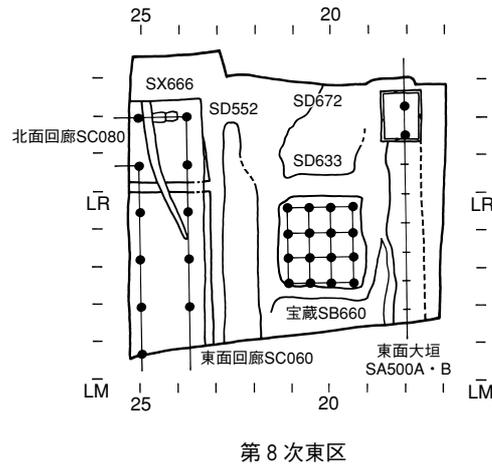
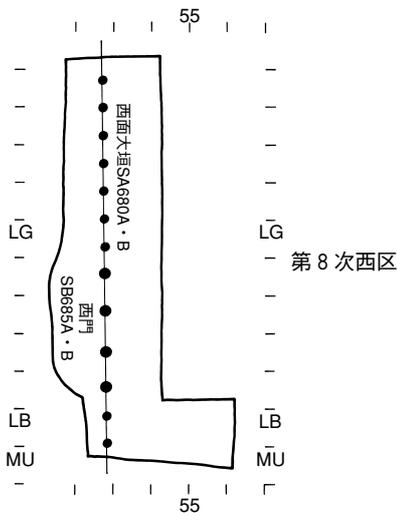


Fig.14 第8次調査 1:600

2小穴がある。あるいはこの部分が、西門になるのか？。ただし、小穴の掘形は見えない（のち足場穴と判断）。柱穴の断割り図面は崩壊のため完成せず。

11.6 西区で柱根の取り上げ。調査区北・南壁土層のチェック。整地土は厚く、とくに南壁では東から順々に土を運び入れた状況がよくわかる。少なくとも2面はある。

11.7 西区では西面大垣（SA680）の柱間を再検討。2.25m等間が基本で、中央南寄り3間分が3mか。この部分に門（SB685）を想定する。門の控柱想定位置を精査するも検出できず、「棟門」の可能性を考える。西区は埋め戻しに入る。東区では瓦や部材などを取り上げる。

11.8 10時から記者発表。東区では東面回廊基壇上の瓦などを取り上げ。回廊東北隅で2個の小礎石（SX673・674）を検出。回廊と宝蔵（SB660）との間で唐草文形金具、延喜通宝、漆塗木製品など出土。取り上げる。

11.9 宝蔵（SB660）北側の瓦層をはずす。宝蔵北雨落溝（SD663）から宝相華文の漆塗木製品、獣歯出土。回廊基壇上の斜行溝（SD667）の掘り下げ。現地説明会の準備。

11.10 現地説明会。参加者約400名。

11.13 宝蔵周囲の雨落溝及び基壇上の土を除去する。西雨落溝（SD664）で奈良時代後半から平安時代初頭にかけての經典の出納に関わる木簡が出土。

11.14 宝蔵南・西雨落溝（SD661・664）の掘り下げ。格狭間や経軸等の漆製品出土。東面回廊東側の黒灰色粘質土をとり、地山面を出す。また、回廊の北側を南北3mにわたり拡張する。

11.15 東面回廊基壇東の南北溝（SD552）を掘

る。宝蔵南側の黒灰色粘質土を除去。三彩片や銅金具出土。

11.17 東面回廊基壇上の瓦取り上げ。回廊東北部の黒灰色粘質土を除去。南北溝（SD552）のオーバーフローのようだ。土塁状高まり（SX535）周辺の堆積瓦を取り上げる。

11.19 宝蔵周辺で、雨落溝及び黒灰色粘土を掘り下げる。東雨落溝（SD662）から鍍金金具などが出土。

11.21 宝蔵の基壇南端近くで鑄銅製五尊像板出土。土塁状高まり（SX535）の北端部を掘り下げる。東裾で石列検出。柱根かともみていたのは立木であった。南にも2本ほど立木確認。

11.22 東区は清掃後、全景を地上写真撮影。

11.26 東区では地上写真撮影。航空測量の準備。

11.27 東区の航空写真撮影。

11.28 実測のため遣り方を組み、のち実測開始。

12.3 東区では実測と併行し、宝蔵（SB660）基壇および土塁状高まり（SX535）の断割り。

12.4 宝蔵は、地山を掘り込み白い粘土をマウント状に盛り上げた上に礎石を据え、暗青灰色砂質土を積んで基壇としている。宝蔵雨落溝の下層を掘る。

12.5 土塁状高まり（SX535）の下層で、東面大垣（SA500）の柱掘形を確認する。柱は2本を一緒に抜いている。

12.7 宝蔵東・北雨落溝（SD662・663）の隅部を掘り下げ。東区全体を清掃し、地上写真撮影。

12.10 東区の地上写真撮影。東面回廊暗渠部（SX670）の瓦取り上げ。

12.11～19 埋め戻し。

I 第9次調査

5BYD-A・F地区

1994年11月7日～12月7日

11.7～11.9 重機による上土及び砂・粘土層の除去。9日に地区杭を打つ。

11.11 ベルコンを南北に並べ、人力による黒灰色粘質土の掘り下げ開始

11.15 黒灰色粘質土層の掘り下げ続行。厚さは0.7～0.9mもあった。調査区中央の74区で、青灰色土の土塁状高まり（SX535）とそれに平行する南北方向の瓦列を検出。次第に瓦片の出土多くなる。

11.16 青灰色土上面の南北瓦列の追求。約1mの間隔において2列並ぶ。西側の瓦は2段。

11.17 土塁状高まりを残し、その両側を下げる。東側では青灰色粗砂層下に建築部材とおぼしき大型材が埋まり、AR・FA73区で延喜通宝（初鑄907年）1点と貞観永宝（初鑄870年）2点出土。西側にも青灰色粗砂の堆積（SD695）があり、この中に瓦片が多く含まれている。

11.18 土塁状高まりの東側掘り下げ。屋根の倒壊状況を示す建築部材と瓦堆積を出す。

11.21 土塁状高まり東側の屋根倒壊状況を精査。清掃後に写真撮影。AR23区で蓮弁を彫った竜山石片出土。西側では青灰色粗砂の堆積

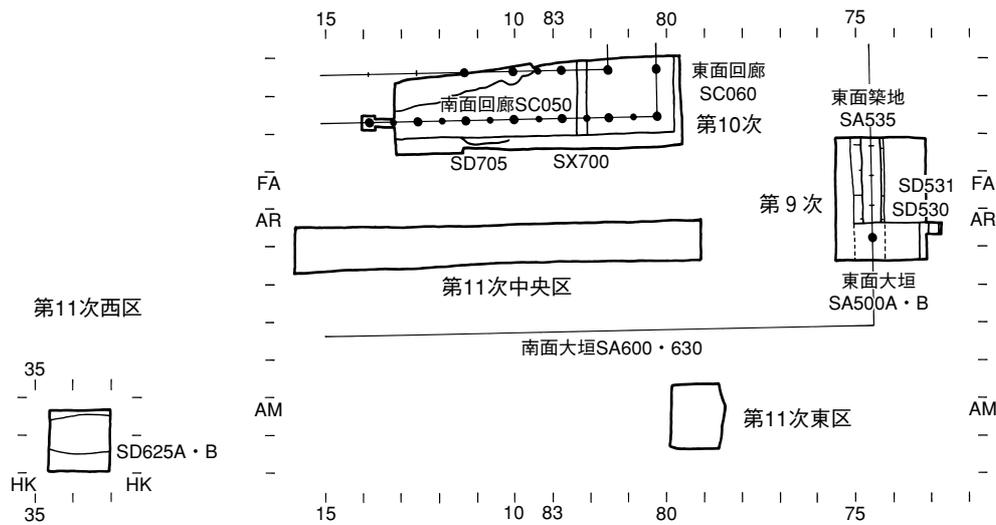


Fig.15 第9次～第11次調査区 1:600

(SD695)を完掘し、下の暗灰色砂土②を掘り下げる。地山面が出る。土塁状高まり(SX535)の南端を掘下げ、一本柱塀の掘立柱穴を探す。

11.22 土塁状の高まりの東裾、AR74区の北と南で小さな石あり。土塁状の高まりは築地で、その寄柱の礎石か。南端では下層の掘立柱塀(SA500)の柱穴を確認。土塁状高まりを形成する土層の上半からは多数の瓦片出土。

11.24 掘立柱塀(SA500)の柱穴の掘り下げと土層断面の観察。柱掘形と柱抜き取り穴とは別の土層面から掘り込まれており、基壇があったと推定。また、散乱する瓦や建築部材は土塁状の積土下にあり、掘立柱塀の倒壊に伴うものと理解できた。その時期は、延喜通宝や土器などからみて、10世紀前半と推定。AP・AQ73区の暗灰色砂土③掘り下げ。

11.25 全景写真を撮る。午後から実測準備。

11.28 遺構平面図作成。

11.29 航空写真撮影。

11.30 掘立柱塀などの土層実測。

12.1 地元説明会。参加者38名。建築部材と落下瓦の取り上げ開始。

12.5 土塁状高まり東側の鴟尾や石などの散布状況を写真撮影。掘立柱塀(SA500)の柱穴断割り。底から約70cmに礎板が置かれており、2時期と推定。第4次調査などで確認されている寺域の東限の石積み溝(SD531)を検出するべく、調査区東南端付近に拡張区をもうける。土層の実測終了。

12.6 掘立柱塀の柱穴を完掘する。東南拡張区では石組み溝はないものの、2条の素掘り溝(SD530・531)を検出し、掘り下げる。落下瓦を取り上げる。

12.7 遺構上面に砂を入れる。調査区の周囲に保護柵を設置。発掘機材の撤収。これにて調査終了。

J 第10次調査

5 BYD-F・N地区

1996年5月10日～8月7日

5.10 第5次調査区の西に発掘区を設定。機材搬入。

5.13 北側の旧水路護岸石の撤去。その中から加工痕跡のある石計6個を選び出す。礎石4個があり、その内の1個に蓮華座が明瞭に認められる。測量基準点の設置。バルコンを東西に設置し、南半分の上土を除去。

5.14 上土の除去完了。旧水路内(SD702)の

土を除去する。調査区の東端で、第5次調査区を確認。

5.15～5.17 西端NB12区の新しい斜行溝を掘り下げ、南面回廊(SC050)礎石の上面を確認。その西側に地覆材が残る。旧水路内の土を掘り下げる。第5次調査区の掘り下げは3分の2ほどすすむ。FB80区で回廊東南隅の礎石と基壇南縁の側石が顔を出す。基壇東面側石の上端は、南

面側石の上端より20cm程低い。このため基壇の上面は、東の側石に向かって下がるが、南へはほぼ水平に続く。また、基壇外側の上は細砂が水を含み、不安定この上ない。

5.20～22 北側の旧流路（SD702）掘り下げ。NC10・11区の旧流路底で南面回廊北側の礎石抜き取り穴検出。旧水路の南壁には、南面回廊の基壇土、部材、瓦堆積が見える。NA・NB10区の瓦堆積上面の掃除。頭貫や桁を支える部材らしきものがある。地覆材がFB82まで順調に出る。

5.23 FA～FC区、81・82区、瓦堆積を検出する。81ラインのすぐ西に旧里道の側溝らしきものがある。地覆材の一部を清掃後、写真撮影。

5.24 西から瓦堆積の掃除。FC81区で回廊東南入隅の礎石を確認。

5.27 瓦堆積の掃除続行。FC82区で6列ほどの瓦列を検出。平瓦は凸面が上、広端が北、丸瓦は凹面が上、玉縁が北である。北流れの屋根瓦が反転したと推測。東南入隅礎石の東側で、一辺約30cmの正方形の切石（SX715）を検出。礎石心と切石心は一致。

5.28 清掃の後、11時から航空写真撮影。午後は地上写真撮影。また、瓦堆積の細部をデジタルカメラによる地上撮影。

5.29 デジタルカメラによる補足撮影続行。瓦堆積の実測。基壇以南、FB83区以西は暗青灰色砂質土を掘り下げる。基壇上と異なり瓦は少ないが、軒平瓦が目立つ。

5.30 部材保護のため、日除けの「寒冷紗」を設置する。FA80区瓦堆積の細部調査。地覆材の抜き取り痕跡および回廊入隅礎石と切石の写真撮影。

6.3 基壇以南の瓦取り上げ。基壇上の瓦堆積の実測ほぼ終了。この瓦も一部取り上げ開始。NA12～NB12区で、地覆より南側の基壇面直上で新たな瓦堆積が面的に広がる。

6.4 FA80・81～FB80・81区で瓦堆積の取り上げ。NB10・11区で瓦堆積を検出。一部で部材も出る。10ライン上の長い材は柱かもしれない。野地板か連子窓、壁材かと思われる部材もあり。

6.5 FB80・81区、FC80・81区の瓦堆積の取り上げ。NB12区で地覆北側を掘り下げ基壇上面を出す。基壇上面に木舞や壁土残る。NB12区の「壁土」を清掃。瓦堆積や「壁土」を写真撮影する。

6.6 NB12区の「壁土」を取り上げる。鉄釘、銅製品各1点出土。FA80区を中心に回廊基壇外側の暗青灰（灰青）色粗砂、灰黒色粘砂土、暗灰色砂質土、暗緑灰色砂質土と順々に掘り下げ、旧地表面に達する。また、FA・FB83区、NA・NB10区の瓦堆積を取り上げる。

6.7 FC80・81区で基壇土直上の暗青灰色粗砂をはずす。平安時代（10世紀後半～11世紀初頭）の土器出土。入隅礎石周囲の土は、しまりがなく、据え付け掘形なのか疑問がある。側石南側FA82区の暗青灰色粗砂（荒砂）上部で茅負を発見する。NA12区で側石の南側約20cmの所に砂溝（SD732）を検出。基壇の側石が半分ほど埋没した時点で、軒先から落下する雨水で形成されたものか。NA12区の暗灰色砂質土上面に軒丸瓦1点、垂木先瓦2点出土。落下か。NA11・12区の側石は緑灰色粘土（地山）上に倒れている。

6.10 発掘区東・南壁の崩壊箇所修復。部材・瓦を実測する。

6.12 NA・NB12区の瓦堆積の掃除と写真撮影。終了後、瓦を取上げる。

6.13 11時から記者発表。午後はFA～FC80区の瓦堆積の取上げ。

6.14 現地説明会の準備。FB80区出土壁材の写真撮影。

6.15 1時30分から現地説明会。参加者約800人。

6.17 現地説明会の後片づけ。FC80区出土部材の清掃。巻斗が出土。FC80の区瓦堆積を取り上げ。FA・FB82区～NA・NB10区で暗青灰色粗砂（荒砂）、黒灰色粗砂を除去し、基壇上面を検出する。

6.19 FC80区出土部材の掃除と写真撮影。落下瓦の実測続行。基壇側石以南のFA82区～NB11区で暗青灰色粗砂（荒砂）掘り下げ。灰黒色粘砂土面を出す。

6.20 NB10・11区、NC10・11区の落下瓦を取上げる。軒瓦は皆無である。平瓦を半分に割った「割り鬘斗瓦」が多い。発掘区西半から東へ向って、基壇土上面を精査する。暗青灰色粗砂下にうすく暗青灰色粘質土があり、基壇土となる。基壇側石の南は、灰黒色粘砂土、暗灰色砂質土、暗緑灰色砂質土、地山の緑灰色粘土の順。

6.21～7.1 FB81～83区、FC81～83区まで落下瓦の実測と取り上げ。

7.2 FC82区の落下瓦取り上げ。正常落下の平瓦8列を確認。垂直写真撮影後の取り上げとす。この南端には鬘斗瓦が数枚あり、うち1枚は切り鬘斗。この部分が棟であろう。従って、棟に近い屋根が先に落下し、続いて軒先寄りの屋根が「く」の字に半転しながら落下したことが判明。FB83・FC83区落下瓦（下層）の実測を終了。瓦を取り上げ、基壇面を清掃する。

7.3 発掘区全体の掃除ののち、地上写真撮影。クレーンによる垂直写真撮影。

7.5 FC82区の落下瓦取り上げ。棟通りには、

割鬩斗瓦が東西方向にまとまって分布。FB82・83区、FB82・83区の部材取り上げ。

7.8 NC10、FB・FC80区の部材（巻斗、肘木など）と落下瓦の取り上げ。

7.9 FB83区部材、FC82区割鬩斗瓦の出土状況を写真撮影。FB・FC80区で暗青灰色粘質土を除去し、基壇上面の精査。回廊東南の間の中央で、花崗岩製の小礎石（SX708）検出。

7.10 FC82、FB81・82区の部材出土状況の写真撮影と部材取り上げ。NB11・12区で基壇上面を精査し、地覆石抜き取り溝（SX710）検出。

7.11 FB・FC83区の部材取り上げ。NB12・13区の地覆材西端とその1間西の礎石の存否を確認するため、発掘区を西へ拡張。結果、礎石は原位置に存在するが、表面の風化激しく、蓮弁は不明。地覆材は途中で腐り西の礎石まで届かない。

7.12 FB81・82区の基壇上面を精査。82ライン上で幅約1mの暗渠（SX700）を認める。東面回廊西雨落溝（SD061）の南延長上にあたる。

7.15 FB81・82区の落下瓦と部材取り上げ。82ラインの南北暗渠（SX700）上層には瓦や部材が入っている。NB11・12区で「壁土」を取り上げる。

7.16 NB11・12区の地覆石抜き取り溝の掘り下げ。下で柱穴（SX713）検出。FB81区で地覆石抜き取り溝検出し掘り下げる。これらの抜き取り溝には鴟尾を含む瓦の破片がある。地覆材の支えか。FC80区で小礎石より新しい柱穴（SX709）検出。

7.17 NB・NC10区の出土部材（柱、頭貫）や82ライン南北暗渠（SX700）の瓦層を写真撮影。FA80～82区の基壇南縁外の暗灰色砂質土を掘り下げる。

7.18 蓮弁を彫った礎石の拓本をとる。NB10・11区、NC10・11区の部材（頭貫）と落下瓦の取

り上げ。割鬩斗瓦多い。茅負出土。

7.19 82ライン南北暗渠（SX700）上の瓦層の下には砂溝（SD731）があり、南へ次第に幅広くなり、基壇側石の南へ延びる。

7.22 FA81～NB12区の基壇側石南の暗灰色砂質土を掘り下げる。側石から0.4～0.5mで東西溝（SD705）を検出したが、湧水が激しく図面は一部しか取れなかった。南北暗渠（SX700）上の砂溝（SD731）を掘り下げ、暗渠の切石の側石が現れる。蓋石ははずされている。暗渠排水口両脇の基壇側石は南へ倒れていた。

7.23 発掘区全体の掃除。クレーンによる垂直写真撮影。ハイライダーによる遺構の写真撮影。

7.24 遺構の平面実測。基壇側石の立面図と土層図を作成。地覆抜き取り溝（SX710）の瓦を取り上げる。

7.25 遺構平面図および基壇側石立面図終了。南北暗渠（SX700）は蓋に榛原石、底に塼を用いているとわかる。清掃後に写真撮影し、蓋石を外す。

7.26 蓋石を外した南北暗渠を写真撮影し、のち実測。基壇側石の倒壊を防ぐため、基壇外側に砂を入れる。

7.29 南北暗渠を実測し、のちに側石と底塼の一部を取り上げる。調査区の南壁と西壁の土層図を作成。

7.30 礎石掘形、柱穴掘形、南北暗渠の排水口の補足調査。回廊礎石3個の型取り。

8.1 断割った礎石掘形や柱穴などの写真撮影と実測。発掘区に砂入れを開始。

8.5 南北暗渠（SX700）の土層図を作成。また、排水口の東・西の側石の抜き取り痕跡を検討する。

8.6 回廊礎石の実測。砂入れ終了。

8.7 重機等で発掘区を埋め戻す。道具小屋の撤去。

K 第11次調査

5 BYD-A・H地区

1996年10月21日～12月16日

10.21 第11次調査の開始。H区に中央区、A区に東区を設定し、上土を重機にて除去。ベルトコンベヤーや発電機などを搬入する。

10.22 測量基準点の移動（その後、川原寺跡など発掘のため一箇月余、調査を中断）。

11.25 中央区の調査再開。調査区の周囲に排水溝を掘る。

11.26 中央区では西端から砂と粘土の互層堆積土（暗灰色土、黒灰色土など）を掘り下げる。

中世の土器出土。西端で第7次調査区の遺構面を確認。

11.28 中央区西端付近では、黒灰色土下の青灰色粘土（整地土）上面で、瓦敷き面（SX750）を確認する。HP11区では黒灰色土上面の砂層中より建築部材出土。

11.29 建築部材取り上げ。大型の肘木と判明。東に向け互層堆積土の掘り下げ続行。

12.3 中央区西端から整地面上を調査。瓦敷き

第三章 調査概要

の北と南に東西小溝（SD751・752）を確認。写真撮影。

12.4 中央区遺構検出続行。ただし、東へとしだいに遺構が希薄になるとともに、地山面自体が脆弱となる。一層上の砂層で止め、調査区東端部分のみで地山面を確認する。中央区全景の写真撮影。午後から東区の掘り下げに入る。新しい木樋暗渠が顔を出す。一部掘り下げたが堆積土が厚く、調査を断念する。夕方、H区の西方に西区を設定。

12.6 前日の大雨の後始末。中央区の遺構実測。西区の上土除去。

12.9 西区では暗灰色土、暗褐色土掘り下げ。南北両側は緑灰色の地山層で、この間が南面の

東西大溝（SD625）か。午後から明日の航空写真撮影に向け、全調査区の清掃。

12.10 西区では東西大溝の輪郭を検出予定だったが、小溝などの遺構との重複関係が複雑なため時間切れで断念。調査区の輪郭のみを空撮する。昼前に全域の空撮を終了。午後から降雨のため現場作業中止。

12.11 西区では東西大溝（SD625）の検出と掘り下げ。東西大溝の写真撮影。

12.13 西区では平面実測およびレベル取り。東西大溝の断割りと土層図作成。

12.14～16 発掘機材の撤収と、中央区のHP11区壁面にかかる建築部材の取り上げ。西区一部の埋め戻し。調査終了。